

正教会の手引

まえがき

2004年に、正教会について学ぼうとする人たちのために「正教会の手引」が発行されました。

しかし、残念ながら誤植・誤記が多く、利用者には大変迷惑をおかけしました。この場を借りてお詫び申し上げます。この度、これら誤植を改め、また追記・増補を行い、「正教会の手引」の改訂版を発刊する運びとなりました。

本文の改訂・補筆の他に、各章の最後に「聖師父たちの言葉」を付加しました。また、改行を多くし小見出しをつけ、見やすいレイアウトにしました。図説も書き直して一ページの中に納めました。用語集も充実させ、索引を兼ねるように工夫しました。

「正教会の手引」は、正教会について知りたいことの概略がまとめられたものです。一通り読んでいただきたいことはもちろんですが、そのあともぜひ手元に置いておいて、事あることに参照するなどして、「便利帳」のような使い方をしていただけたら幸いです。

全国宣教企画委員会

目次

序	正教会について	5
第1章	正教会の歴史	
	①初代教会	10
	②ビザンチン時代	15
	③ロシア正教会	20
	④日本正教会	25
	⑤他派の教会	30
	聖師父たちの言葉——聖なる伝統	35
第2章	正教会の信仰	
	①信経	36
	②神	41
	③イイスス・ハリストス	46
	④聖神	51
	⑤教会	56
	聖師父たちの言葉——至聖三者	61
第3章	正教会の教え	
	①聖伝	62
	②聖書	67
	③罪と救い	72
	④生神女マリヤ、聖人、聖師父	77
	⑤愛	82
	聖師父たちの言葉——愛	87
第4章	正教会の世界観	
	①人間	88
	②天使と悪魔	93
	③自然	98
	④摂理	103

	⑤天国	108
	聖師父たちの言葉——天国	113
第5章	正教会の祈り	
	①機密	114
	②聖体礼儀	119
	③時課と一週間	124
	④教会の暦	129
	⑤私祈祷	134
	聖師父たちの言葉——祈り	139
第6章	正教会のかたち	
	①イコン	140
	②聖堂	145
	③聖器物や祭服	150
	④象徴や表信	155
	⑤聖職者と修道士	160
	聖師父たちの言葉——イコン	165
第7章	正教徒の心得	
	①参拝の心得	166
	②信仰生活	171
	③諸奉神礼	176
	④献金と奉仕	181
	⑤その他の慣習	186
	聖師父たちの言葉——信仰生活	191
第8章	正教会の早見表	
	①固有名詞対照表	192
	②聖書各巻一覧および各奉神礼書	196
	③年間主日祭日一覧	201
	④日本正教会と世界の正教会	205
	⑤正教会用語集	211

序 正教会について

正教会とは

正教会とは、キリストとその弟子たちから現代まで連綿と信仰を継承している本家本元のキリスト教です。

正教会は、英語で「オーソドックス・チャーチ (Orthodox Church)」といいます。「オーソドックス」に「伝統的」「保守的」という意味があるのは、私たち正教会がまさしく「伝統的」だからです。

「正しい教え」

「オーソドックス」とはもともとギリシャ語で、「オルソ」という語と「ドクサ」という語が合わさった言葉です。「オルソ」とは「正しい」という意味です。一方、「ドクサ」には二つの意味があります。一つは「教え」とか「考え」という意味です。正教会はその名のとおり「正しい」「教え」を伝えている教会なのです。

その「正しい教え」とは、すなわち神様とはどんなお方か、イエス・キリストとはどういう意味で救世主なのか、この世とは何か、人間とは何かなどについての正しい答えをもっているということです。

これは神様の導きのもとで明らかにされた「真理」をもっている、と言い換えることができます。正教会のもつ「真理」は、まず言葉で表現されます。それが聖書であり、教義とか神学とか呼ばれるものであり、そして祈りの言葉であります。

しかし「真理」は単純ではありません。言葉では表現しつくせない深淵なものです。「生きたもの」と言ってもよいでしょう。キリストご自身が「私は真理である」と言われています。正教会はその「生きた真理であるキリスト」を伝える教会です。

「正しい讃美」

さてもう一つ「ドクサ」には、「讃美」という意味があります。もっと正確に言えば「栄光（を神に帰す）」という意味です。すなわち、「オーソドックス」とは、「正しく神を讃美する、礼拝する」という意味があります。正教会の礼拝全体を「ほうしんれい奉神礼」といいます。正教会は奉神礼によって神様を正しく讃美し、正しい祈りをささげ続けています。正教会の奉神礼はかなり儀式的ですが、単なる儀式ではありません。実質がそこにあるからです。つまり単に人間が集まって神様をお願いごとをするのではなく、私たちが奉神礼に集まる時、必ずそこに神の臨在があるのです。言い換えるなら、正教会には「聖なるもの」が生きています。

「聖伝」

正教会が、「正しい教え」と「正しい讃美」をもつために守っていること、それが「聖伝」と呼ばれる伝統です。正教会の「正しさ」は「聖伝」にあると言っても過言ではありません。正教会の歴史は信仰の目から見ても、また客観的に見ても実際にキリストまでさかのぼることのできる生きた絆をもっています。

「東方正教会」

正教会は、また「東方教会」とか「東方キリスト教」と呼ばれることがあります。それは、ローマ・カトリック教会やプロテスタント諸教会が西ヨーロッパを中心に広がったのに対し、正教会はキリスト教が生まれた中近東を中心に、ギリシャ、東欧、ロシアへ広がったことを言い表しています。私たち日本人はキリスト教＝ヨーロッパという先入観をもっていますが、聖書の舞台となった地域は「西アジア」であり、正教会が発展したのも地中海世界においてですから、実際にはキリスト教＝アジア（東方）という見方が正しいのです。また「東方」とは、「日の昇る方角」つまり「救いの光」が現わ

れる教会という意味合いも兼ねています。

国単位で独立

正教会は「ギリシャ正教」と呼ばれることもあります。この場合、ギリシャの国の正教会という意味ではなく、正教会が育ち成熟した土壌が「ギリシャの文化」であったことを意味しています。新約聖書はギリシャ語で書かれましたし、教義の確立もギリシャ語によって行われました。また「ローマ」カトリックという名称に対応して、「ギリシャ」正教と呼ばれるというニュアンスも込められています。

正教会はそれぞれの国に伝道されると、その国の文化を重んじ、吸収します。しかし信仰の内容は同じです。器となる皿が違うだけで中身の料理は同じというのに似ています。そしてその国の正教会が成長し、成熟すると、独立という形をとります。人間が成長して親から独立するのに似ています。その独立した一つ一つの教会には主教がおり、その教会全体を^{つかさど}司っています。それぞれの国の正教会に歴史的な尊敬の度合いは違っても権威の優劣はありません。各々は区別されていながら一つに一致しています。これは「区別と一致」である三位一体の神を教会が映し出すからです。こういうわけで、正教会はその国の名前を頭につけて呼んでいます。すなわち、ギリシャでは「ギリシャ正教会」、ロシアでは「ロシア正教会」、アメリカでは「アメリカ正教会」、そして日本では「日本正教会」です。

この小冊子について

伝統を重んじる正教会は、他の教会では発展しなかった、また変化させた精神性やかたちをもっています。それで今、正教会のもつそうした伝統への関心が高まっています。例えば、信仰的また神学的な指導者である聖師父（一般では「教父」と言う）たちの教え、正教会の修道性、奉神礼の意義深さなど、またイコン（正教会で使用される^{キリスト}ハリストスや聖人たちの絵）や聖歌（アカペラで歌われる）

などが注目をあびています。しかし、それらが単に知識だけでとどまるのではなく、それらをきっかけに正教会の信仰の真髄にまで至ってもらうことが宣教の肝心な所です。そういう意味で、正教会に関心をもつ人、または洗礼を受けていても正教会がまだよくわからないという人たちのために、この小冊子を作りました。

できるだけやさしい表現をもちいて、正教会のもつ正しい教えの概略を説明したいと思います。正教会の用語は特別で難解のように思われますが、その用語も随時わかりやすく説明していきたいと思えます。

なお、日本正教会で使用される固有名詞が、他教会とは異なっているので煩瑣^{はんさ}な面がありますが、この書では基本的に地名は一般の名称を用い、人名は正教会の名称を使用してパウエル、イオアン^{ヨハネ}のように一般表記にルビをつけました。

また説明しました内容を整理して理解しやすくするために、各項目の最後のページに図解を入れてみました。

どの章にしましても、ここでの説明は正教会のほんの表面の部分です。正教会を、もっと深く知るためには、他の書をひもといてください。この小冊子が、正教会の全体像をある程度把握するための一助となれば幸いです。

正教会 = 伝統あるキリスト教

オーソドックス (Orthodox)

オルソ
正しい

ドクサ
教え (真理)
讃美 (奉神礼)

東方教会

ギリシャ正教

東方地域に
広がる教会

救いの光を
与える教会

ギリシャ文化
の中で成長

ローマ・カトリック
に対応した言い方

国ごとの独立

ギリシャ正教会

ロシア正教会

その他

(日本正教会)

アメリカ正教会

第一章 正教会の歴史

① 初代教会

教会とは

正教会の歴史を説明するには、最初にキリストとその弟子たちについてふれなければなりません。正教会は、キリストによって作られた教会そのものなのです。キリストは、十字架にかかり、死に、そして復活した後、昇天されました。そしてこの世の終わりに光栄のうちに再び来られます（「再臨」という）。このキリストの昇天と再臨の間の期間のために、キリストは私たちに「教会」を与えられました。

「教会」はギリシャ語で「エクレシア」と言います。これは「呼び集められた者の集まり」という意味をもつ言葉です。つまり「教会」とは、この世においてそして天国において神の言葉を守り、神の御旨と業を行うために招集された神の民の集まりです。

キリストと弟子たち

キリストは、凡そ30才の時に公に人々の前に現れ、神の国を教え、やがて十字架と復活という救いの業をなされました。このことを「公生涯」と言います。歴史的に言えば、ローマ皇帝ティベリウス在位（紀元後14～37年）の時代です。

キリストはその「公生涯」の最初から弟子たちをご自分のそばに招きよせました。弟子たちは次第に増えていき、その中から特別に12人を選びました。それが「十二弟子」とか「十二使徒」と呼ばれる人たちです。キリストは、単なる「教えの言葉」を与えるだけでなく、神の国の体験、人としての正しい生き方、正しい信仰を、生活をとおして伝授するために十二弟子を選ばれたのです。弟子たちはキリストを見、聞き、触れ、生きた交わりをした人た

ちでした。そして彼らはキリストスの「復活の証人」となりました。

教会の誕生と発展

弟子たちのもとへ聖神が降臨した時、彼らはキリストスの教えの意味、十字架と復活の意味を十分に悟りました。ここから彼らの力強い福音の宣教が始まりました。それで「聖神降臨」の日を「教会の誕生日」と呼ぶことがあります。

ペトルやパウエルといった最初の弟子たちは、使徒となってキリストスの復活の福音を全世界に伝えるために活躍しました。『使徒行実』にはその様子が記されています。使徒たちの教える福音を信じて洗礼を受ける人たちがどんどん増えていきました。彼等が「クリスチャン」と呼ばれるようになったのはアンテオケという町においてです。

使徒たちは、町々で自分の後継者を育てました。その後継者を中心とした教会が地方地方で大きくなっていきました。その後継者は、聖書では「長老」と呼ばれていますが、今でいう「主教」に当たる人たちです。その「主教」を中心とした教会は、三世紀末には、すでにローマ、アフリカ、エジプト、ギリシャ、小アジア（現在のトルコ）、アラビア、インドなどに広がりました。

初代教会の祈り

クリスチャンたちは毎週日曜日には集まって共に祈り、パンを裂いていました。これは今でいう「聖体礼儀」です。さらに「洗礼」やその他の祈禱が、定型の祈禱文によって執り行われました。この時代の祈禱文の一部は今も正教会の奉神礼の中で使用されています。クリスチャンたちが集まった場所としては、信徒の家や専用の集会所もありましたが、ローマでは「カタコンベ」と呼ばれる地下墓地に集まり、さまざまな壁画を書いて、信仰を固めていました。

迫害時代

当初の三世紀間、教会は迫害されていた時代でした。第一にユダヤ教徒から、第二に異教の民衆から、第三にローマ帝国からの圧迫を受けました。「クリスチャン」というだけで裁判、投獄、拷問、そして処刑された人たちがたくさんいました。それでも信仰を守った人たちのことを「致命者」（一般では「殉教者」）と言います。

また、教会の教えや信仰に対しての論争があり、教会外からその信仰を嘲笑する人たちがいました。キリスト教は、神々を拝まないため無神論者だとか、^{キリストス}ハリストスの体と血を食べる人食い人種だとか、愛を教える性的放縦者だとか、そのほとんどは全くの誤解や見当外れのものでした。それらに対して弁護をした「弁証家」と呼ばれる聖人たちがいます。「弁証家」たちは、正教会の「正しさ」を熱心に説いた人たちです。

異端者たち

教会の内部でも、その真理と信仰を歪める人たちがいました。彼等は「異端者」と呼ばれます。異端者は、正教会の正しさの一部を切り捨てたり別の教えを取り入れたりして、自分勝手な間違った教義を唱えました。例えば、グノーシスと呼ばれる異端者たちは、二元論の思想や異教の教義とキリスト教を混合させました。マルキオンという人は、旧約聖書は不要と主張しました。モンタヌスという人は、神の霊によって恍惚状態になることを救いの手段だと教えました。特に^{キリストス}ハリストスに関する異端については、第二章でお話しします。

成長していく教会

こうした迫害者や異端者から正教会を守るため、そして使徒の教えの正しさをしっかりと伝えるため、聖人や「^{せいしふ}聖師父」と呼ばれる指導者たちが生命をかけて戦いました。

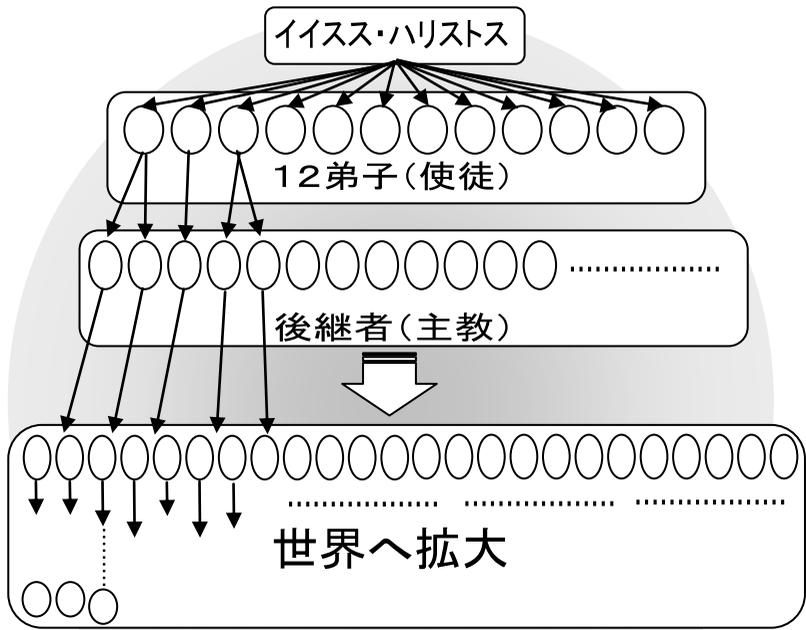
また「主教」が正統的な使徒の後継者であることが重要視されました。生きた信仰を生きた人間が伝えることの大切さは今も変わりません。

書き留められたあらゆる文書からどれが正統であるかを定める必要もありました。こうして新約聖書が収集され、聖書として認められました。このことを「正典化」と言います。

そして「何をどのように信じるのか」を端的にあらわした信仰簡条が各教会で作られました。この信仰簡条は、やがて「ニケヤ・コンスタンチノーブル信経」に集約され固定されます。これらは正教会の聖伝を正しく伝えるために行われたことです。

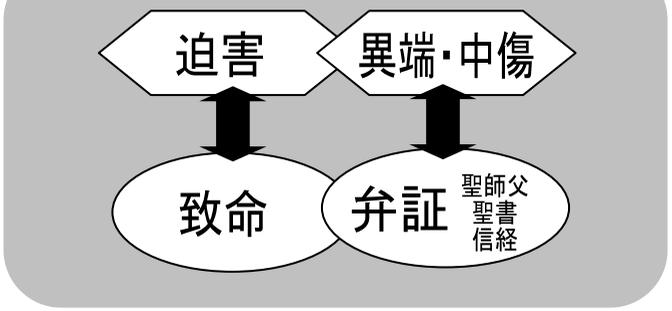
このように初代の教会は、迫害されていた時代にもかかわらず（「だからこそ」と言い換えてもよい）、規模としても信仰の内容としても目を見張るほど成長しました。

正教会は、この初代教会からの生きた信仰を今日まで伝えているキリスト教です。



正教会

初代教会



② ビザンチン時代

容認されたキリスト教

四世紀の初め、教会にとって重大な転換が起きました。それは、コンスタンチン大帝によるキリスト教の容認です。これによってローマ帝国による迫害の時代は終わりました。コンスタンチン大帝は、ビザンチウムという町に帝都を移し、「コンスタンチノープル」と名づけました。やがてキリスト教は国の宗教となり、守護される時代になりました。どんどん聖堂が建てられ、奉神礼は整えられ、聖器物は精巧を凝らされ、人々は生まれてすぐ洗礼を受け、こうして「ビザンチン帝国」と呼ばれるようになった国の中で、教会はみるみる大きく拡大していきました

修道の始まり

教会は経済的に豊かになっただけでなく、精神的な豊かさも生み出しました。その一つは「修道」です。最初、エジプトにおいて修道が行なわれ始めました。聖大アントニイや聖パホミイといった人たちが、人里離れた砂漠や洞窟などで、神との一致を求めて究極の生活を実践しました。修道士たちは、絶え間ない祈りとものいみ齋（節制）の生活をとおして、正教会の信仰を守り抜く人々です。

迫害時代には「致命」によって表明された生命がけの信仰が、平和な時代には「修道」によって表明されます。つまり正教会にとって「致命」と「修道」は一つのもので、修道には、たった一人で生活する隠遁の形と、共同体を作って生活する修道院の形があります。しかし、隠遁修道士のもとへ多くの弟子たちが集まったので次第に修道院が作られていったということもあります。修道院の中でもギリシャのアトス山の修道院は、正教会にとって非常に重要な存在です。

聖師父たち

教会の精神的な豊かさは、もう一つ「聖師父」（一般では「教父」と呼ばれる）たちの活躍です。説教が上手で「黄金の口をもつ」とあだ名された金口イオアンや、カッパドキヤの三聖師父とよばれる聖大ワシリイ、ニッサのグリゴリイ、神学者ナジアンザスのグリゴリイ、正教会の信仰をまとめたダマスコのイオアンなど、多くの聖師父たちが、正教会の正しい教えを確立させました。

七つの全地公会

正教会は、政治的には平和の時代を迎えましたが、しかし内部からその一致を乱す異端者は後を絶ちませんでした。そんな異端者たちと戦ったのも聖師父たちでした。そして、教会として正統さを守りぬくため、全部で七つの「全地公会」と呼ばれる会議が開かれました。

七つの全地公会

	開催地	年代	内容
第一	ニケヤ会議	325年	キリストを被造物と唱えるアリウスの説を退ける
第二	コンスタンチノール会議	381年	信経の決定
第三	エフェソ会議	431年	マリヤを生神女と認めないネストリウスの説を退ける
第四	カルケドン会議	451年	キリストに神性しか認めない単性論を退ける
第五	コンスタンチノール会議	553年	キリストに関する再定義
第六	コンスタンチノール会議	680年	キリストに神の意志しか認めない単意論を退ける
第七	ニケヤ会議	787年	イコンを偶像として否定する聖像破壊論を退ける

この他にも、重要な決定がなされた地方公会議がたくさんあります。

これらの全地公会で定義された教義的内容は、正教会の聖伝の中でも永遠に揺るがない部分です。正教会の信仰の根幹が、約 800 年の歳月をかけて築かれたことを見落としてはいけません。そしてこの七つの公会議の内容を忠実に守っているキリスト教は正教会だけです。

五大総主教区

さて、少なくとも六世紀ごろには、五つの大きな教会の中心地がありました。これらを「五大総主教区」と呼びます。その五つとは、コンスタンチノーブル、ローマ、アレキサンドリア、アンティオケヤ、エルサレムです。これら一つ一つには、信徒を監督し指導しまとめる「総主教」がいましたが、しかし彼らのうち、誰がえらいとか優れているとか支配権をもつかなどの抗争はせず、神のもとでみな同じであり、一致していました。

ローマ・カトリックの分離

ところが、町の規模としては、やはりコンスタンチノーブルとローマが大きかったので、次第に両者に亀裂が生じたことも事実です。またローマを中心とする教会は、ヨーロッパ地方への伝道に熱心だったこと、教会の権威を主張し「法王」という考え方を導入したこと、ラテン語の文化圏にあったこと、などから、次第に他の四総主教と違った歩みを始めました。こうしてローマを中心とした教会、つまり「ローマ・カトリック」と呼ばれる教会と、私たち正教会が袂をわかつことになってしまいました（凡そ十一世紀ごろ）。

七世紀になると、後に正教会を脅かしたイスラム教が勃興しました。モハメッドを祖とするイスラム教は、次第に勢力を広げ、十一世紀頃には、キリスト教を迫害し、聖地エルサレムを攻略しました。

これに対して聖地奪還の目的でカトリックから派遣された軍隊が「十字軍」です。しかし、最終的には目的は果たせず、時には目的を見失うようなこともしてしまいました。その中で最も注目されるのが第四十字軍で、彼等はエルサレムではなく、なんとコンスタンチノープルを攻略してしまったのです。これこそが正教会とカトリックの分離を決定付けた事件とされています。

ビザンチン帝国の終焉

ビザンチン帝国は、十五世紀にオスマン・トルコによって滅亡してしまいます。かつては正教信徒がたくさんいた町や地方は、今ではイスラム教徒で満たされています。しかし、約1000年間続いた正教の国において、正教会の教えは基礎を固め、不動のものとなったのです。またその間、正教会は、ブルガリア、セルビア、そしてロシアといった国々にも熱心に伝道され、正教会の信仰は途絶えることなく引き継がれていったのです。

五大総主教区

ローマ・カトリック

ローマ

コンスタンチノープル

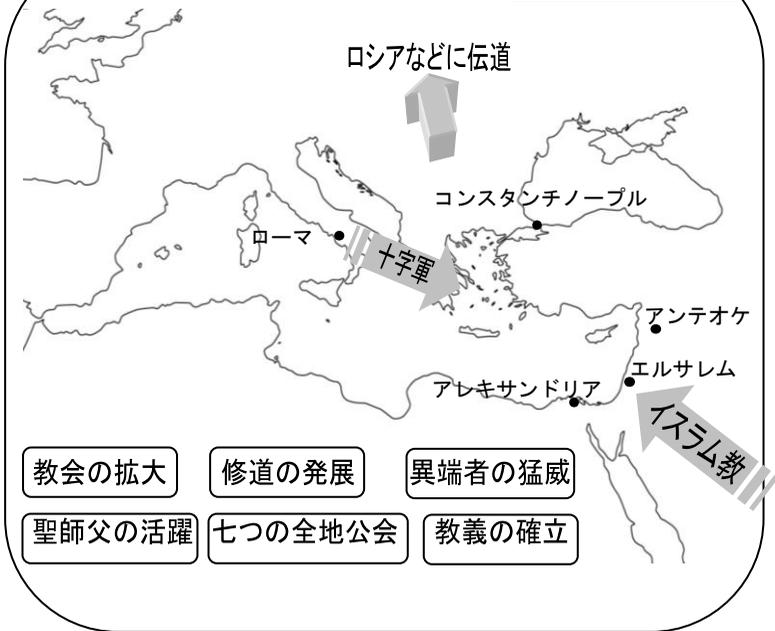
アンテオケ

アレキサンドリア

エルサレム

ビザンチン帝国

コンスタンチン大帝
キリスト教容認



③ ロシア正教会

ロシア正教会の始まり

九世紀の半ば、キリルとメフォディという兄弟が、スラブ民族に正教を伝道するために活躍しました。その頃スラブ語には文字がなかったため、彼等はスラブ語のアルファベットを、ギリシャ語を基に考案しました。後にキリル文字とも言われるようになったその文字を使って、教会の諸文書が翻訳され、奉神礼が行なわれ始めました。こうして彼等の活躍は、ロシアへの伝道と繋がっていきました。

988年に、キエフ公国の国民が、ウラジミル大公の指導によって正教会の洗礼を受けたことから、ロシアの正教会が始まります。ウラジミルは、国民にとって最良の宗教を選ぶために使節を派遣し、コンスタンチノーブルでの奉神礼の体験を報告した使節団の言葉を聞いて、正教を受け入れたというエピソードが残されています。ウラジミルは正教会を国教とし、民に^{キリスト}の教えを植付けた信仰深い聖人として敬われています。ウラジミルに多大な影響を与えた祖母のオリガや、戦いを放棄して無抵抗のうちに殺されたボリスとグレブという彼の息子たちも、ロシアに正教会が根付いたことを証しする聖人たちです。

ロシア正教会の発展

十一世紀のキエフ朝ロシアでは、修道精神が確立していきました。キエフの洞窟の中に作られた修道院で、^{キリスト}の福音が実践され、謙遜と愛の生活が育まれたのです。

しかし、十三世紀になるとロシアはモンゴルの支配下に置かれるようになりました。よく「タタールのくびき」などと呼ばれます。しかし、やがてモスクワ公ディミトリイによってモンゴル軍が敗退し、次第にタタール支配は崩れていきました。その時代の精神的支柱となった人物が、ラドネジの聖セルギイです。聖セルギイは、ロ

シアで最も敬愛されている聖人の一人です。

所有派と非所有派

ロシアはやがてモスクワを都とする帝国へと成長していきます。その際、「第三のローマ」という考え方が基礎をなしていました。第一のローマに続いて第二のローマであるコンスタンチノーブルが崩壊した後、モスクワがその後継者であるとして、「双頭の鷲」のシンボルをも継承しました。

そんな時代、教会では「所有派」と「非所有派」が論議を戦わせていました。修道院や教会は、国家や社会と密接に結びつき、財産を管理し、人々のための活動を行なうべきであるという主張をしたのが「所有派」の人々で、一方、修道院や教会は、財産の所有や管理からは自由であるべきであり、国家の支配下からも自由であるべきで、謙遜と清貧の中で静寂な祈りを求めなければならないとしたのが「非所有派」の人々です。結局、正教会は、この対立する二つの考えを、二つとも受け入れました。

ニーコンの改革

十七世紀のロシア正教会において特筆すべきことが二点あります。一つは総主教ニーコンの改革です。ニーコンは、その時代に執行されていたロシア教会の奉神礼が他の国の正教会と異なることに気がつき、諸外国とくにギリシャの習慣に合わせるよう訂正を求めたのです。これは教会の会議で承認されたものの、猛烈に反対する人々もいました。この反対者たちは、「旧教徒」とか「古儀式派」などと呼ばれ、現在でもそのロシアの古い奉神礼の習慣を守っています。

ペートル大帝

さてもう一つは、ペートル大帝による西欧化です。ペートル大帝は、ロシアの伝統に否定的な態度をとり、ヨーロッパの文明を極端

にそして強引に取り入れました。教会にもこの西欧化の波はかなり強くかぶさりました。「旧教徒」がこれにますます反対したのは言うまでもありません。神学や奉神礼、イコンや聖歌などにも西欧化の影響は及び、長い間、正教会を揺るがしました。特にペトル・モギラという人はラテン神学を取り入れた教義解説書や祈祷書を編纂しました。

ペートル大帝はロシアにおける「総主教制度」をも廃止し、そしてかわりに「聖務会院」という制度を作りました(1721年)。「聖務会院」は、皇帝の指名する役員によって構成され、教会を運営していく組織です。これは全く正教会の伝統とはかけ離れたプロテスタント的な制度でした。ロシアにおける聖務会院制は、皮肉にもロシア革命によって総主教制度が復活するまで続きました。

ロシア正教会の修道

しかし、正教会の根幹は揺るぐことなく、大いに信仰は花開き、精神性は高められました。祈りについての聖師父たちによる指導書である「フィロカリア」がロシア語に翻訳され、修道性が深められました。オプティナ修道院という所では、精神的な高德の指導者たちが続出しました。十九世紀のロシアには、サーロフの聖セラフィム、聖フェオファン・ゴヴォロフ、クロンシュタットの聖イオアン、府主教フィラレト、アレキセイ・コミヤーコフといった人々が、正教会の聖伝に基づいた信仰を輝かせました。

ロシア革命

ところが1917年、ロシアは共産主義による革命が行なわれ、ソビエト連邦となり、無神論の国になってしまいました。総主教制度は復活し、最初にティーホン総主教という優れた指導者を得たものの、信徒は迫害され、聖堂は壊され、修道院は没収されるというかつてない受難の時代を迎えたのです。スターリンは「宗教の自由」

と同時に「反宗教の宣伝の自由」を憲法に掲げ、公式に容赦なく教会を迫害しました。

この無神論者の支配下にある総主教制度に抵抗してロシア正教会から離れた人たちがいました。彼らは「在外ロシア正教会」と呼ばれました。しかし、2007年に、ロシア正教会と「在外ロシア正教会」の間に和解が成立し、もはや両者の溝はなくなりました。

ロシア正教会の復興

共産主義国家であるソ連は、約70年で崩壊しました。その迫害に耐え抜いた正教会は、ペレストロイカ以降、次々に息を吹き返し、活力を得、今、まさに大花を開かせています。スターリン時代にダイナマイトで爆破されたモスクワの救世主大聖堂が1997年に見事に再建されたことは、象徴的です。

ロシア正教会の歴史

キリルとメフォディ
によるスラブ伝道

10世紀

ウラジミル大公による正教会の受容

11世紀

キエフ洞窟修道院の始まり

12世紀

13世紀

モンゴルの支配下
(タタールのくびき)

14世紀

ラドネジの聖セルギイ

15世紀

所有派 × 非所有派

16世紀

ニーコンの改革 ↔ 旧教徒

17世紀

ペートル大帝による西欧化 → 聖務会院

18世紀

高德な正教指導者の続出

19世紀

ロシア革命 → 迫害 / 総主教制の復活 ↔

20世紀

ソ連の崩壊 → ロシア正教会の復興

21世紀

和解 ←

在外ロシア正教会



④ 日本正教会

日本正教会の始まり

日本にロシアから正教会が伝えられたのは、19世紀の後半のことです。文久元年（1861年）、日本への伝道を決意した聖ニコライが、函館にやってきました。聖ニコライは、その国の文化を否定せずに大いに受け入れてキリスト教の信仰を土着させるという正教会の聖伝にのっとり、その当初から日本人のための日本人による正教会を目指していました。それで聖ニコライは、日本の文化を学ぶため、日本語を習得し、「古事記」や「日本書紀」などを読み、仏教を学び、日本の風俗習慣を研究しました。そして、すぐに日本語による奉神礼ができるように、祈祷書を翻訳し始めました。

聖書、祈祷書などの翻訳

明治15年頃から、漢学者パウエル中井木菟麿がニコライの翻訳の補助に入り、次々と膨大な量の祈祷書そして聖書が翻訳されていきました。ニコライによる奉神礼書の翻訳は死の直前まで続けられました。私たち日本の正教徒は、この神に祝福されたニコライの翻訳の恩恵に与っています。ニコライは、奉神礼にふさわしい文体として漢語調の文語体を選びました。私たち現代の日本人には難解ではありますが、聖神の^{おんし}恩賜を伝える媒介として最善の言葉が選択されています。

日本人最初の正教会司祭

日本人として初めてニコライから洗礼を受けたのはパウエル沢辺琢磨、イオアン酒井篤礼、ヤコフ浦野大蔵の三人でした。中でも沢辺琢磨の回心のエピソードは注目されます。生粋の土佐藩士で坂本竜馬の従兄弟にあたる沢辺は、函館で剣術を教えていました。彼は最初、外国人を嫌い、ロシア人であるニコライを見て日本国を毒す

る輩と決めつけ、ある日、論争を持ちかけてあわよくば切捨ててしまおうとニコライのもとへ乗り込んでいったのです。しかし、ニコライの話の聞きうちに反対にその教えの高尚さに心打たれ、やがて正教会の信仰を熱心に奉ずるようになり、後には司祭となりました。

ニコライ堂建立

ニコライは明治5年頃、東京に伝道の本拠地を移し、正教会の伝道を熱心に行いました。教勢はめざましく発展して、日本全国に正教会の種がまかれていきました。明治18年には信徒数はすでに一万二千人を越えていました。

明治24年、東京の神田駿河台に、ビザンチン建築の「復活大聖堂」が建立され、ニコライの名に因んで「ニコライ堂」と呼ばれるようになりました。当時としては驚くべき大きさと荘厳なその姿は多くの人々の関心を引き寄せました。

聖歌やイコン

奉神礼に欠かせない聖歌の面についても、ヤコフ・チハイやデミトリイ・リオフスキーといった人たちが来朝して熱心に音楽の基礎を教え、日本音楽史上初めてと言われる四部合唱の聖歌隊が編成されました。彼等が編曲・作曲した聖歌は今でも歌われています。

明治時代、ロシアに留学してイコンを学んだ女性である山下りんの存在は、一般美術史の目からも注目されています。彼女の書いたイコンは、今でも各地の正教会に掲げられています。

日本に根付いた正教会

正教会の神学校もニコライによって創立され、聖職者だけでなくさまざまな分野で活躍する人々を輩出しました。正教会の信仰、教義、精神性などを伝えるために、多くの正教会関係の文書が翻訳、出版されました。正教会は日本全国各地に広がりました。日本正教

会には現在、修道士たちが本格的に修道生活を送る修道院や、教会運営の病院や福祉施設や大学などはありませんが、正教会の信仰はニコライによってしっかりと日本に根付きました。ニコライは使徒と同じような働きをした聖人として「亜使徒」と呼ばれます。

苦難の時代

日本正教会は、明治の後半から大正、昭和にかけて苦難の時代を迎えます。まず日露戦争によって、日本とロシアの関係が悪化し、正教会が白眼視されたことがあげられます。そして、偉大なる師ニコライが永眠します。優れた後継者であるセルギイ主教がその後を継承しますが、突然、ロシア革命という決定的打撃を被りました。日本正教会は、物理的にも精神的にも孤立無援の状態となり、あたかも幼い子供が母を失ったかのようなようでした。ロシア正教会に吹き荒れていた混乱が日本にも押しよせようとしていましたが、セルギイ主教は、しっかりと正教会の正しい聖伝を死守しました。

ところが引き続いて起こったのが、関東大震災によるニコライ堂の崩壊です。鐘楼が倒れ、ドーム屋根が崩落し、火災が起き、聖堂内部のものをすべて焼き尽くし、貴重な文献や多くの書籍なども焼失してしまいました。セルギイ主教は日本全土の信徒を訪問し、再建のための募金を集めました。こうして昭和4年に東京復活大聖堂は復興しました。しかし、日本の中では正教会だけでなくすべての宗教にとって政治的な統制を受ける困難な時代を迎えました。世界大戦の混乱と悲劇の中、終戦を迎える直前、セルギイ府主教は永眠しました。司祭や伝教師などが激減し、信徒の多くも離散してしまいました。

戦後の正教会

戦後、日本正教会は、アメリカ正教会から主教を迎えました。アメリカ正教会もロシアから伝道された正教会で、日本とは姉妹関

係にあります。そしてアメリカ正教会がロシア正教会から完全独立するのに伴い、昭和 45 年日本正教会も自治教会となりました。

自治教会とは、完全には独立しないものの、経済的には独立し、日々の教会運営を独自に行う教会です。自治となった後にフェオドシイ永島主教が最初の邦人府主教となり、日本正教会は低迷していた教勢や財政の立て直しに励みました。各地で聖堂が再建され、信徒の啓蒙教育や宣教活動が活性化されました。フェオドシイ府主教の永眠後、ダニイル主代府主教座下が新立し、現在、日本正教会は大きな希望をもって歩みを新たにしています。

日本正教会の歴史

明治

使徒ニコライによる日本への伝道



活発な伝道活動、日本全土への拡大
東京復活大聖堂の建立

聖書、祈祷書
などの翻訳

日露戦争

大正

ニコライ大主教の永眠
セルギイ府主教
関東大震災によるニコライ堂崩壊

ロシア革命

昭和

ニコライ堂の再建



アメリカ正教会から主教渡来

戦前
戦中
戦後の
混乱

平成

日本正教会、自治教会となる
フェオドシイ永島府主教

教勢、財政の立直し
各地で聖堂の再建

ダニイル主代府主教

⑤ 他派の教会

異端者

キリストが始められた教会は一つです。しかし現実的に教会の中の人々は分裂してしまいました。新約聖書の時代、すでに教会には争いや対立などがありましたが、聖使徒パウロは熱心に教会の一致を説きました。しかし教会の中から出てきたアリウスとかネストリウスといった「異端」に関しては、正教会は一致を求めらなく完全に教会の外に追放しました。だからこそ正教会の正しい教えが守られてきたのです。

同じ正教会（オーソドックス）と呼ばれるものの、すでに5世紀ごろから分離した教会があります。キリストに神としての一つの本性しか認めない「単性論派」の教会です。現在、エチオピア正教会、コプト正教会、シリア正教会、アルメニア正教会などがあり、非常に伝統的である点はまさしくオーソドックスです。これらの教会と私たち正教会との正式な和解は未だですが、歩み寄りはなされています。

カトリックとの分裂

「②ビザンチン時代」で少しだけふれたように、ローマ・カトリックと正教会の分岐が起きました。実は地理的な問題、文化的な問題、政治的な問題もあいまって、ローマを中心とする教会と正教会は早い時期から亀裂を生じていました。「カトリック」とはもともと「完全」とか「普遍」とか「公」という意味をもつギリシャ語で、正教会も、すべての時代すべての場所に共通する真理をもっているという意味では、「カトリック」です。しかし、ローマ・カトリックでは、ローマ法王を最高権威として全世界の教会を支配するという意味をもっています。そういう意味では正教会は「カトリック」ではありません。正教会とローマ・カトリックとでは明らかに伝統も

歴史も文化も神学も組織も異なります。日本では認識不足の故に、しばしば正教会がカトリック教会の一つとして説明されたりしますが、全くの誤解ですのでご注意ください。

カトリックとの相違

ローマ・カトリックと正教会の違いは、ここでは説明できないくらい大きくまた細部に渡ります。一番大きな差は、全世界の最高権威を主張するローマ法王を正教会は認めないことです。神^{キリスト}以外に世界の最高権威は存在しません。習慣的な差としては、カトリック教会側が妻帯司祭を認めないこと、ミサに無発酵パンを用いること、礼拝に楽器を使用することなどがあげられます。つまり正教会では、妻帯者を司祭に任命することができ、聖体礼儀には発酵パンを使い、奉神礼では一切楽器を使用せず肉声だけで行ないます。他にも十字架のきり方、聖堂の建て方、美術に対する姿勢などの違いがあります。神学的にはマリヤ様に関すること、三位一体の神に関する教義の違い（「フィリオケ」問題という。第二章の④を参照）、煉獄という考えの是非、さらには^{キリスト}の十字架に対する見解の差もあります。ローマ・カトリックでは20世紀までずっとラテン語でしか礼拝をしなかったこともあげられるでしょう。しかし、1967年の第二バチカン公会議以降、ローマ・カトリックも様変わりし、各国の言葉を受容し、礼拝の刷新が行なわれたようです。

プロテスタント

こうしたローマ・カトリックから分離したのが「プロテスタント」と呼ばれる諸教会です。16世紀頃、マルティン・ルターが始めた宗教改革によって、次々とローマ教会から離れて独自の歩みを始める教会が続出しました。「プロテスタント」とは「抗議する」「反抗する」という意味で、ローマ・カトリックの言うことなすことに反

対して生まれた教会です。当時のカトリックは、墮落していた時代ともいわれ、「免罪符」を買えば罪の赦しが得られるなどと言われていたことは有名です。信徒に聖書を読ませず、ただ教会のいうなりにされていたことに対して、宗教改革者たちは正しくも反論したのですが、反対し過ぎてしまい、中庸を保てませんでした。

プロテスタントの特徴

カトリックの伝統重視に対しては「聖書のみを信じるべきである」と言い、徳や献金による救いに対しては「ただ恵みによって信仰によって人は義とされる」と説き、圧力的な教会階級制度には「万人が司祭である」と唱えました。一口でいえば、「自由」がプロテスタントの本質です。だからこそ、様々な主義主張がなされ、対立し、多くの派に分かれています。まるで細胞分裂するかのように分派し今では数百、数千もの教派があると言われていています。

つまり「プロテスタント」という一つの教会があるのではなく、色々な教派の教会をひっくるめてそう呼ばれているのです。有名な教派としては、ルター派、カルヴァン派（改革派）、バプテスト派、メソジスト派、福音派などがあります。イギリス国教会である「聖公会」もプロテスタントの一つですが、伝統を重んじる面もあり、正教会に近い点もあります。

プロテスタントとは歴史的に新しく出てきた教会なので「新教」とも呼ばれます。これに対してローマ・カトリックは「旧教」と呼ばれます。正教会は「旧教」でも「新教」でもありません。「正教」です。

新教との相違

新教の教会は普通「聖書のみ」がキリスト教の土台であり、聖書に書いてないことは教会として認めないという立場をとります。しかし、聖書は正教会の聖伝から生み出されたのです（実際的な面か

ら見ても聖書を原語のギリシャ語で写本して守ってきたのは他ならならぬ正教会です！)。もちろん、正教会はその聖書に根ざした信仰を正しく守っています。

プロテスタント各派は、正教会のイコンを偶像視しますし、十字架なども切りません。中には三位一体の神を唱えなかったり、^{キリスト}ハリストスが人となった神であることも無視したり、ただ愛の教えを命がけで説いたお方だとか、十字架によって人類の負うべき罪(罪というより罰)を^{キリスト}ハリストスが身代わりに背負ってくれたことが救いであるとだけ言って満足する教会もあります。

新興宗教

これらの他に、「新興宗教」とよばれる教会が大いに勢力を増しています。彼らは「キリスト」や「聖書」を用いますが、実は「キリスト教」ではありません。終末論を曲解して不安を与え、教祖の教えを救いとして提示し、勢力拡大を熱心に行うカルト的な宗教です。惑わされないように気をつけましょう。



聖師父たちの言葉——聖なる伝統

「聖師父たちは、聖なる伝統を、聖書を解釈するための安全な導き手、そして、聖書の中に含まれる真理を理解するのに絶対に必要なものと見なしている。」(エギナの聖ネクタリオス)

「聖なる伝統は、教会そのものである。聖なる伝統なしでは、教会は存在しない。聖なる伝統を拒む者は、教会を、そして使徒たちの教えを拒むのである。」(エギナの聖ネクタリオス)

「私が聖師父たちによって教えられた信仰、私がいつでも何度でも教えている信仰、この信仰を教えることを私は決してやめない。私は、それと共に生まれ、それによって生きているのだから。」(神学者聖グリゴリイ)

「ハリストスご自身が、パウエルに語りかけ、呼びかけられた時、彼の目を一度に開け、完全なる道を知らしめることもできたであろう。しかし、そうではなく、ハリストスは彼をアナニヤに遣わし、アナニヤから真理の道を学ぶように告げたのである。“さあ、立って町に入って行きなさい。そうすればそこであなたのなすべき事が告げられるであろう”(使徒行実9:6)このように、ハリストスは我々に、先に道を行く人に導いてもらうように教えている。それは、パウエルに与えられた幻が、間違って解釈されないためである。そうでないと、後の代の人々が、真理を、師父によってでなく、パウエルのように直接神からいただいたと無遠慮にも思ってしまうようになるかもしれない。」(聖イオアン・カシアン)

「我々は師父たちが置いた永遠の境界線を変えない。我々が受け取ったように、その伝統を守る。」(ダマスコの聖イオアン)

第二章 正教会の信仰

① 信経

信経(しんけい)

正教徒は何を信じているのですか、と問われたとき、それに対する確かな答えを私たちはもっています。それが「信経」と呼ばれる信仰箇条です。正教会の信徒ならば、この「信経」は暗記するぐらい知っておかなければなりません。「信経」は、洗礼を受ける時だけでなく、聖体礼儀が行われる度に唱えられます。

「ニケヤ・コンスタンチノーブル信経」

この「信経」は、正式には「ニケヤ・コンスタンチノーブル信経」と言います。それはニケヤにおける第一全地公会（325年）とコンスタンチノーブルにおける第二全地公会（381年）において確定されたものだからです。

初代教会では、キリスト教信仰の表明にはいくつもの異なった形、たくさんの信仰箇条がありました。その古いものの中の一つとして「使徒信条」と呼ばれるものを新教などでは使用していますが、正教会では、この「ニケヤ・コンスタンチノーブル信経」のみを正式に採用しています。

神・父と神・子は同本質

第一全地公会は、^{キリスト}スに関する異端に対して正しい信仰を明確にするために開かれたものでした。^{キリスト}スは、神によって造られた超人的なお方である、と主張したアリウスという人がいました。正教会はこの主張に対して、神の子である^{キリスト}スは神から生まれたものであって造られたものではない（生まれし者にて造られしに非ず）と反論しました。

「神によって造られた」のであれば、神の子は「神」とは違う本質をもつことになってしまいます。しかし、ハリストスは、「神・父より生まれた」ものであり、実質的に「神の子」です。人間の子が人間であるように、「神の子」は「神」なのです。

それをもっと明確にするために、「信経」では「父と一体」と言っています。この「一体」と訳されたギリシヤ語は「ホモウシオス」といい、「同本質」という意味です。ハリストスは、神・父と同じ神としての本質をもっている、ということです。

ただし、神の子が神・父から「生まれる」という表現には限界があります。だから第一全地公会では、「神の子が存在しなかった時があるとか、生まれる前にはいなかった…などという者は破門にする」と但し書きを付加しました。

また、聖神も神であるということについては、コンスタンチノープルにおける第二全地公会で確信されました。さらに教会について、洗礼について、来世の生命についての信仰箇条も追加されました。

「理解」を超えて「信じる」

さて、「信経」では、神であるハリストスが、マリヤをとおして人間になったこと（せきしん藉身という）、そして十字架につけられたこと、死から復活したこと、天に昇ったこと（昇天という）、この世の終わりに再び来られること（再臨という）、そしてそれらがすべて私たち人間の救いのために行われたことを信じていると表明します。藉身も十字架も復活も昇天も再臨も、私たちの通常の物事の理解を超えていることです。しかしだからこそ、「信じる」必要があります。

もちろん、何も知らないもの、を信じることはできません。盲目的に信じるのではなく、よく吟味した上で「信じる」ことが必要です。知識と理性は「信仰」に必要なものです。しかしながら、すべて人間の理屈に合わないからといって「受け入れられない」というのは、「信仰」から遠い態度です。

「信仰」とは

「信仰」とは、「仰ぐ」相手を「信じ」るということです。私たちにとって、それは唯一の神様であり、その神様が言われることなされることなら信じて受け入れようとするのが「信仰」です。神さまに従う意志をもって生きる、神にすべてを委ねるのです。

たとえ自分は神が存在するという信念をもって生きているという人がいても、それは信仰ではありません。その人は神様を信じているのでなく、神様はいるにちがいないという自分の考えを信じているだけです。

また、自分のしあわせのために信心深くあろうとする人がいても、それは信仰ではありません。その人は、自分のしあわせや生活の快適さという目的のために、神様を利用しているにすぎません。「信心」とは信じる心が大切であって、信じる対象にはこだわらないという態度です。

また信教の自由だから宗教は自分自身で選ぶものという考えもありますが、それは唯一の神様への信仰とは矛盾してしまいます。宗教はいくつもありますが、神様はただ一つの神様なのです。

「我、信ず」

トーマス・ハプコ神父は、信経が「我」という一人称を使用していることを次のように説明しています。

「信仰とは、恒に個別的（パーソナル）なものです。人はそれぞれ自分自身のために信じていなければなりません。信じるのは他の誰かでなく自分です。多くの人々が同じものを信じ、信頼しています。なぜなら、彼等の知識、理性、体験、確信が一致しているからです。一つの信仰の共同体、信仰の一致が存在し得ます。しかし、この共同体と一致は、必ず個別的（パーソナル）な信仰があつて始まるものであり、その上に支えられています。」

至聖三者

正教会は、唯一の神様でありながら、神・父も神であり、神の子も神であり、聖神も神であるといえます。まるで三つの神様がいるように聞こえますが、そうではなくあくまでも唯一の神様です。このことを「三位一体」、正教会では「至聖三者」と言います。三つが一つであり、一つが三つというのは普通の理解を超えていることで、神の神秘としか言いようがありません。だからこそ、「我、理解す」とは言わず、「我、信ず」と言っているわけです。

キリスト教は、このように、三位一体の唯一の神を信じ、^{キリスト}の藉身や復活を信じ、聖神を神として拝んでいます。もし、三位一体など受け入れられないとか、^{キリスト}は単にユダヤ教を改革した偉い宗教的人物であって復活なども実際にあったのではなく弟子たちの心理的な変換に過ぎないなどと教える教会があったら、たとえ^{キリスト}の尊い教えを宣べ伝えていても、それはキリスト教ではありません。

「信経」の本質的な意味を受け入れるということが、正教会の信徒になるということなのです。

信經

われ しん ひとつ かみ ちち ぜんのうしや てん ち み み
我、信ず、一の神・父、全能者、天と地、見ゆると見えざる
ばんぶつ つく しゅ
万物を造りし主を。

また しん ひとつ しゅ かみ どくせい こ よろずよ
又、信ず、一の主イイスス・ハリストス、神の独生の子、万世
の前に父より生まれ、光よりの光、真の神よりの真の神、
う まれしもの つく あら ちち いったい ばんぶつ かれ
生まれし者にて造られしに非ず、父と一体にして、万物、彼に
つく
造られ、

われ ら ひとびと ため またわれ ら すく ため てん くだ せいしん およ
我等人々の為、又我等の救いの為に天より降り 聖神 及び
どうていじよ み と ひと な
童貞女マリヤより身を取り人と為り

われ ら ため と き じゅうじか くぎ くる
我等の為にポンティイ・ピラトの時、十字架に釘うたれ苦し
みを受け葬られ

だいさんじつ せいしょ かな ふっかつ
第三日に聖書に叶うて復活し

てん のぼ ちち みぎ ざ
天に升起父の右に坐し

こうえい あら い もの し もの しんぼん ため ま きた
光栄を顕わして生ける者と死せし者を審判する為に還た来り
その国、終りなからんを

また しん せいしん しゅ いのち ほどこ もの ちち い ちちおよ こ
又、信ず、聖神、主、生命を施す者、父より出で、父及び子
とも おが ほ よげんしゃ もつ い
と共に拜まれ讃められ、預言者を以てかつて言いしを

また しん ひとつ せい おおやけ し と きょうかい
又、信ず、一の聖なる公なる使徒の教会を

われ みと ひとつ せんれい もつ つみ ゆるし う
我、認む、一の洗礼、以て罪の赦を得るを

われ のぞ ししや ふっかつ なら らいせい いのち
我、望む、死者の復活、並びに来世の生命を アミン

② 神

唯一の神について

「信経」では、まず「**我、信ず、一つの神**」と言います。神様は唯一であることが第一に信ずべきことなのです。

ある人は、神様などいないと主張します。哲学的に考えたり科学的に考えたりして**無神論**を唱える人もいますが、苦難や不幸の故に「神などいない」と思う人もいます。私たちは、どんなことがあっても**無神論**に陥ってはなりません。

またある人は、自然の中に満ちている力そのものが神であるなどと言います（**汎神論**）。よく「宇宙の霊的なエネルギー」とか「科学では証明されない不思議なパワー」などと言って、特別な儀式などをとおしてその力との一致を唱える人たちもいます。しかし、それは私たちの信じる**唯一の愛の神**ではありません。

同じように、「宇宙の根本」とか「世界の第一原因」などといって神を理論づけようとする人たちもいます。論理を組み立てて人間の狭い理解で神を把握しようとし、抽象的な概念として神を定義づけようとし（**理神論**）。しかし、それは私たちの信じる**唯一の生きた神**ではありません。

また、それぞれの自然の中に宿る神秘的な力を神として崇める考え方があって、それによれば山や海や木や岩や星や動物や、そして人間も神になります（**多神論**）。所謂「八百万の神」であり、偶像崇拝の宗教です。その人々は初日の出を見て太陽を拝みますが、私たちは太陽を創造した**唯一の神**を拝みます。

さらに、そんな多くの神々の中から優位に立つ者を選んで、その一つだけを崇拝の対象にする考え方もあります（**単一神論**）。しかし、それだと人間の都合によって、神が交替してしまいます。「一つの神」を信じているといいながら他の神々の存在を否定しないので、**多神論**であることに変わりありません。私たちは、神々の中から一

つを選んでいるのではなく、「唯一」の神を信じています。つまり他に神を認めず、絶対的な神様を信じているのです。

位格をもつ神

私たちは、その唯一の神を「父」と呼びます。それは第一に神の子^{キリスト}ハリストスとの関係を明示しています。つまり神が「父」「子」「聖神」の三位一体の神であることをすでに表明しているのです。三位の「位」とは、「ペルソナ」とか「ヒポスタシス」などと言われる言葉の訳語で、他にも「位格」とか「個位」など訳されます。普通は「人格」とも言われますが、神様ですから「人格」ではなく『神格』といったほうが正確でしょう。つまり、神には三つの『神格』があるのです。しかし、その三つはまったく同じ神としての本性をもっているのです、一つの神でもあるのです。

三位一体でないもの

三位一体そのものを説明するよりも、三位一体でないもの（異端の教え）を説明し、それを否定する方がより容易です。

まず、神・子と呼ばれる^{キリスト}ハリストスと聖神は、神によって造られたものであって神そのものではないと教える異端があります。これは真っ向から三位一体を否定しています。

次に、神様は、時代によってご自分を表す形態を変えていったと教える異端があります。つまり、一人三役というわけです。旧約時代は「父」として、新約時代は「子」として、その次には「聖神」として神様が仮面を変えていったと言っているようなものです。これは神の三つの『神格』を否定しています。

もう一つ、神様の内部を三分割して考えようとする異端があります。つまりちょうど一人の人間の中に意志と肉体と霊があるように、父と子と聖神を分けて把握しようとするわけです。これは三位一体の神を概念としてしかとらえていません。

もちろん、父と子と聖神という三つの神々がいて、それぞれ息をあわせて人間界を管理しているなどいうのも異端です。神は唯一の神なのです。神が三位一体であることは、神によって造られた人間の存在の基礎であり、救いの根源です。

父なる神

さて、神を「父」と呼ぶのにはもう一つの意味があります。それは私たち人間との関係です。キリストと「父」は本質的な親子関係ですが、私たちと「父」なる神とは本質的ではなく恩寵による親子関係です。私たちは、神様に似せて創造された存在だからです。神様は抽象概念でも無人格な力でもなく「生きたお方」であり、父が子を愛するように、私たちを愛しているという意味も「父」の言葉の中に込められています。

全能なる神

その生きた愛の神は「全能者」です。つまり、「全て」のことが「可能」である、神には何でもできる、神様にできないことは何もない、という意味です。しかし、この神の「全能」を理屈でこね回したりしてはいけません。神様なら〇〇ができるはずなのに、実現できていないのだから全能なる神などいない、とってははいけません。自己矛盾することは全能の神にもできません（正確に言えば「なさらない」）。能力としてできないのではなく、矛盾しているからできないのです。しかし、神は「全能」であり、私たちの知恵をはるかに超えた偉大な力をもっておられることは、信仰深く受け止めるべきことです。「神には何もできないことはない」と言った天使の言葉を信じたからこそ、マリヤはキリスト神を生む女性となったのです。

天地創造の神

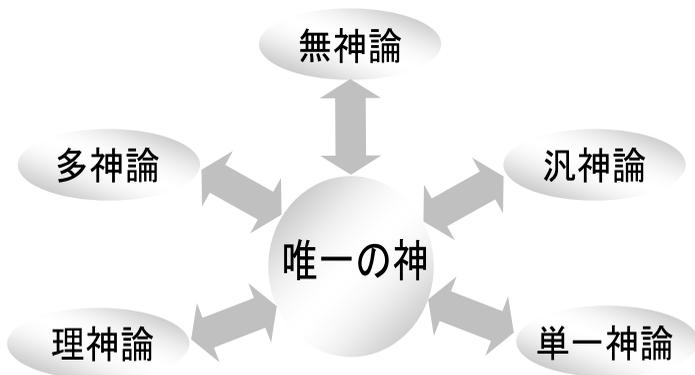
神は全能の力で「天と地、見ゆると見えざる万物」を創造されま

した。神が万物を創造されたと信じる時に注意しなければならないことが、三つあります。

第一に造った者と造られたものとは明らかに本質的に違うということです。神はこの世を造った以上、この世の中にはいません。この世を越えた存在です。しかし、造られたこの世の中には、その神の創造の力がみなぎっていることは確かです。

第二に、神は万物を「無から」創造されました。創造すべき材料が始めからあってそれを組み立てたのではありません。「見えるもの」も「見えないもの」もすべては、何もないところから造られたのです。万物には全くの「始まり」があるわけです。「始まり」がないのは神様だけです。

第三に、神は万物をすべて「善」なるものとして創造しました。神様が造ったもので、悪いものは何一つありませんでした。「物質は悪、精神は善」という二元論は否定されます。三位一体の神が万物を無から善として創造された、これを信じるどころから信仰のすべてが始まります。



||



||

ヒポスタシス (ペルソナ) = 「位格」(「人格」「神格」)



③ イイスス・ハリストス

人となった神ハリストス

イイスス・ハリストスとは、「神様が人間になったお方」です。このことを正教会では「^{キリスト}藉身」と言います（一般では「受肉」という）。藉身とは、難しく言えば、三位一体の神のうち「神・子」と呼ばれる『神格』が人間性を取ったということです。正教会はこのように明確な答えをもっていますが、ハリストスとは一体どんなお方かに関しては、何百年もかけて論議されたことでした。言い換えれば、さまざまな教えの中で、正しい教えが聖神の導きによって明らかにされていったのです。イイスス・ハリストスを間違っただけで信仰しないように、以下にその異端とされた教えを紹介します。

仮現論 見えない神様が人間の肉体をとる筈はなく、ハリストスは人間のように見えたけれども、それは実は幻である、という異端があります。「仮現論」と呼ばれます。新約聖書にはすでにこの異端に対して論駁している箇所があります（^{ヨハネ}第二 1:7、他）。

養子論 ハリストスは、あくまでも人間であって神様ではなく、ナザレのイイススが最高の宗教的人物として神に認められただけである、という異端があります。ある人間が「神の子」として認知されたというわけなので「養子論」と呼ばれます。今でもこういう考えをもっている人たちがいます。ハリストスの教えのみを大切に、藉身については無視しているわけです。

アリウスの異端 神・子は、神によって創造された超人的存在であると主張した異端があります。その提唱者の名をとって「アリウスの異端」と呼ばれます。聖書の中にあるハリストスの人間的な面と超人的な面をうまく説明しているのが、四世紀ごろに大流行しま

したが、正教会は第一全地公会でこの異端を排斥しました。

アポリナリウスの異端 ^{キリスト}の藉身について、人間は肉体と霊とに分けられるがその肉体の部分が人間で霊の部分が神であると考えた異端があります。その提唱者の名をとって「アポリナリウスの異端」と呼ばれます。これは、^{キリスト}には人間としての霊がないといっているのと同じですから、いわば動物に藉身したことになってしまい、ナンセンスです。

ネストリウスの異端 ^{キリスト}の神としての本性（神性）と人としての本性（人性）を、きっぱり分離して考えたために、あたかも^{キリスト}の中に二人の人格があるかのような主張する異端があります。提唱者の名をとって「ネストリウスの異端」と呼ばれます。ネストリウスは、マリヤを「生神女（神を生んだ女性）」と言ってはならないと、教えたのです。マリヤは^{キリスト}の人性を生んだのであって、女神であるかのように神性を生んだのではない、という理由からです。しかし生まれた^{キリスト}は一つの『神格』しかもたないお方ですので、「神を生んだ」ということができます。つまり、正教会は「生神女」という用語を正統的なものと認めました。

単性論 ^{キリスト}の藉身の瞬間、偉大なる神性の中に小さな人性は溶け込み、変化し消失したのであって、^{キリスト}はもはや人ではなく神でしかない、という異端があります。^{キリスト}に一つの本性しか認めないので「単性論」と呼ばれます。しかし、これは本性と格の区別の混乱によるものと思われます。私たちにとって、^{キリスト}は、一つの格（『神格』）と二つの本性（神性と人性）をもつお方です。そして、その二つの本性は、「混合せず変化せず分かれず離れず」に完全に一致しています。

単意論 「単性論」の延長として「単意論」という異端があります。キリストスに神としての意志しか認めない考え方です。これに対し、ハリストスには神の意志と人の意志の両方があり、その二つは一致しているというのが正教です。

聖像破壊（イコノクラスム） イコンは偶像でありイコンを描くことは神学的にゆるされないと教える異端があります。しかし、キリストスは人間の体という見える形もとったのですから、藉身を正しく受け止めるならば、イコンの正しさが認められます（第六章の①を参照）。

ハリストスによる救い

キリストスとは、完全に人間になった神様である、というのが単純でしかし理屈を越えた信仰なのです。藉身は、「我等人々の為、又我等の救いの為」になされたことです。

神は人間になって何をなさったかということ、もちろん神の国の福音を教えました、それは、救いの業というより、救いとは何かの解明です。キリストスの救いの業は十字架と復活なのです。

イイスス・ハリストスの生涯

藉身された神・キリストスは、今から凡そ二千年前、ユダヤの地にナザレのイイススとしてマリヤから産声をあげました。イイススという名前は「救う者」という意味をもっています。

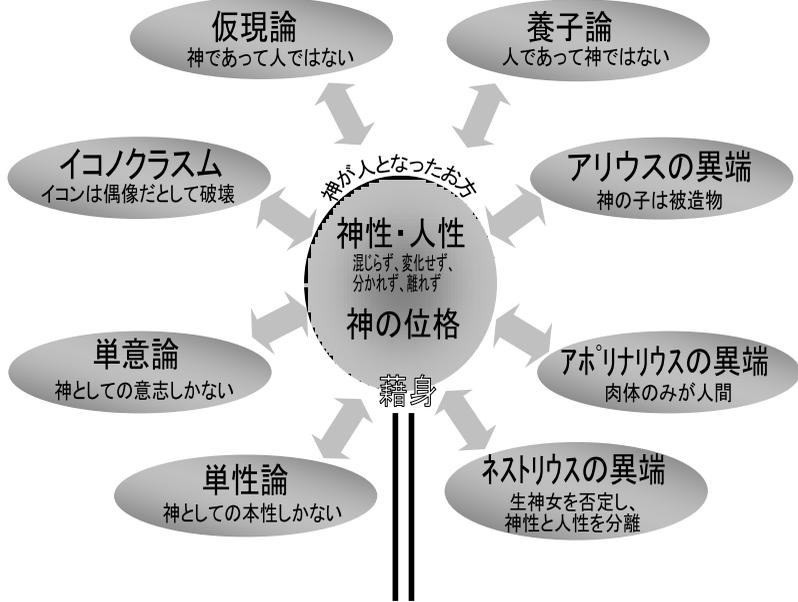
イイススは、凡そ30歳の頃、前駆授洗イオアンよりヨルダン川で洗礼を受け、神の国の福音を教え始めました。また病者をいやしたり嵐を静めたり食料を増加させるといった数々の奇跡を行いました。

しかし、当時のユダヤ教指導者層からの妬みによって、十字架で処刑されました。ところがキリストスは死から復活したのです。

「ハリストス」の意味

当時のユダヤはローマ帝国の支配下にあり、民はみなローマからの独立を望んでいました。その夢をかなえてくれる者を「メシア（救世主）」と呼んでその到来を待望していました。「メシア」とはヘブライ語で「油つけられた者」という意味です。「ハリストス」はその「メシア」をギリシャ語で意識した言葉です。旧約聖書の時代、王の任命式には油を塗る儀式がありました。それで人々は王の中でも最高の王であったダヴィドの再来を願い、「王＝油つけられた者＝メシア＝ハリストス」を待っていたのです。しかし、イエス・ハリストスは、そんなこの世的なメシアではありませんでした。もっと深い根源的な意味での人間の救いをもたらす救世主なのです。イエスというお方は実は神が人間になったハリストス（救世主）である、と信仰するのがキリスト教です。

復活したハリストスは、人間であることをやめないまま昇天しました。私たち人間を天にまで引き連れていくためです。神から離れて罪と死の世界に虐げられている私たちを、再び新しい者として復活させて神と結合させるために、藉身と十字架と復活と昇天が行われ、そしてやがて再臨されるのです。



イイス・ハリストス

「救う者」という意味の名前 メシア(油つけられた者):救世主



④ 聖神

聖神の「神°」について

一般では「聖霊」と言いますが、正教会では「^{せいしん}聖神」と言います。「聖神」の「^{しん}神」は、ギリシャ語の「プネウマ」英語の「スピリット」を意味します。日本正教会では、神の「プネウマ」や人間のもっている精神的（スピリチュアル）な面を表すものとして「^{しん}神」という言葉を選んでいますが。「神（かみ）」と同じ漢字なので区別するために右肩に「°」をつけて「神°」と表記することもあります。しかし、いわゆる「^{しんぶ}神父」という言葉も「神様の父」ではなく「^{しん}神の（スピリチュアルな）父」という意味なのですから、全く特別な言葉というわけではありません。

「霊」という言葉は、ギリシャ語の「プシヒー」英語の「ソウル」もしくは「ゴースト」に当たる言葉であり、どうしても「幽霊」や「動物的な霊」をイメージしてしまうので、正教会では「聖霊」ではなく「聖神」という用語を大切にしています。

神・父と神・聖神は同本質

聖神は、^{キリスト}ハリストスと同じように父と一体（同本質）です。すなわち聖神も神そのものであるお方です。聖神は神が造ったものであるとか、神の力を表す名称に過ぎないなどという考え方は、正教会にはありません。

「信経」では「**主、生命を施す者**」「**父及び子と共に拝まれ讃められ**」と聖神が神であることを強調しています。しかし、^{キリスト}ハリストスと聖神を区別するために、^{キリスト}ハリストスは父から「生まれ」、聖神は父から「出る」という聖書に基づいた表現が用いられます。父から「出る」ものは父と同じ本質をもっています。しかし神・子と聖神の『神格』は別なのです。

「フィリオケ」の問題

ところが、ローマ・カトリックは、聖神は父からだけでなく子からも出ると主張をし、「信経」に「子からも（ラテン語で「フィリオケ」と言う）」という言葉が付加しました。正教会はこの「フィリオケ」を否定します。なぜなら、三位一体の三つの『神格』を混合してしまうからです。聖神が「父と子」の両方から「出る」としたら、本源が二つになってしまい、それでも本源は一つだとするなら「父と子」の区別がつかなくなってしまいます。こうしてローマ・カトリックは神の三つの格を強調するよりも神の一つの本性、同一性の方を強調し、ひいては教会の在り方に対する考え方もその相違をなくそうとする傾向になり、ローマ法王の権威による教会統一が主張されることにも繋がったと言われます。正教会は、父のみが一つの本源であり、父と子と聖神は区別されながらしかも完全に一致していると主張します。だからこそ、個々の教会、個々の生命は大切であり且つ愛における一致が大切なのです。こうして「フィリオケ」はローマ・カトリックと正教会の大きな違いの一つになりました。

私たちのもとに遣わされる聖神

しかし、聖神は、私たちの救いのために私たちのもとへ遣わされることを度外視しては何にもなりません。神・子が永遠のうちに父から生まれるだけでなくマリヤからこの世に人間として生まれたように、聖神は永遠のうちに父から出るだけでなく、私たちのためにこの世へと降臨します。その場合においては、聖神は父より子をとおしてこの世に出る（降臨する）と聖書は教えています。

聖神の働き

旧約聖書では、天地創造の時にも「神の神、水の面に覆育せり（神の霊が水のおもてをおおっていた）」と聖神について言及されています。三位一体である神様のこの世に対するすべての業には、かなら

ず神・子と神・聖神が同時に働いているのです。特に旧約聖書の預言者たちに神の言葉を語らせたこと、言い換えるなら預言者たちをとおして神言葉を語った者は聖神であることを「信経」は「**預言者を以てかつて言いし**」と強調しています。

イエス・キリストのご生涯はすべて聖神に満ちていました。降誕は、「**聖神および童貞女マリヤより**」行なわれ、洗礼の時には「鳩のような」形で聖神が降りました。キリストの教え、奇跡、いやし、そしてキリストの業の全ては聖神の力と共になされたことです。

聖神を獲得すること

私たちが聖神によってキリストの救いに預かることができます。聖神によらなければ誰もキリストと一つになることはできません。そういう意味で、ある聖人は「クリスチャンの目的は聖神の獲得である」と教えました。ペンテコステ（五旬祭）と呼ばれる日に、弟子たちの上に聖神降臨が起きたのはそのためです。私たちの上にも聖神が降臨する時代がそこから始まりました。教会は、聖神によって生かされています。もし聖神がなければ教会はただの集いに過ぎなくなります。私たちがキリストを知ることができるのも、その教えを守れるのも、祈るのも、救われるのも、さまざまな能力を発揮できるのも、そして生きているのも、すべて聖神によってです。聖神は、私たちに「**生命を施す者**」です。この生命とは、この世の生命であると同時に復活の生命をも意味します。

真理に導く聖神

聖神は、キリストによってこう説明されています。「父のみもとから来る（出る）真理の御霊（聖神）が下る時、それはわたしについてあかしをする。」「御霊（聖神）が来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれる」。つまり、聖神は、あくまでもキリスト

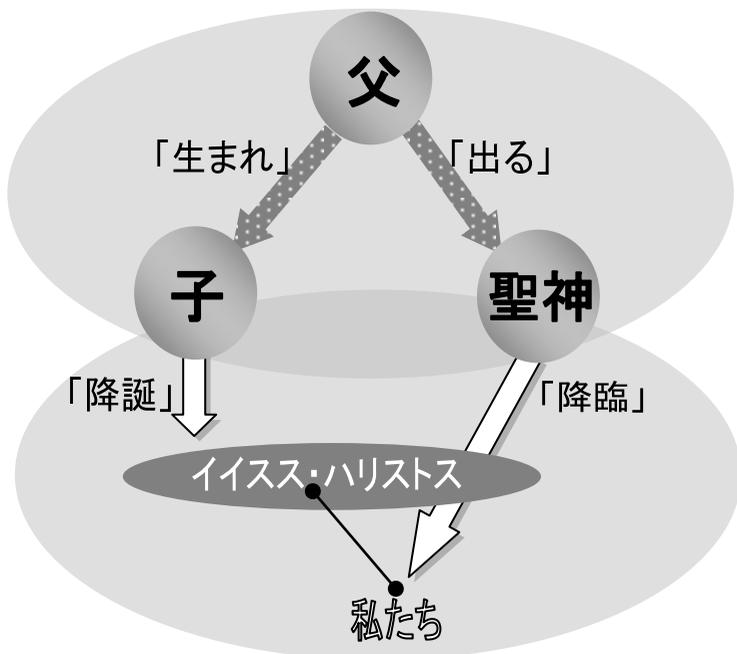
という真理を私たちに教え導き証しするものとして働きます。言い換えるなら、聖神はご自身を秘めたまま、^{キリスト}と私たちを結びつけておられるのです。だから聖神の『神格』をしっかりと把握するのは難しいと言えるでしょう。

聖書の中の聖神

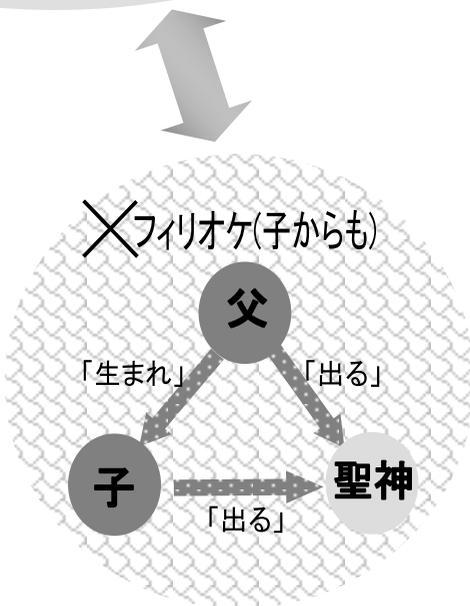
聖書では聖神を表現する時、「風」「息」「火」「油」「水」そして「鳩」などの象徴が好んで用いられ、あまり人格的には表現されていません。しかしこれはあくまでも隠喩的な表現であり、聖神そのものは生きたお方であります。聖神は、「来る」「言う」「愛す」「与える」「憂いる」「教える」と聖書には書いてあります。

なぐさめる者

正教会では、聖神を「撫恤者(なぐさめるもの)」と呼んでいます。これはギリシャ語の「パラクレートス」の訳で、「助け主」とか「弁護者」と一般では訳されたりしていますが、もともと「そばに呼び寄せられた者」という意味をもっています。正教会は、聖神を私たちのそばに降りてきて私たちを苦難、苦悩、罪、そして死から救い慰めるために^{キリスト}と私たちを一つにしてくれるお方として、日々その降臨を祈り求めます



ハリストスの洗礼の時の聖書の記述から、聖神は「鳩」で表されることが多い



⑤ 教会

エクレシア

教会とはギリシャ語の「エクレシア」を訳した言葉です。「エクレシア」とは、神のみ旨と業を行うために「呼び集められた者たち」という意味です。教会は単に「聖書の教えを聞く集会」ではありません。また教会の建物だけを意味するのでもありません。教会はキリスト神が私たちのために作られた聖なる共同体です。ですから、私たちは、教会を信じる信仰をもっていなければなりません。私たちは、教会をとおしてキリストスによって聖神において救われると信じています。

一つの教会

「信経」では、「又信ず、一の聖なる公なる使徒の教会を」と言います。つまり、教会とは「一つ」であり「聖」であり「公」であり「使徒」であるのです。

教会が「一つ」と言われるのは、教会を教会たらしめているお方が「一つの神」だからです。現実的に人間一人一人は教会に属したり離れたります。異端者は教会の正しい一致を妨害するものとして教会の外に出されます。そして、歴史的な現実として正教から旧教、新教が分離していきました。しかし、こうした現象にもかかわらず、私たちは教会は一つであると信じます。教会は罪深い人間の集まりである一方、その本質は「聖」であるからです。

聖なる教会

教会が「聖」であるのは、神が「聖なる」お方だからです。つまり、教会に「聖性」を与えているのは神様です。教会は聖なる人々が集まる所ではなく、集まった人間が神の聖性にあずかることのできる所なのです。教会は聖ですが、教会に集まる人間は弱く不完全

です。しかし、その罪深い人間が、教会をとおして聖なるものになっていくことができます。

公なる教会

教会は、「公」^{おおやけ}でもあります。「公」^{おおやけ}とはギリシャ語の「カトリック」を訳した言葉です。「カトリック」とは直訳すると「十分」とか「完全」とか「無欠」という意味です。もちろんこれも神様ご自身の「完全性」に教会が預かっているということです。教会の「カトリック性」は、時間と空間をとおして普遍であるというテーマで理解されています。つまり、どんな時代どんな場所でも変わらない真理（つまり正しい神を正しく信仰すること）を持っているということです。正教会は、こうした真理を保持しているという意味で「カトリック（公なる）」教会です。しかし、ローマ・カトリックが主張するような形式的、習慣的または機構的な普遍性という意味での「カトリック」ではありません。

使徒の教会

「信経」は最後に「使徒の」という大事な一言を忘れていません。「使徒の」という言葉は、ギリシャ語の「アポストリキン」を訳した言葉で、「派遣される」という意味を持っています。キリストも聖神も父からこの世に「遣わされた」お方です。教会が「使徒」であるのは、第一にこの「使徒的な」キリストと聖神のもとに存在していることを意味しています。キリストはその弟子たちを使徒としてこの世に「遣わし」ました。「使徒の教会」とは、第二にこの「使徒たち」から連綿と継承されてきていることを意味します。そして、第三に、教会の目的自体が、この世で神の国を証しするために「遣わされている」ということを意味しています。

私たちは、正教会がこのように「一つの聖なる公なる使徒の教会」であることを信じています。

三位一体の像としての教会

教会は、言い換えるなら「三位一体の神の像」であると言えます。「像」とは「似ている」という意味です。人間そのものが神に似せて造られた存在であると聖書は教えます。教会も人間と同じように三位一体の似姿をもっているのです。つまり、一致しながら区別され、区別をもちながら一つであるということです。正教会が国ごとに独立する形をとる理由はここにあります。自治的にひとり立ちする形は「アフトノミヤ（自治教会）」と呼ばれ、完全に独立する形は「アフトケハリヤ（完全独立教会）」と呼ばれます。いずれにしても正教会は、ある特定の人物の権威によってではなく、神によって導かれているのである、と固く信じています。

ハリストスの体としての教会

聖書では教会は「^{キリスト}の体」と呼ばれています。「体」は「頭」の言うことに従います。同じように、^{キリスト}の「体」である教会は、教会の「頭」である^{キリスト}に対して従順であり、一体となって頭と結び付いているのです。

^{キリスト}の体は一つに一致していますが、それぞれ器官は独特の働きをします。その一つ一つの区別は、聖神の賜物として与えられます。教会とは、聖神降臨が継続している所と言い換えてもよいでしょう。ペンテコステの日、弟子たちに降臨した聖神は、「舌のようなものが炎のように分かれて現われ、一人一人の上に」とどまり、「いろいろの言葉」で神の大いなる業を伝えたのでした。^{パウエル}は、聖神は一つであるが、その賜物は種々あると説いています。教会は一人一人のユニークさを大切にします。決して人間に見えないユニフォームを着せて画一的に扱うなどということはしません。正教会の聖人たちがいかに個性的であるかを見ればわかります。

見える教会と見えない教会

キリストの体である教会には、籍身したキリストと同じように見える部分と見えない部分があり、それら二つは分離されず一つにあわさっています。見える教会とは、この地上で肉体をもった人間が集まっている教会で、この世の罪や悪魔と戦うべき役目をもつので「戦う教会」とも呼ばれています。見えない教会とは、天上で天使たちと共にすでにこの世を去った聖人たちが集まる教会で、しばしば「勝利の教会」と呼ばれます。

見える教会に所属し、奉神礼を行うということは、すなわち見えない教会に属し、天使と共に神を讃美することに繋がります。しかし、地上の教会に属していても、もし形だけで信仰がなければ、天上の教会との絆は解けていくでしょう。地上の教会に属していなくとも、神の恵みによって天上の教会に受け入れられる人がいるかもしれません。しかし救いは「一つの聖なる公なる使徒の教会」「三位一体の像である教会」「キリストの体」である教会をとおして与えられることに変わりはありません。

神

天上の教会

見えない教会・勝利の教会
天使や聖人たちのいる教会

地上の教会

見える教会・戦う教会
現在私たちがいる教会

三位一体の像

「父と子と聖神という三つの位格が一つになっている神」に似ている。

教会は区別(独立)されながら一つになっている

ハリストスの体

教会の頭はハリストス
ハリストスの体は教会

体は頭に従順

聖神降臨

弟子たちに降臨した聖神は今も教会に降っている

教会を神・ハリストスとつなげているのは聖神の力

エクレシア = 呼び集められた者たち

又、信ず、一つの 聖なる 公なる 使徒の 教会を【信経】

教会は一つ

唯一の神様のもとにある教会

「正しい教会」= 正教会は一つ

教会は聖

聖なる神様のもとにある教会

聖なる人が集まるのではなく、集まった人が聖にされていく

教会は公

公=カトリック=「十分」「完全」という意味

どんな場所や時代にも通用する真理をもつ

教会は使徒的

ハリストスの使徒達とつながっている

正教会が「伝統的」である根拠

聖師父たちの言葉——至聖三者

「無原の“父”とは誰なのか？ 始まりを持たない存在そのものであるお方である。始まりを持つ存在は、“父”であるということを始めなければならないからである。始まりを持たないのだから、存在を始めてその後に“父”になったということはない。神・父は絶対的な意味において“父”なのである。神・父は、神・子ではないから。同じように神・子は絶対的な意味において“子”である。神・子は神・父ではないから。これらの名前は、絶対的な意味において私たちに属する言葉ではない。」(ナジアンザスの聖グリゴリイ)

「私たちは、思いと言葉と行いによって罪を犯す。至聖三者の淨い像となるために、私たちは、思いと言葉と行いを聖なるものにするよう努力しなければならない。神・父に思いを、神・子に言葉を、神・聖神に行いを一致させて…。」(クロンシタットの聖イオアン)

「至聖三者は単純に一つである。それは組み合わせされたものではない。一における三である。一つの三者である神は、彼ご自身のうちに完全に区別された三つの位格(ヒポスタシス)をもつ。」「神は三つの位格のうちに知られ理解される。神・父は、神・子と聖神をとおして万物を保ち、万物を養う。神に祈る時、他の二者と引き離されたり分けられたりして呼ばわれ、思われる一者はいない。」(シナイの聖グリゴリイ)

「一つの神・父、旧約新約の主がおられ、一つの主イイスス・ハリストス、旧約を成就し、新約に來臨された方がおられ、一つの聖神、預言者をとおしてハリストスを宣べ伝えた方、ハリストスが來られた時、降ってハリストスを明らかにされた方がおられる。」(エルサレムの聖キリール)

三章 正教会の教え

① 聖伝

啓示

正教会の教えの源泉は神の啓示にあります。「啓示」とは、神様がご自身を私たちに教えるということです。とは言っても、神様の奥深い本質そのものは私たちには把握できません。だから、深淵なる神のすべてが明らかになったわけではありません。ただ神は人が理解できる範囲でその聖なる性質と意思をお示しになったのです。神様は最初、旧約という時代にご自分を啓示し、人々にその啓示を伝えさせました。そして自らが人間となって自己を啓示されました。すなわち ^{イエス}・^{キリスト} は、神の啓示そのものです。^{イエス}・^{キリスト} が使徒たちに与えた信仰や教えを、正教会は、次の世代から次の世代へと連綿と受け継いできました。この「受け継ぎ」を、教会の聖なる伝統という意味で「聖伝」と言います。

聖伝を生きる

「聖伝」を伝えていく中でも、神の導きがあります。「神・聖神[°]」が「あらゆる真理に導いてくれ」（イオアン^{ヨハネ}16:13）なのです。この聖神による導きが、正教会の「聖伝」の基礎です。「聖伝」とは、形や言葉を機械的に保存することではなく、いつでもどこでも聖神の臨在によって神の啓示を教え伝えるということです。つまり「聖伝」は生きたものです。だから私たちは「聖伝」の中で生きる必要があります。「聖伝」の中で生きた生活をすることによって、正教会の教えが理解できます。正教会の信徒とは、「聖伝」を生きる者と言えます。たとえアイコンや聖歌や聖師父を研究したとしても、その人が正教会の聖伝の中で生きていなければ、それは正教会のものではありません。

正教会とは、「聖伝」そのものです。正教会の教えが人の勝手な解釈による教えではなく、神の教えであることの根拠が「聖伝」にあります。

聖伝の中にある聖書

聖書という神の啓示の書は、「聖伝」の中にあります。聖書は「聖伝」の一部です。「聖伝」を、聖書に書かれていないその他の記録や伝承と見なしてはいけません。聖書と「聖伝」という二本の柱があるのではなく、「聖伝」という一本の柱の中に聖書は含まれているのです。聖書は「聖伝」から生み出されたものです。これとこれが聖書である、と決めたのは「聖伝」です。いくつもの文書の中から聖書と認めた（「正典化」と言う）のは教会です。聖書が先にあって教会が生まれたわけではありません。しかしその聖書は、「聖伝」の中で最も重要であり、最も大きい位置付けがなされます。「聖伝」が生み出した聖書は、その後の「聖伝」を基礎づけるものとなりました。つまり、ある教えや考えが「聖伝」として正しいか否かは、聖書という規準に基づいて、聖神の導きによつて、判断されます。

聖伝の中の重要部分

正教会の聖伝には、聖書の他にさまざまな構成要素があります。それらはみんな同じ価値なのではなく、重要なものとそれほどでもないものがあります。聖書とならんで重要な聖伝としては、「信経」や「全地公会」の決議（教理）があります。特に至聖三者の神のことや、イエス・キリストの藉身などについての教義は、不変であり、絶対であり、取り消したり改訂したりしてはならないものです。

奉神礼

重要なものとしては、他に奉神礼や聖師父たちの著作があります。

特に奉神礼は、言葉としても形としても正教会の教えが盛り込まれており、参拝する者が心して奉神礼を体験するならば、正教会の教えが体得できるようになっています。「聖伝」を生きるということは、奉神礼に参拝することから始まります。正教会の奉神礼には正教会の「正しい教え」が表現されているので、絶対的な信頼を置くことができます。

聖師父

聖師父たちの著作は、正教会において聖書を解釈する上で最も大切な要素ではありますが、すべての聖師父たちが同じような権威をもっているわけではありません。聖師父たちのその一字一句をすべて鵜呑みにしてはいけません。要は、自分が「聖伝」の中でその言葉をどう消化するかが大切です。

教会法

その他、「聖伝」には、教会法（カノン）があります。「カノン」という言葉は、規則とか規準とか判断の基準という意味で、主に歴史的な公会議で取り決められた事項です。私たちが正しい教えを生きるための指針となりますが、法律や律法としてとらえてはならないという注意が必要です。

キリストは「安息日は人のためにあるもので、人が安息日のためにあるのではない」と教えました。教会法（カノン）の中には絶対に守るべき事項もありますが、地域や時代によって考慮すべき事項もあります。例えば、聖職の権威を売買する行為は絶対に禁止されていますが、司祭になる年齢は 30 歳以上という習慣的なものは考慮の対象になります。教会法（カノン）は、正教会のすべてを網羅しているわけではありません。ある特殊な教義的問題や道徳的問題、逸脱した教会生活への答えとして生み出されたものです。

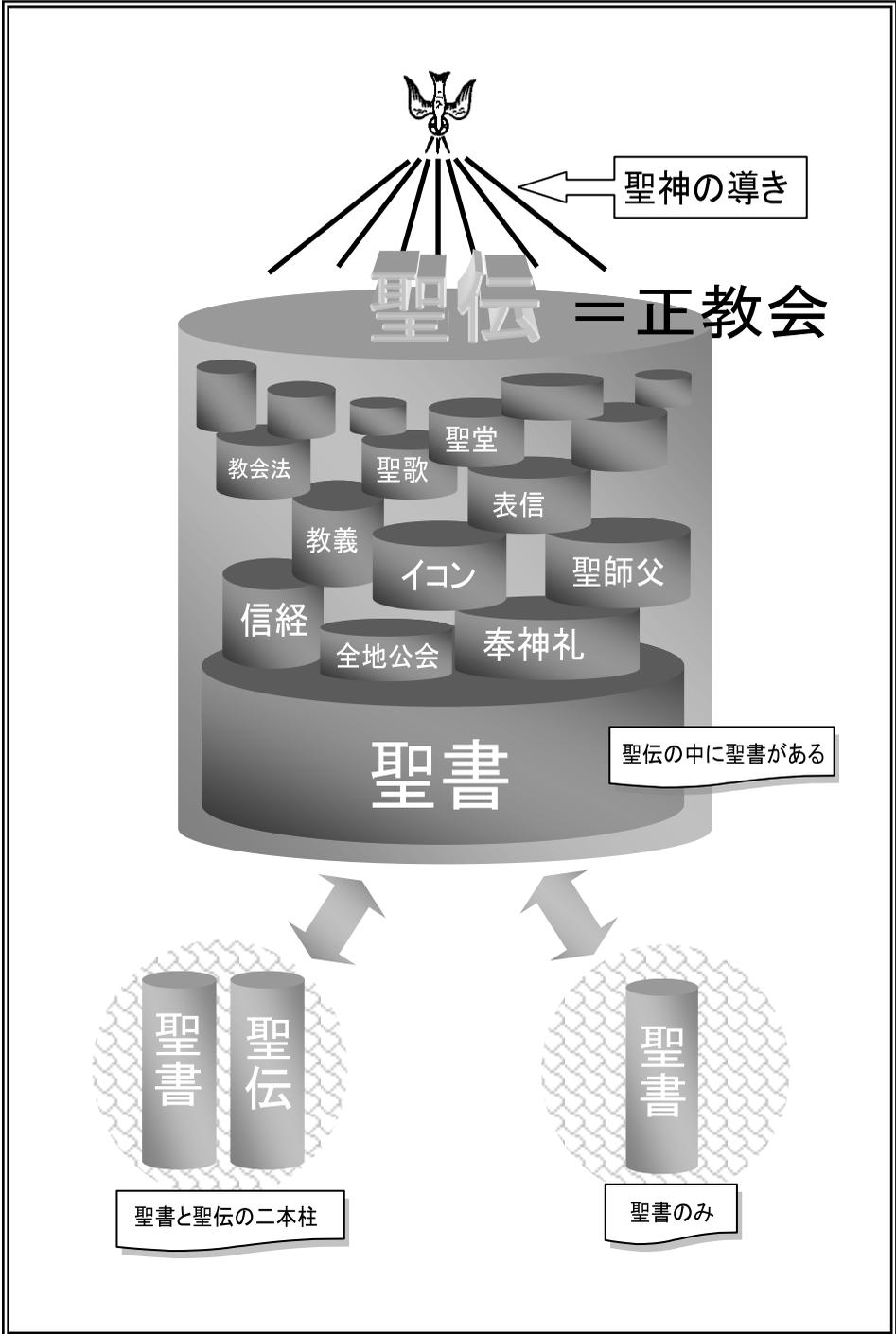
アイコンや聖歌など

アイコンの伝統や聖歌の伝統や教会建築なども、聖伝です。こうした目に見える教会の芸術は、特に肉体の感覚に訴えますので、正教会外の多くの人に関心を寄せる部分です。正教会の教えが色と線で表現されるアイコンや、奉神礼の欠かせない要素である聖歌は、正教会の「聖伝」のすばらしさを伝えるでしょう。逆に言えば、正教会の「聖伝」を熟知することによって、アイコンや聖歌の「すばらしさ」が真の意味で理解できるでしょう。

正教会の「聖伝」の中でも、時代や地域によってかなり差のある細かい事項もあります。例えば「糖飯」（死者の為の祈祷の時に作る食べ物）や「復活祭の卵」などです。また正教会の中で行われていることすべてが「聖伝」ではありません。神の国と本質的に関連していないことで単に地方や時代によって習慣的に行われることもたくさんあります（バザーやその他の行事など）。

一つに繋がり発展する

しかし、正教会の「聖伝」の中にあるすべては、有機的に繋がりをもっています。一つの要素は孤立しておらず、あらゆる要素と密接に繋がっています。そして、教会は、神・聖神を受けて生き続けるが故に、「聖伝」は成長し発展し続けます。



② 聖書

人間の言葉で書かれた神の言葉

聖書は、神の啓示の書です。神が人にご自分を啓示した教えが綴られています。だからといって、聖書がある日、突然、天から降ってきたのではありません。実際には三千年以上も前から、様々な人々によって書かれた文書です。もちろん彼等は神の口述を機械的に筆記したのでもありません。聖書の各書には、その時代背景や書いた人の独特の観点が反映されています。

しかし、神の恵みは人の自由な行動に働きかけます。つまり聖書には神の導きがあると正教会は信じています。聖書とは人間の言葉で表現された神の言葉です。

信仰の書

聖書は英語で「バイブル Bible」と言いますが、それは単に「書物」を表す言葉でした。古代の人々は、パピルスという植物から紙を作り、文や絵を書いていましたが、このパピルスがギリシャ語では「ピブロス」となって、「バイブル」の語源となりました。聖書は「書物の中の書物」という意味で単に「バイブル」と呼ばれるわけです。しかし、聖書を「万能の書」と思っただけではいけません。聖書を読めばすべてがわかるのではありません。聖書がすべてであるとか、聖書のすべてを文字通り信じないと救われないなどという態度は受け入れられません。聖書は「信仰の書」です。私たちがどう神を信仰すべきかが書かれています。しかし、その内容としては、人が神に対していかに不信仰を繰り返しているかが語られています。

旧約と新約

聖書は、二つの「約束」の書に分けられます。その「約束」とは神様による救いの約束です。一つは「旧約」、もう一つは「新約」で

す。旧約は、^{イエスス・キリスト}の前の時代のことが書かれている聖書です。主にイスラエルという民族の歴史が記されていますが、それをとおして神と人との関係が本来どのようなものであるべきかが啓示されています。旧約に明らかにされた神の啓示は私たちの信仰を基礎づけます。例えば、神が天地創造されたことは、旧約から教えられる啓示です。

しかし、「旧約」はその名のとおり「新約」との対比で見られるべきもので、決して単独で扱うべきものではありません。言い換えるなら、旧約は^{イエスス・キリスト}によって成就された書物と見る必要があります。旧約には時に厳しすぎる神の処置とも思える記述があり、私たちを困惑させます。しかし、それらは新約時代の今としては精神的な意味に解釈されます。旧約に書かれているすべては、^{イエスス・キリスト}を指し示しています。^{キリスト}の光によって旧約を読むことが肝心です。

70人訳

旧約聖書は、もともとヘブライ語で書かれましたが、紀元前2世紀頃にギリシャ語に翻訳され、それが初代教会の人々によって用いられ、キリスト教（正教会）の旧約の底本になりました。このギリシャ語訳の旧約聖書のことを「70人訳」とか「セプトゥアギンタ」などと言います。「72人で翻訳した」という伝説があるからです(端数の2が切り捨てられる)。「70人訳」を写本して保存してきたのは正教会です。

一方、ヘブライ語の聖書は、ユダヤ教において写本され保存されてきました。ヘブライ語の聖書のことは「マソラ本文」と呼ばれます（「マソラ」とはヘブライ語で「伝統」を意味する）。「70人訳」と「マソラ本文」では、文書の数も順序も違うので注意が必要です。

「70人訳」にあるが「マソラ本文」にはない文書を、プロテスタントでは「アポクリファ（外典）」と呼び、聖書には属させていま

せんが、正教会ではこれらも正式な聖書として認めています。旧約は、律法、歴史、知恵、預言という四種類に分けられる文書で構成されています。

新約

新約は、イエス・キリストが来られた後のことが書かれている聖書で、旧約と同じように、福音書、歴史、手紙、黙示という四つの種類の文書で構成されています。その中でも最も重要なのが「福音書」です。

福音書を書いたマテウイ、マルコ、ルカ、ヨハンは、「福音記者（エヴァンゲリスト）」と呼ばれます。「エヴァンゲリオン」というギリシャ語は、「幸福なる音信」「喜ばしき知らせ」という意味です。福音書には、イエス・キリストご自身のことが克明に記されています。キリストという救いの喜ばしい知らせを、福音書は私たちに伝えています。正教会では「福音書」を一冊にまとめて本にし、「福音経」と呼んで大切にします。「福音経」は聖堂の奥にある「宝座」と呼ばれるテーブルの真ん中に安置されています。いわば教会の心臓部分に「福音」があります。

ルカによって書かれた「使徒行実」には、初代教会の歴史の一部が記述されています。それから聖使徒パウロによって書かれた14の手紙があり、他の使徒たちによる手紙も新約聖書の中に含まれています。これらは特に教訓と信仰の励ましに満ちた言葉が綴られています。正教会では「使徒行実」とこれらの手紙を、一冊にまとめて本にし、「使徒経」と呼んで大切にします。正教会の奉神礼の中で、「使徒経」と「福音経」はセットにして読まれます。正教会にとって聖書とは何よりも「祈りの書」なのです。

ヨハによる「黙示録」は、特別な書物であり、勝手な解釈を施さないよう注意が必要です。

聖書の写本

聖書の原語はギリシャ語であり、それらを写本して伝達してきたのは、正教会であるという事実は知っておくべきです。写本によって細かい語句の相違があることも確かですが、信仰そのものに影響のある相違はほとんどありません。

聖書の読み方

旧約と新約、二つが一つになって「聖書」が成立します。この「聖書」を、私たちは「従順さ」をもって読む必要があります。つまり、「神の言葉」に耳を傾けようという思いがなくてはなりません。聖書の学術的研究（考古学的なものや文献としての批判など）を否定するのではなく、それらを超えて存在する聖書の中の「神の言葉」をいつも求めるべきです。

さらに、聖書は正教会の導きにおいて読まれなければなりません。正教会の導きは奉神礼や聖師父たちの言葉の中にあります。正教会は、聖書を読む私たちを、イエス・キリストご自身のもとへ導いてくれます。だからこそ、聖書は救いの書であり、祈りの書であり、神の臨在の書なのです。

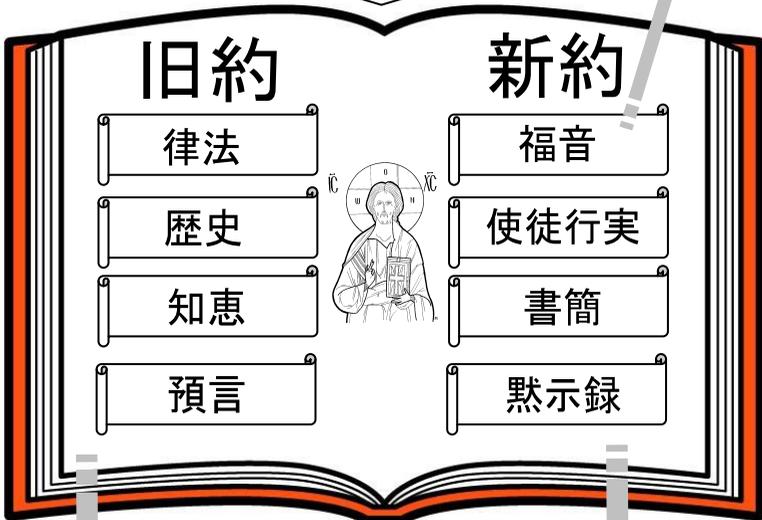
正教会の聖伝を生きる人は、聖書を「自分のことが書いてある書」として読むことができます。罪を犯したアダムとは私のことであり、信仰深いアブラハムは私の模範である、と。



神の啓示



福音経



聖書

ヘブライ語聖書



ユダヤ教が写本



ギリシャ語訳:「70人訳」



正教会が写本

③ 罪と救い

「罪」とは

神様は、「聖伝」をとおして、特に聖書をとおして、私たち人間が
いかに神様に背いているかを教えておられます。神に背くことを罪
と言います。

「罪」と訳されるギリシャ語は「ハマルティア」と言い、「的を外
す」という意味をもっています。人間があるべき姿を失うことは罪
であり、なすべきことをせず、してはならないことをすること（実
際の行動においてだけでなく心の面においても）が罪です。

すなわち「罪」とは、単に国の法律を破るとか、道徳上許されな
いことをするとか、マナーを守らないなどということ以上のことを
指します。心の中で悪意をもつことや、プライドをもち自己中心に
なること、神の教えとは全く逆の生きかたを続けること、何よりも
神ご自身を無視してしまうことが「罪」です。

自由意志による罪

旧約聖書によれば、人間は神に似せて造られました。言い換えれ
ば、神は人間に自由意志を与えました。この自由意志によって神に
従順に従うことが人間のあるべき姿です。しかし、最初に造られた
人間アダムは、神の意志に背く不従順の道を自由意志によって選択
してしまいました。

創世記には、「善悪を知る木」の実を食べると神によくなれる、
という蛇の誘惑によって、アダムとエワが陥罪したと記されていま
す。神は「善悪を知る木の実を食べてはならない、それを食べた日
には、あなたは死んでしまう」と言いました。「食べる」とは「生き
る」という意味です。「善悪を知る木の実を食べる」というのは、「自
分が神様になったかのように錯覚し、善悪を知ったつもりになって
真実の神を無視するような生き方をする」という意味です。しかし、

アダムとエワは、神の言葉ではなく、蛇（悪魔の象徴）の言葉を信じてしまいました。生命の源である神と分離する生き方を、自分で選んでしまった人類は、死ぬものとなってしまいました。

死は罪の結果であり、神様が最初から意図されたことではなく、人間の自由意志によってもたらされた不条理なのです。聖書において、すなわち正教会において、罪、悪、悪魔、苦難、死という事項はすべて一つのものとして見なされます。罪とは悪であり、それは悪魔によって人間にもたらされ、そしてその結果、苦難や死が生じたからです。

アダムの罪

三位一体に似せて造られた人間は、多くの個でありながら一つのものであります。つまり、アダムと私たちは一つのもの、一体のものなので、人はアダムの罪の影響下のもとに、罪の蔓延する世の中に生まれます。

「原罪」は教えない

しかし、西方で発展したキリスト教であるカトリックやプロテスタントでは、アダムの罪の結果、厳しい神の罰をも全人類が受け継いだと強調します。人間は生まれながらにして罪人であり、罪人である以上、神の裁きと罰を受けるものであるとし、全く自由意志の力を失ったと教えます。正教会はこのような「原罪」と呼ばれる考え方を否定します。

アダムとエワによって神の似姿は壊されてしまいましたが、まだかろうじてその似姿（神の像）は残っていて保持されている、と正教会は教えます。どんな人間でも、まずはそこに「神の像」を見るべきです（ただしそれが破損していることも事実です）。人間に残された神の像は、神を求める自由意志を弱いけれども持っています。人類が受け継いだのは神の罰ではなく、破損した似姿です。

しかし、神に従うか従わないかの自由意志は、私の選択権として最後まで残されていますが、人間が自分の努力によって、破壊された神の像を回復することは不可能となりました。

「救い」とは

「罪」というものをどうとらえるかによって、「救い」についてのとらえ方が変わってきます。

西方教会では、「原罪」の考え方から、全人類に対する神の罰をキリストスが身代わりに受けてくれたことによって救われると強調します。つまり十字架を、全人類のため、私たちの代わりにキリストスが引き受けてくれた刑罰だったと解釈します。私たちはそのままでは全員地獄行きだが、私にはその刑罰に耐える力はないので、キリストスが身代わりになってくれたというわけです。確かに、聖書には、「苦難の僕」という有名なイサイヤの預言があり、そこには、人々の罪を引き受けて受難するメシアの姿が記されています（53章）。正教会でも、この「苦難の僕」は、キリストスを指すと解釈します。しかし、キリストスは罪だけではなく、私たちのすべてを引き受けて十字架にかかったことを見落としてはなりません。

では、正教会の教える「救い」とは何でしょうか。

「罪」が「あるべき姿を失う」ことであるなら、「救い」とはそれを取り戻すことです。「罪」が神との分離、神の像の破損であるなら、「救い」とは神との一致であり、神の像の回復です。「罪」が悪魔、苦難、死と一つのものなら、「救い」とは悪魔の敗北、苦難の終結、死の死滅です。これらすべてを、私たちのためになさったのが、人となった神キリストスの十字架と復活です。

神の像の回復、死の敗北

神が私たちと同じ人間になったという「藉身」によって、すでに私たちと神との一致の道が開かれました。完全な神の像である

キリストスによって、私たちの神の像は回復されます。そして私たちがどうしても通らなければならない死という究極の不条理を、キリストスはご自分の死と復活によって、敗北させました。

十字架と復活による救い

正教会では「キリストス、死より復活し、死をもって死を滅ぼし」と復活祭の時に歌います。キリストスの死と復活は、死の本質を変容させました。死はもはや不敗の敵ではなくなりました。

死を滅ぼすキリストスの十字架は、悪魔の敗北でもあります。キリストスの十字架は、復活の印です。キリストスの十字架は勝利の旗です。キリストスの十字架は生命を与える力です。

洗礼を受けるということは、救いを与える十字架と復活のキリストスと一つに結び合わさることなので、「信経」で「我、認む、一の洗礼、以て罪の赦を得る、を、」と言います。

もちろん究極的にこのキリストスの「救い」をいただくか拒絶するかは、私たち一人一人の意志にかかっていますが、「救い」は人の努力によってではなく神によってのみできることを忘れてはなりません。

自由意志

罪(的を外す)

神の像を壊す

神との分離

「死」



破損したが保持されている神の像

信仰

藉身・十字架・復活

「死」の敗北

神との一致

神の像の回復

ハリストスによる贖罪

原罪

全壊した神の像

神の罰を受けた人間は
生まれながらにして罪人

全人類の罰を身代わりに
受けたのが十字架の贖罪

④ 生神女マリヤ、聖人、聖師父

「生神女」の意味

私たちに救いを与えるイエス・キリストを生んだお方が、生神女マリヤです。「生神女」とは「神を生んだ者」という意味のギリシャ語「テオトコス」の訳です。もちろんマリヤが新しい神様を存在させたのではありません。マリヤから人間として生まれたイエスは、実は神様としての「位格」をもつお方なので、大胆にも「生神女」と呼ぶことができるのです。マリヤを「生神女」と呼ぶことは、神が人となったことを信仰することに他なりません。そういう意味で、正教会では単に「聖母」とは言わず「生神女」という言葉を大切に使用します。

「永貞童女」の理由

生神女マリヤは、また「童貞女」とか「永貞童女」と呼ばれます。それは処女であるにもかかわらずキリストを生んだからです。この不可思議な出来事は、人間の理解を超えています。正教会は、童貞女がいかにしてイエスを産んだかについては、素直に「わからない」と言います。しかし「なぜそうなのか」と問われれば、生まれたイエスは只の人間ではなかったから、つまり神様が人となったお方だから普通の出産ではないのである、と答えます。マリヤを「童貞女」と呼ぶことは、神が藉身したことの証しなのです。聖書に記されているイエスの兄弟たちについては、正教会では従兄弟がイオシフの先妻の子供たちであると解釈します。

マリヤの従順

しかし、生神女マリヤは、キリスト降誕のための単なる道具ではありません。マリヤが自由意志によって神のみ旨に同意したからこそ、藉身が現実となったのです。マリヤは、「私は主のはしためで

す。お言葉どおりこの身になりますように」と言いました。

神の言葉への従順を表すこの一言が、私たちに「救い」をもたらしました。正教会では、神の言葉に不従順だったエワの罪と、神の言葉に従順だったマリヤの信仰がよく比較されます。それで、マリヤは「第二のエワ」とも呼ばれます。

最高の模範

従順な信仰によって、「生神女」となったマリヤは、私たちにとって、人間の中の最高の模範です。イエス^イス^エスはもちろん最高の完全なる人間ではありますが、同時に神様でもあります。マリヤは私たちと同じただの人間です。しかし、「神を生むもの」となった聖なる者です。そういう意味で正教会ではマリヤを「至聖」（ギリシャ語で「パナギア」と言う）と呼びます。また、天使よりも優れて光栄を受けているとも言います。マリヤを讃美することは、私たちにとって、信仰と従順というあるべき姿を学ぶことでもあります。

転達者としてのマリヤ

正教会ではマリヤを讃美するだけでなく、その「とりなし」（正教会では「転達」という難しい用語を当てる）を願います。マリヤは死にましたが、すでに復活を先取りし、天国で私たちのために祈り続けているのです。最高の人間とは、自らをへりくだらせ、人を愛し、人のために祈りを献じる者のことを言います。私たちは、マリヤに「転達」を願うことによって、キリスト^キス^リト^スの救いをより深く得ることができます。

聖人

私たちの模範はマリヤだけではありません。「聖人」と呼ばれる人々も、私たちのお手本であり、救いの証しであり、転達を願う相手です。「聖人」とは、その名のとおり「聖なる人」「神の聖性にあ

ずかった人」のことを言います。新約聖書では、洗礼を受けた信徒をすべて「聖徒」と呼んでいます。しかし、今では、公に認められた（「列聖」と言う）人のみを「聖人」と呼びます。正教会では「列聖」は、ある模範的な信徒や聖職者に対する人々の敬愛が高まることによって行われます。「列聖」された聖人には、祭日（「記憶日」とも言う）が定められ、祈祷文が編纂され、イコンが描かれます。正教会で洗礼を受ける時にいただく「聖名」は、聖人の名前から選ばれます。その聖人については「聖人伝」と言う書物によって知ることができます。

様々な聖人たち

正教会では聖人たちをいくつかに分類して呼称します。福音を伝えるために^{キリスト}によって派遣された弟子たちは「使徒」と呼ばれ、それに準ずる働きをした聖人は「亜使徒」と呼ばれます。信仰を守り抜いた聖人は「表信者」、信仰のために迫害を受けて生命を落とした聖人は「致命者」、修道士や修道女で聖人になった者は「克肖者」と言います。「佯狂者」と呼ばれる聖人もいます。彼等は、福音の言葉を文字通り実践するために日常生活を軽視した、傍目からは愚か者に見える聖人です。その他、数え切れないほどの聖人の特色を表す呼称があります。こうしたさまざまな聖人たちは、人間の多様性を浮き彫りにします。神に近づき聖なる者となることは、個性を棄てることではなく、反対にその人らしさを十分に花開かせることです。しかし、その多様性は分裂を意味するのではなく、神のもとで一つになっているからこそ「聖なる人」なのです。

聖師父

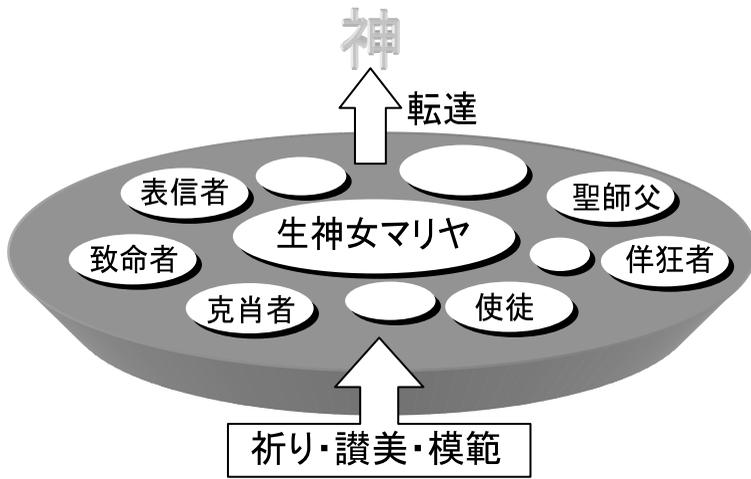
聖人の中でも、特に正教会の信仰を解説し、指導し、実践し、文章に書き残した人々のことを「聖師父」（一般では「教父」と言う）と言います。聖師父の教えは、正教会の聖伝の重要な位置を占めて

います。私たちは聖師父の教えに従って聖書を読み、正しい信仰を育てるのです。だからといって、すべての聖師父たちのすべての著作が同じような権威をもつものではありません。

特に重要視されている聖師父としては、「三成聖者」とも呼ばれる聖大ワシリイ、神学者グリゴリイ、金口^{きんこう}イオアン^{ヨハネ}や、ニッサのグリゴリイ、エルサレムのキリル、表信者マキシム、ダマスコのイオアン^{ヨハネ}、グリゴリイ・パラマスなどがいます。他にも階梯者^{ヨハネ}イオアン、シリアのエフレム、新神学者シメオンなどは有名です。

聖師父たちの著作は、その時代の複雑な背景や古くて難しい表現のせいで、現代の私たちが理解するには困難な時が多くあります。しかし、それでも精神的な導きを求めて熟慮しつつその書のいくつかを読むことはとても有益なことです。

また、正教会は、聖師父の時代はすでに終わったものとする見方を受け入れません。聖師父は過去のものではなく、今も、教会に聖神の導きが生きている故に、これからも生み出されていく聖人です。



神格
イイスス・ハリストス
神性と人性



テオトコス

しょうしんじょ
生神女

神を生んだ女性

神がマリヤを
とおして人となった

マリヤの従順・信仰による

私たちの最高の模範

第2のエワ

パナギア(至聖)

神・言葉を守る者

⑤ 愛

神を愛し、人を愛すること

正教会の聖伝は、聖書の教えにあるように、神を愛し、人を愛することが一番大切なことと教えます。罪とは、神と人を愛さないことであり、救いとは、神と人を愛し始めることと言えます。マリヤも聖人たちも、この愛を行った人々です。

キリストスは、『心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。これがいちばん大切な、第一のいましめである。第二もこれと同様である、『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』。」と教えられました（マト^マツェ^イイ 22:37~39）。

「心をつくし…主なるあなたの神を愛せよ」とは旧約聖書の申命記 6:5 の言葉であり、「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」とは同じく旧約聖書のレビ記 19:18 の言葉です。キリストスはこの二つを「同じよう」に大切であると言いました。神を愛することと、人を愛するということは同じことです。神を愛する人は、人を愛します。人を愛する人は、神を愛しているのです。なぜなら、神は愛であり、人は神に似せて造られ、そして神は人となられたからです。

神は愛である故に人は愛し合う

「神は愛である」と言うことができるのは、神が至聖三者（三位一体）だからです。愛とは、自己ではなく他者を互いに完全に愛し合うことです。父と子と聖神という三つの者が完全な愛をもって一つになっているので、神は至聖三者の神である、というだけで完全な愛であるのです。そして、神様は、人間を造り、ご自分の愛を分かち与えました。人間の愛は、神に起原をもちます。神様がまず私たちを完全な愛をもって愛して下さっています。「人が神に似せて造られた」ということは、神の愛を受け取る力、そして神を愛する力、

また互いを愛する力をいただいたということです。どんな人の中にも神の似姿があります。神を愛する人が、その似姿をもつ人間を愛さないなんてことはありません。人を愛することは、人となった神を愛するのと同じです。キリストスは、愛の行いをした人々に「これらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、私にしたのである」(マト^マク^クヱ^イ25:40)と言われました。

十戒

神を愛し、人を愛しなさいという教えは、旧約聖書の時代から教えられてきたものです。それを具体的に「いましめ」として要約したものが「十戒」です。「十戒」は、モイ^モセ^セイがシナイ山で神様から直接受け取った教えであり、二枚の石板にその言葉が刻まれました。「十戒」の前半は、いかに神を愛するか、後半はいかに人を愛するかがテーマになっています。

- 一「私のほかに、なにものをも神としてはならない。」
- 二「刻んだ像を造ってはならない。それに仕えてはならない。」
- 三「神、主の名を、みだりに唱えてはならない。」
- 四「安息日を覚えて、これを聖とせよ。」
- 五「父と母を敬え。」
- 六「殺してはならない。」
- 七「姦淫してはならない。」
- 八「盗んではならない。」
- 九「偽証してはならない。」
- 十「すべて隣人のものをむさぼってはならない。」

新しいいましめ

「十戒」は現代の私たちも守るべき基本的ないましめです。しかしキリストスは、私たちに「新しいいましめ」も与えられました。

それは「私があなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」(イオアン^{ヨハネ}13:34)です。「私があなたがたを愛したように」というところが新しい点です。神はへりくだりをもって人間になりました。そして死までも味わわれました。この神のへりくだりのことを「ケノーシス」と言います。神の「ケノーシス」は、私たちを愛した行為に他なりません。

同じように、私たちはへりくだりをもって互いに愛し合わなければなりません。また神の「ケノーシス」はご自分に敵対するものをも愛する愛です。キリストは、「敵を愛し、迫害する者のために祈れ」と教えました。つまりどんな人であろうとすべての人が自分の隣人になりうるわけで、愛すべき相手に境界はないのです。

アガペー

では、愛とは何でしょうか。一言で言えば、相手の最善のために自分の力を尽くすことです。相手の最善が何であるかを知るためには知恵が必要です。自分の力を尽くすためには、忍耐とへりくだりが必要です。そして何よりも堅い意志が必要です。この愛のことを「アガペー」と言います。

私たちは本能的に親子の愛をもっています。親子の愛は動物でも持っているくらい自然なものです。しかし、「アガペー」を見失うと、単に感情的で自己中心的な愛になってしまいます。

私たちは、また自然に男女間の愛をもちます。恋愛は、互いを一つに結びつけ、相手を心から受け止めますが、しかし「アガペー」が貫かれていないと、しばしば妬みや憎しみへと姿を変えてしまいます。

私たちは友達どうしで仲良く過ごすという友愛も持っています。しかし、それは敵をも愛す「アガペー」とは違います。

「アガペー」は、愛する相手を選びません。価値のあるものだけを愛するのではなく、愛することによってそれを価値あるものとする

るのが「アガペー」です。つまり愛が先にあるのです。

聖使徒パウエルは、「アガペー」について次のように教えています。

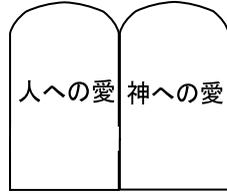
「愛は寛容であり、愛は情け深い。また、ねたむことをしない。愛は高ぶらない、誇らない。不法をしない、自分の利益を求めない、いらだたない、恨みをいだかない。不義を喜ばないで真理を喜ぶ。そして、すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える。愛はいつまでも絶えることがない。」（コリント前書 13:4~8）

愛は二人を一つにする

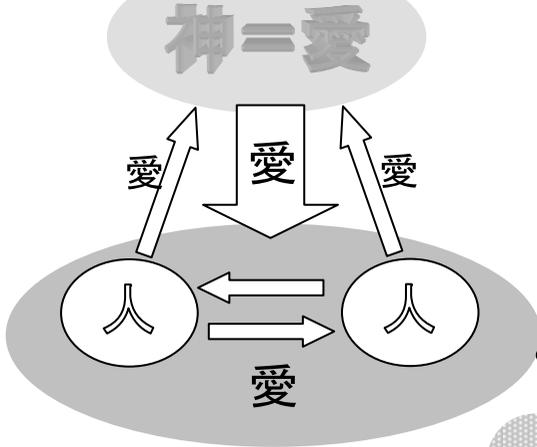
金口イオアンという聖師父は、次のように教えています。

「愛は、自分の愛する者をもって自分の一切とします。だから、もし自分の愛する者を恥から救うことが出来なかった時、このことを自分の恥とします。自分が恥を受けても愛する相手が助かることになれば、愛は、そのことを恥としません。愛される者は愛する者にとって同一の身です。すなわち愛は、愛する者と愛される者を、二人ではなく一人の者にします。」（コリント前書講話）

この理想的なアガペーを実行することは、困難なことです。しかし、神を知り、キリストを信じる者は、少しでもこの愛に近づこうとする者です。

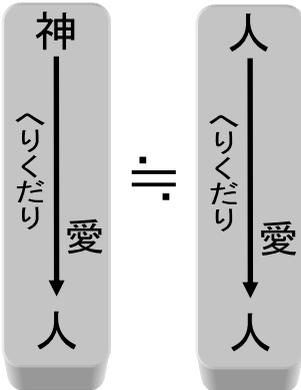


十戒



「自分を愛するように
あなたの隣人を愛せよ」

「心を尽くして、…主なる
あなたの神を愛せよ」



「私があなたがたを愛したように、
あなたがたも互いに愛し合いなさい」

- 親子の愛
- 男女の愛
- 友達の愛
- アガペー

「愛は寛容であり、愛は情け深い。
…愛は高ぶらない、誇らない、不作
法をしない、…すべてを信じ、すべ
てを望み、すべてを耐える。愛はい
つまでも絶えることがない。」

聖師父たちの言葉——愛

「敵を愛し、憎む者に親切にせよ。のろう者を祝福し、はずかしめる者のために祈れ」と主は言われた。なぜ主はこうしたことを命じたのか。それは、主が、あなたを、憎しみ、苦悩、怒り、恨みから解放し、神にならってすべてを等しく愛する者のみが持つことのできる最も大きな富、すなわち全き愛にふさわしい者となすためである。」（表信者聖マキシム）

「愛のない徳行は賞賛されないし、有益でもない。同様に、行いのない真実の愛というのもありえない。パウエルは、行いに関して“私が（このことあのことを）しても、もし愛がなければ一切は無益である”（コリンフ前13：3）と明かに述べており、ハリストスの愛弟子は、愛に関して“言葉や口先だけで愛するのではなく、行いと真実とをもって愛し合おうではないか”（イオアン第一公書3：18）と書いている。」（聖グリゴリイ・パラマ）

「愛をもたないすべての行いは、その始まりと根源からして無である。」（金口イオアン）

「主を愛すると言いながらその兄弟に対して怒る者は、夢の中で走ろうとする者に似ている。」（階梯者聖イオアン）

「神への愛は、神との交わりのために心に翼を与えることを切望する。そして隣人への愛は、常にその人の善を思うようにさせる。」（表信者聖マキシム）

「痛悔と謙遜はたましいを立て、愛と柔和はそれに力を与える」（修道士エヴァグリス）

第4章 正教会の世界観

① 人間

神のイコン

これまで度々述べたように、私たち人間は神に似せて造られました。人間とは「神のイコン」である、というのが正教会の人間観です。旧約聖書の創世記によれば、神はご自分の「像」と「肖」に従って人を創造されました。「神の像」とは、神に近づくための力や可能性や出発点を意味し、「神の肖」とは、その実現や完成を意味します。人間は初めから完璧な者としてではなく成長し進化すべきものとして造られたわけです。しかし、人間は罪によって「神の肖」を失ってしまい、「神の像」も破損しました。破損した「神の像」は、それでも消滅せずに残存しています。どんな人間でも神のイコンでありつづけるので、一人一人の人間は、かけがえのない尊き存在なのです。

三位一体の像

人が「神の像と肖」を持つという時、その「神」とは至聖三者の神であることを見落としてはなりません。人間が多様性をもち、一人一人がかけがえのない「個」でありながら、一つに一致し、愛の交わりをもつことができるのは、至聖三者に似せて造られているからです。

自由意志をもつ人間

人が「神の像」をもつことは、人が理性をもつことに置き換えて説明されることがあります。確かに人が大いなる知識と知恵と理解をもって社会生活を営むことは、私たちと動物とを区別する一面です。しかし、理性だけが人間の唯一の特性ではありません。正教会

では「神の像」の中の「自由意志」に強調を置きます。神が自由であるように、人間も自由です。自由であるが故に、真実の愛をもって愛し合うことができます。神様は人間からこの「自由意志」を取り上げません。もし人間からそれを無くしたら、人間ではなく人形かロボットになってしまいます。もちろんすべてのことを行うのは神様ですが、人間には、それを受け取るか拒絶するかを選択する自由意志が残されているわけです。

シネルギイ

「神の力」を受け入れる「人の力」が私たちにはあるということです。この神の力と人の力との共同のことを正教会では「シネルギイ」と呼びます。「シネルギイ」とは、「力を合わせる」という意味です。人間は神との「シネルギイ」によって、生活し、成長し、信仰し、救われるのである、と正教会は教えます。「シネルギイ」の典型的な例が生神女マリヤです。神・聖神の力とマリヤの自由意志による従順の力が、^{キリスト}ハリストスという「救い」をもたらしました。

テオシス（神成）

神の像としての人の成長や発展には、終わりがありません。限りなく尽きることなく、人は、神に似てゆきます。それは、神ご自身が限りなく永遠であるからです。神に似てゆくということは、「神の本性にあずかる」（ペートル後書 1:4）ということです。

人間が神の本性にあずかるようになることを、正教会では「テオシス」と言います。「テオシス」は正教会では「^{しんせい}神成」と訳されます（一般では「神化」と言う）。アフアナシイという聖師父は、「神が人となったのは、人が神になるためであった」と言いました。「人が神に成る」という言葉は、それだけを取りあげた場合、かなり危険で誤解を招きかねませんが、しかし、「テオシス（神成）」は、正教会の教えの根幹にあるものです。

人が神に成るといっても、人でなくなるのではありません。あくまでも人でありつづけながら、神の本性（愛とか自由とか永遠とか喜びとか力）をいただくことを言います。

だから「テオシス（神成）」は特別な人にではなく、すべての人にとって関係することです。また何か特異なことをするのではなく、全く普通の信仰生活を励むことによってテオシスはなされていきます。普通の信仰生活とは、教会に参拝し、機密を受け（第5章①を参照）、聖書に耳を傾け、深く祈り、互いに愛し合い、赦し合い、助け合うということです。

聖人はテオシスの栄光にあずかった人々ですが、しかし、罪の自覚、痛悔の心は逆にますます深くなっています。神がへりくだりの神であるように、テオシスされる人間はへりくだりをもちます。テオシスとは、言い換えれば人間がより人間らしく（神の像として）なることです。

見ゆると見えざる両面をもつ人間

創世記にはまた、人間を「地の塵をもって」造り、「生命の気」を吹き入れたと書いてあります。これは人間に肉体の面と霊（神^o）の面の両面をもっていることを示唆します。神は、「見ゆると見えざる万物」をお造りになられましたが、人間はその両方とももっています。人間のみがこの二つの世界に属しています。

天使は霊（神^o）の面しかありませんし、動物には肉体的な面しかありません。正教会は、聖書が教えるように、人間を、この肉体と霊（神^o）が一つになったものとして捉えます。信仰や祈りや救いということも、単に霊（神^o）に関するだけでなく、肉体をも含んだ全身全霊に関することとして考えます。

キリストが復活した時、単なる霊ではなく肉体をも持っていたように、私たちの望む「復活」や「来世の生命」も体をもつものであることは確かです。

ミクロコスモス

こうした「見ゆると見えざる」両面をもつ人間は、「ミクロコスモス（小宇宙）」と呼ばれます。「ミクロ」とは「小さい」、「コスモス」とは「宇宙」「万物」という意味です。一人の小さい人間の中に「見ゆると見えざる万物」全体の像が鏡のように映し出されているからです。

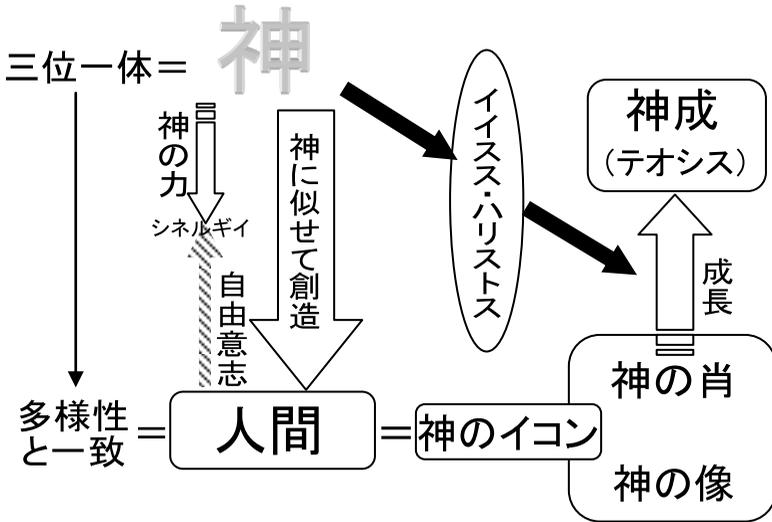
人間が「ミクロコスモス」であるということは、人間が「見ゆると見えざる」二つの世界の仲介者であるということも意味します。仲介者とは、この二つの世界を調和させ、一致させ、神にふさわしいものとして変容させ、感謝をもって神に献げる使命をもつ者という意味です。神様は人間を造った時、この世を「治め、つかさどれ」と命じました。

罪深い人間は、この言葉を曲解してこの世を自分勝手に使用する権利があると勘違いしてしまいます。そうではなく、心から感謝をこめて、創造主である神にこの創造された世界を献げ戻すことこそ、この世を「治める」という使命の意味です。

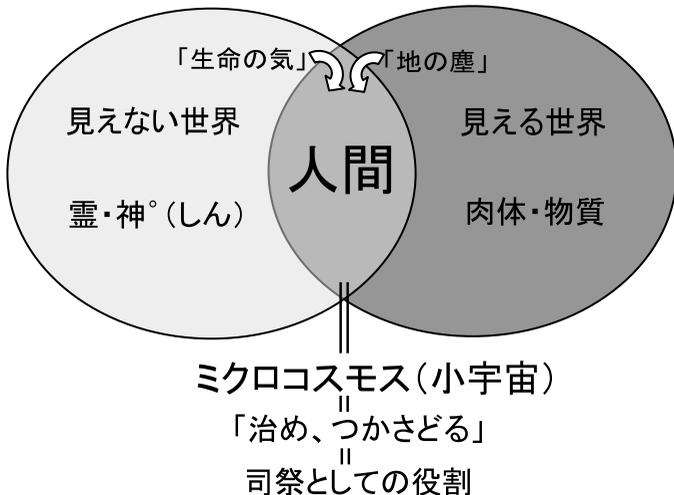
司祭としての人間の役割

言い換えれば、すべての人間は、司祭としてこの世と自分を神様に献じるべきものなのです。アダムは、この司祭としての役目を怠りました。キリストはこの司祭としての人間の役目を復帰させました。私たちが、神の完全な像であるキリストと共に感謝をもって自分とこの世を献げようとする時、神の像は回復され始め、テオシスが開始します。

神のアイコンとしての人間



マイクロコスモスとしての人間



② 天使と悪魔

属神の世界

神様が造った万物の中で「見えざる」部分に属しているのが天使や悪魔です。「見えざる」と言っても、単にこの肉眼では捉えられない世界というのではなく、物質的な世界に属さないスピリチュアルな（正教会では「^{ぞくしん}属神」といい、一般では「霊的」という）世界のことです。つまり物質の中にある見えない部分という意味ではなく、それとはまったく次元の異なる世界という意味です。（空気や時間は肉眼では見えませんが、物質的な物理的な世界に属するものです。）

天使は、しばしば人間の目に見える形で現われたりしますが、^{スピリチュアルな}属神の世界の存在です。この「見えざる」世界も、神様が創造されたものであり、神様ご自身の存在とは本質的に異なる世界であることも注意しておかなくてはなりません。

さて、正教会の聖伝によれば、この「見えざる」世界は、「見える」世界に先立って創造されました。言い換えれば、天使は人間より先に造られたということです。聖書は、天使の創造について詳しくは語っていませんが、その存在と働きについては、私たちに啓示されています。

天使について

「天使」（正教会では「神使」とか「神の使い」とも言う）とは、「使者」という意味の「アンゲロス」というギリシャ語を訳した言葉です。神から遣わされるという役割を言い表しています。

天使は、第一に神を讃美する者であり、第二に私たち人間に神のみ旨を伝える者であり、第三に私たちを助け、神に導く者です。

「天使」という言葉は、厳密に言うと天使の階級名の一つでもあります。正教会の聖伝は、聖書の記述に基づいて天使には九つの階級があると伝えています。

- 1 セラフィム (イサイヤ6:1~8)
- 2 ヘルヴィム (創世記 3:24、他)
- 3 宝座 (コロサイ 1:16、エフェソ1:21)
- 4 主制 (コロサイ 1:16、エフェソ1:21)
- 5 権柄 (コロサイ 1:16、エフェソ1:21)
- 6 能力 (エフェソ1:21、ロマ 8:38)
- 7 首領 (コロサイ 1:16、エフェソ1:21)
- 8 天使長 (テサロニカ前 4:16、ユダ 9、他)
- 9 天使 (ペトル前 3:21、ロマ 8:38、他)

この中の最上位にある「セラフィム」「ヘルヴィム」は神に永遠の讚美を捧げている者として聖書に登場してきます。中間の階級に関しては、詳しくはわかりません。しかし、「天使長」や「天使」は、私たちと関わりが深いものです。彼等は悪魔と戦い、人に神の言葉を伝える使者として働きます。

天使の特徴

ダマスクのイオアン^{ヨハネ}という聖師父によれば、天使は理性や知恵をもっており、自由意志をもっています。また神の恩寵によって不死の生命をもっています。恩寵によってというのは、天使も神によって造られたものですから、本来なら限りのあるものですが、神様の力によって限りないものにされている、という意味です。天使は神様から与えられた力によって、神の意志を喜んで迅速に行う能力をもっています。天使は羽をもつ形でアイコンや聖書に書かれます。それは、物質の制限を受けず自由にそして速やかに神のみ旨を遂行することを表すためです。

天使は、神の指示によって、ある人間に見える姿で現れます。しかし普通、見えないままで、神から遣わされて、私たちを助け守っ

ています。

悪魔について

天使の中で神に反逆する者たちがいました。そんな悪を行う天使のことを「悪魔」と言います。「悪魔」は、正教会では「魔鬼」とか「悪霊」とか「サタナ」（一般では「サタン」）とも呼ばれます。「魔鬼」というのは、ギリシャ語の「ディアボロス」の訳で、「引き裂く」という意味をもっています。「悪霊」とはギリシャ語の「ダイオニモン」の訳で、やはり「分離する」という意味をもっています。人間と神の間を「引き離す」という悪を行うからです。「サタナ」というのはもともとヘブライ語で「敵対する」「反抗する」という意味をもっています。天使とは全く逆に神の意志に背く行いをするからです。

悪魔は本質としては天使ですから、天使と同じように理性と知性と自由意志をもつ^{スピリチュアルな}属神の存在です。ただ、その行いが悪の方を向いているわけです。

悪魔の特徴

キリストは、悪魔のことを「偽りの父」であり、ウソつきであると教えています（^{ヨハネ}イオアン8:44）。旧約聖書の創世記に出てくるあのアダムとエワを誘惑した蛇も悪魔として解釈されますが、聖書には「最も狡猾」であると説明されています。

悪魔はその大いなる知性をもって、私たちを騙します。狡猾なウソというのは、あたかも本当であるかのように本当でないことを言う技です。蛇は「この実を食べても死なない。食べると神のようになる」とウソを言いました。真実は逆で、それを食べることによって死が生じ、「神のようになったつもり」になるだけで、その実、神に似なくなりました。

悪魔は、しかし、神から独立して対抗する存在ではなく、すべてを把握する神の力の中にも確かです。悪魔は、もともと天

使であって、本質としては神が創造したものであるからです。また、悪魔は巧みに人間を誘惑しますが、それに同意するか否かは、私たち人間の自由意志にかかっています。

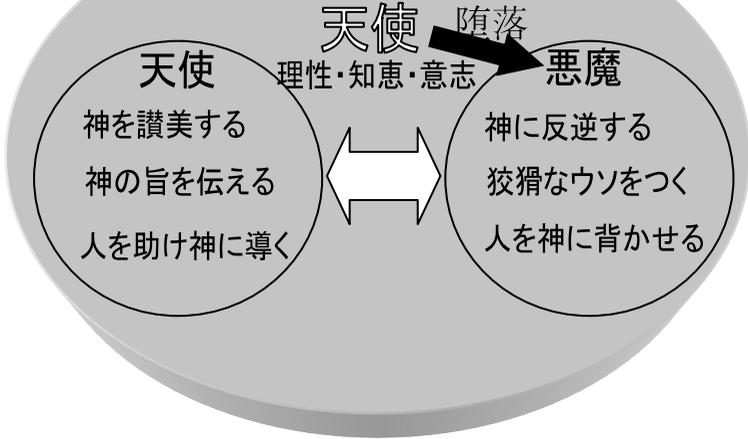
悪魔の力

いつ、どのように天使が墮落して悪魔になったのか、ということについては、詳細にはわかりません。しかし、天使も悪魔も、神話や伝説や象徴ではなく、それらの力は聖書や聖伝の中で教えられ実際に体験されてきました。だからといって、悪魔のことをオカルト映画のように恐怖を与えるおどろおどろしい霊としてイメージしてもいけません。悪魔は自分の存在を気づかせないようにしながら私たちを神から引き離す見えない力です。

神

創造

見えない(属神°)の世界



自由に迅速に神の旨を遂行することを表す翼

神の光を浴びた聖なる者であることを表す後光

知性・知恵を表す古代哲学者のような長い衣

神の旨を伝えていることを表す右の手



③ 自然

神による創造

神様はこの世のありとあらゆるものすべてをお造りになられました。正教会では神様を「造物主」とか「造成主」と言います。神によって造られたすべてのものは「被造物」と呼ばれます。造物主と被造物とは本質を異にします。つまり、造った者と造られた物とは全く違うということです。

神様ご自身は被造物の外側にいます。しかし、造られた物の中には、造物主の力がみなぎっています。自然の中には大きな力がありますが、それは被造物であることに由来しています。

正教会（キリスト教）は、その自然の力を神そのものとして崇めるのではなく、それを造った神を崇めるのです。この世の中に、神（の力）は偏在しています。

聖伝をとおして神の啓示を知らされてなくとも、自然を見つめるだけで、そこに神の大きな力の存在を知ることは可能なことと正教会は認めます。そのようにして真実の神を見いだす人々がいることは事実です。

把握不可能な神

しかし、自然を超越している神様ご自身は、私たちの理解をはるかに越えているということも知っておかなければなりません。人間の頭ですべて把握されるような神様は神様ではありません。私たちが神様のことを語る言葉には限界があるということです。

例えば、「神は存在する」と言うことは正しいことですが、しかし星や風や山や海や動物や人間や天使が「存在」するには「存在していません」。神ご自身はこの世の中にはいません。このように神様について否定形の文を用いて描写することを正教会は忘れません。これを難しい言葉で「否定神学」と言います。

被造物すべては善

神様は被造物をすべて「善」として創造されました。旧約聖書には「神が造ったすべての物を見られたところ、それは、はなはだ良かった。」(創世記 1:13)とあります。神が造ったすべてのものは「善」であるわけですから、この世の中にある物質も、そして私たちのこの肉体も、すべて善きものであるのです。

「霊的なもの」は善であって「物質的なもの」は悪であるという考え方を「二元論」と言いますが、正教会は聖書に基づいてこれを拒絶します。確かにこの世には肉体の弱さや物欲から来る罪や悪が存在します。しかし、それは「物質」が悪いのではなく、それを悪く用いる人間の意志が悪いのです。

被造物全体の救い

目に見えるこの物質や肉体は、見えない世界と同じように神の善なる被造物です。しかし人間の罪の意志によってこの世が汚された故、神様はこの両面ともに救うために「人間」になりました。そして死んで復活した時、霊的な面だけでなく、ちゃんと肉体をも含めて復活なさったのです。

神様は「人間」を救うことによって、被造物全体を救われます。新約聖書には、「被造物は、実に、切なる思いで神の子たちの出現を待ち望んでいる。なぜなら、被造物が虚無に服したのは、自分の意志によるのではなく、服従させたかたによるのであり、かつ、被造物自身にも、滅びのなわめから解放されて、神の子たちの栄光の自由に入る望みが残されているからである。」(ロマ書 8:19~21)と書いてあります。

また旧約聖書には、罪を犯したアダムに対して神が「地はあなたのためにのろわれ」と言ったとあります(創世記 3:17)。つまり、「自然」は人間の罪によって汚されているので、人間の罪のあがないは、

「自然」全体のあがないであると正教会は考えます。

人間の役目

そもそもこの世のすべては人間のために造られました。旧約聖書の詩編（正教会では「聖詠」と言う）には、神は人に「み手のわざを治めさせ、よろずの物をその足の下におかれた」と書いてあります（8:6）。しかし、「治める」という言葉を「欲望のままに勝手に利用する」という意味に解釈してはなりません。そうではなく、神の被造物の責任ある一員として、感謝して自然を受け取り、神にふさわしいものとして育成してゆくという意味なのです。

小さく短い一生しかない私たちにとって、宇宙や自然はあまりに大きくまた途方もなく長い時間をもっているように思えます。しかし、それは逆に神の大いなる力への讃美を促し、この世に対する私たちの役割を軽減するどころか、ますます重くします。宇宙や自然が壮大で驚異的であればあるほど、神様を知る道は広くなります。

「物」を大切に作る正教会

「物」を通して、「物」と共に、神は私たちに恵みを与え、私たちは神を信仰します。すなわち正教会は、「物」を大切なものとしてとらえます。

正教会にある「物」、つまりイコンや十字架やろうソクや香炉や聖水などは、信仰のためにふさわしい物として使用されます。また十字架をかくとか伏拝とか接吻という動作や聖歌を歌うなどというのも、私たちの肉体を信仰のためにふさわしい器として使用していることです。

正教会では聖人たちの体を「不朽体」として、イコンと同じように「崇敬」します。私たちが真実に復活の体を受けるのは「来世」においてですが、聖人たちは、それを「先取り」しており、この世においてすでに神の栄光にあずかっているからです。

「聖なる物」をもつ正教会

このように、正教会には「聖なる物」がたくさんあります。しかし、「聖なる物」を、「俗なる物」からかけ離れた何か特別なものという意味に解釈してはいけません。「聖」と「俗」を対立させたり、「俗」を否定して「聖」を保たせたりするものではありません。「聖」とは、神とのつながりを持っているという意味です。そして、すべての被造物は「聖」になりうるものであり、正教会の中の「聖なる物」は、その本来の聖性を回復し、また来世の光栄を先取りしたものです。「聖水」は、何か特別な質の違う魔法の水ではなくて、神とのつながりを持つための本来の役割を回復した水なのです。

「機密」

このように、見える物をとおして見えない神の恵みとつながりを持つということを、正教会では「機密」と呼びます。すべての被造物を「機密」的に把握することが大切だと正教会は教えます。

神が人となったお方である^{キリスト}は、まさに神とこの世との完全な「つながり」をもたらしました。^{キリスト}をとおして、私たち被造物は、機密的になり、聖となります。^{キリスト}をとおして自然や宇宙は、神の光栄を輝かせます。

造物主・造成主

神

超越している

本質は異なる

創造

否定神学

「神は～ではない」

被造物

「見ゆると見えざる万物」

物質も霊も「善」

神の力は偏在

人間の罪(意志)に
よって汚されている

ハリストスの藉身と復活
による聖性の回復

正教会の機密
(被造物を神と再結合させる)

④ 摂理

神の摂理

神様はこの世を造ったきりで、後は放っておくなんてことはなさいません。神様は、いつでも今でもこの世を創造しつづけ、見守っておられます。この世に対する神の配慮を「摂理」と言います（正教会では「照管」とか「定制」と呼ぶこともある）。ギリシャ語では「オイコノミア」と言います。これは「経済」と訳される「エコノミー」と同じ言葉で、もともと「家庭の世話」という意味です。これが神様に関して用いられた時に、神のこの世に対する「配慮」とか「管理」という意味になります。

この世は神の意志によって創造されました。そして神の意志によってこの世は摂理され続けます。さらに、私たちのために神様が人となったこと、聖神が降ることも「オイコノミア」と呼ばれます。

善なる摂理

ダマスコのイオアン^ネという聖師父は「神は善である故に、摂理なさる」と言っています。もし子の面倒を見ない親がいたとしたら、良い親でないと非難されます。同じようにもし、神様が「摂理」しないのであれば、「善」ではなくなります。また神様は大いなる知恵をもって摂理する、と正教会は信じます。

理解を超える知恵

しかし、この知恵はしばしば私たちの理解を超えています。私たちの目からはとうてい受け入れ難いことでも、神の善なる知恵深い摂理の中にあることは真理です。災いや痛みや苦悩の意味は、ある程度までは理解可能なものもあります。例えば、パウエル^ヴは自分に一つの「とげ」が与えられたのは自分が高慢にならないためである、と言っています（コリント^ト後書 12:7）。イオフ^フが苦難に耐えたのは、

神が彼の信仰を私たちに明示するためでした。

しかし、まったく理解できない苦難や災いも確かにあります。私たちはそれに悩み苦しみます。そこにそれぞれどんな意味があるのか、私たちには今はわかりません。それでも、神はすべてのものの救いを意志なさっているということは究極的な答えとして知っておかなくてはなりません。神の深い知恵と力と愛による摂理を信じる必要があります。

奇跡

神様は時々「奇跡」を起こして、ご自分の力を私たちに明確に啓示なさることもあります。「奇跡」とは神の力が特別に現れることです。しかし、いわゆる「奇跡」ばかりの世の中だったら、この世は無秩序の世になってしまいます。神様は万物をそのように創造されませんでした。もちろん、私たちがこうして生きているということ自体を「奇跡」と呼ぶこともできます。殊更驚異的に感じられなくても、神の力は、常に自然の中、私たちの中に働いているからです。

人の自由意志と摂理

神様は、天使と人間に「自由意志」というものを与えました。そして神様は、自ら与えたこの自由意志を剥奪したり無視したりすることはなさいません。なぜ、この世に「悪意」を持つ人間がいるのか、については、神は、その人の自由意志をとりあげないので、その人の意志に任せているというのが答えです。しかし、「神はすべての人が救われて、真理を悟るに至ることを望んでおられる」(ティモフェイ前書 2:4) ことは確かです。

予知と予定

正教会はまた、「神はすべてのことを予め知っているけれども、すべてのことを予め定めておられるわけではない」と言います。「神が

すべてのことを予め知っている」ということを「予知」と言い、「すべてのことを予め定める」ということを「予定」といいます。正教会は、神は「予知」はなさるが「予定」はなされない、と断言します。「予定」とは、この場合、人間の自由意志を無視して、神が独断ですべてのことを予め決定しているという意味です。

確かに聖書には「神の計画」という言葉があります。しかし、それは神様ご自身が私たちを救うために自ら働かれる配慮という意味です。その計画に従うか否かはあくまでも私たちの自由意志によっています。神は「予知」なさるが故に、神にとってすべては予め定まっていることと同じである、ととらえることはできません。全知の神様は、この世がどうなるか、私たちがどういう選択をするかは、すでに知っておられます。神様にとってはすべて自明のこと、決定していることです。しかし、神が勝手に無理やり強制的に「予定」することはありえません。

神の摂理を信じれば

神が摂理なさる、ということを正教会は信じていますので、例えば、迷信とか占いとか運命とか因果応報などは正教会では否定されます。

縁起をかついでこのことをすれば、あるいはしなければ、いいことや悪いことが起きる、という迷信は、神の力を無視した態度です。

占いも、それ自体の考えに根拠がないだけでなく、神ではないものに生活や人生を委ねてしまうわけですから、正教徒は占いをしたり頼ったりしてはいけません。

運命を、最初からそう定まっていたことだからどうしようもない、という意味にとるなら、それは神の意志や自分の意志を拒絶してしまうことになります。

因果応報とは、災いがふりかかるのは何か悪い原因があり、幸いを得られるのは何か善い原因があったから、という考えです。確か

に聖書にも、悪者の災いと義人の幸いが描かれていますし、逆に悪者が幸いを得て義人が苦難をうける現実を神に訴えている記述もあります。しかし、それは正義をもって神様が摂理なさることを信じるからです。そうではなく、例えば、大きな病気を患ったのは先祖を敬わないせいだ、とか、不幸が続くのは何か悪い因果があるからお祓いをしなければならぬ、などという意味の因果応報は、まったく否定しなければなりません。

たとえ悪や困難や災いがあったとしても、「神の摂理の方法は、言葉で説明できないし、心で把握することもできない」（ダマスクのイオアン^{ヨハネ}）ということを知っておきましょう。

神

「オイコノミア
=世話・配慮」

摂理

深い知恵と愛と力

被造物

奇跡＝神の力の顕れ
人間に与えられた自由意志

予知＝人間の自由意志による
行動を予め知っている

× 予定＝神が一方的に強制的に
全てのことを定めている

× 迷信

× 運命論

× 占い

× 因果応報

⑤ 天国

神の支配

キリストスは、「悔い改めよ、天国は近づいた」と言われました。「天国」は「神の国」とも呼ばれます。「天」は「神」の代名詞として使われます。「国」といっても、この地上にあるどこかの国という意味ではありません。「国」と訳されたギリシャ語は「バシレイア」といい、「王」とか「支配」という意味をもっています。つまり「天国」とは、神であるキリストスが王として万物を支配する状態のことをいいます。

キリストス王の支配とは、私たちが罪や悪や死から解放され、神のみ旨が十全に行われるということです。「天国が近づいた」というのは、キリストスが人となってこの世に来られ、復活して「死をもって死を滅ぼす」ことを意味します。しかし、その救いを受け入れるか否かは、私たちの意志にかかっていますので、「悔い改めよ」という呼びかけがなされるわけです。

天国はすでに来た

キリストスは、「神の国はすでにあなたがたのところに来た」とも言われました。キリストスが人として来られたという事実、そして教会があるという現実は、「すでに神の国は来た」ことを証します。教会は、キリストスに治められながら、この世で罪や悪や死からの解放を先取りする機関だからです。正教会の聖人たちはそれを証し、正教会の奉神礼はそれを宣言しています。しかし、まだ天国は来っていないことも事実です。この世では、まだまだ悪が横行し、罪深く過ちに満ちた現実がたくさんあります。

「再臨」

いつ天国は完全に来るのか、というと、キリストスが再びこの世

に来られる時です。そのことを「再臨」といいます。二千年前、^{キリスト}ハリストスはケノーシス（へりくだり）の形で誰にもわからないように来られましたが、今度は、「**光栄を顕わして**」誰にもわかるように再臨されます。もし「この人は再臨された^{キリスト}ハリストスです」と他人から教えられたら、そのことですでにそれはウソだとわかります。そうした人々を惑わす偽者が起こることも^{キリスト}ハリストスが預言しています（^{マト}マツェイ^イ24章を参照）

「終末」

^{キリスト}ハリストスは、「この世の終わり」に再臨されます。「この世の終わり」のことを「終末」と言います。「終わり」と言っても、この宇宙全体が崩壊して全滅してしまう、という意味ではなく、新しい状態に変化するといった方が正確です。

「始まり」があるものは必ず「終わり」がありますが、その「終わり」は「新たな始まり」です。神様が「善いもの」として創造した被造物全体を、神が軽蔑して無に帰してしまうことはありません。

もちろん、聖書には「終末」について、天変地異が起きるとか、多くの不法がはびこるとか、大きな患難が起るとか、言われています。それはある意味「産みの苦しみ」です。私たちも、復活するためには一度「死」という「終末」を経なければならぬように、「この世」も、光栄を得て復活し神の臨在に満ち満ちるために「終末」という大変革を迎えます。

その大変革を想像すると不安と恐怖の感情が起り、「一体いつ終末が来るのか」と計算したくなります。しかし、^{キリスト}ハリストスご自身が「その日その時は知らない」とおっしゃっていますので、「終末」の年月日を詮索する態度は否定されます。^{キリスト}ハリストスが教えられたように、いつでも心の「目をさまして」おくべきなのです。

「最後の審判」

神を愛するか否か、神の救いを受け取るか拒絶するかは、私たちにとって今はどちらも可能であって、ある意味行ったり来たりしていますが、「再臨」と「終末」の時には、それが決定してしまいます。それを「最後の審判」と言います。

「信経」では「**生ける者と死せし者を審判する為に**」^{キリスト}が再臨されると言います。すべての時代のすべての人間が、^{キリスト}の前で「はい」か「いいえ」を言うことを迫られます。それが「審判」の意味です。これを悪いことをした人間を地獄に追いやり、善いことをした人間に報償として天国に入らせるという風にイメージしてはいけません。

地獄というのは、神様が罪人を虐待する所ではなく、人間が自由意志によって自ら神を拒絶してしまう状態をいうのです。反対に、天国というのは、神様と共にいることを喜びに思う状態のことをいいます。

新しい生命

「信経」では、「**我、望む、死者の復活、並びに来世の生命を**」と言います。「死」が神との分離であり、体とたましいの分離であるなら、「復活」は神との一致であり、体とたましいとの再統合です。だから「来世の生命」とは、単に死後のたましいという意味ではなく、肉体をも含んだ新しい生命という意味です。^{キリスト}が肉体をもって復活したように、^{キリスト}を信じる者は「終末」において新しい復活の体をいただきます。(すべての人が復活して、天国か地獄が決定すると言われることもあります。)

「煉獄」はない

カトリックでは「煉獄」という天国と地獄の中間状態を想定し、罪人がそこで苦痛を受けることによって罪が精算されるように教え

ますが、正教会では、神の憐れみと^{キリスト}の贖罪を軽視するような考えを否定します。

「死後」のとらえ方の違い

人は死ぬと消滅してしまうだけだと思う人たちがいます。それは神も神の創造や摂理も信じない無神論者の考えです。

また輪廻転生して、生まれ変わっていくと思う人たちがいます。しかし、神の像として、尊き「個」として造られた人間が、動物になったり、別の人格になったりする筈がありません。

私たちの肉体は死んだあと分解してしまいますが、たましいは「復活」のために存続します。しかし、それは「靈魂の不滅」とは違います。「靈魂の不滅」とは、罪深い肉体から善なるたましいが解放されて、靈的世界で永遠に生きるという教義です。「靈魂の不滅」は肉体や物質も神が造った尊い物という信仰を否定し、人間の本来の姿を見失わせる考えです。

また死後の「靈界」などという世界を想定して、まことしやかな描写を行い、死の恐れを払拭しようとしたり、この世と同じような「別の世界」をイメージして、それを「天国」と称してみたりすることも、正教会が教える「復活」や「来世の生命」とは異なります。

「永眠」の意味

死者のたましいは終末まで「眠っている」状態にあるというもの、正教会の教えではありません。確かに「永眠」と言いますが、これは「復活」を強調した表現です。死者のたましいは、どんな状態かは不明ですが、私たちとの関係をもちつつ復活を待っています。

神

国=バシレイア=支配

天国・神の国

すでに来た

教会

まだ来てない

終末
再臨

最後の審判

復活

死=永眠
=復活を待つ
×消滅して無くなる
×輪廻転生する
×肉体は悪、靈魂は不滅
×靈界に移住する

光栄を顕わして
生ける者と死せし者を審判する
為に還た来り
…我、望む死者
の復活、並びに
来世の生命を

地獄=自ら神を拒絶する状態

聖師父たちの言葉——天国

「私たちの心から罪を取り除こう。私たちは自分の中に天国を見いだすだろう。」(シナイの聖フィロセオス)

「神の国は、それを望み、それを意志する人に常に現臨している。人の状態と生活が天使のようであれば、確かにそれが神の国である。」(テオフィラクト)

「神の国は、至聖三者を知ることである。それは、人の心に、許される限り広がり、終わりのない祝福された生命に満たされる。」(修道士エヴァグリウス)

「あなた自身のたましいに平安を持ちなさい。その時、天と地は、あなたに平安となるだろう。あなたの中にある宝の家に入りたくと熱心に思いなさい。その時、天にあるものをあなたは見るだろう。それら両方に入るということは一つのことなのだから。天国に導く梯子は、あなたのだましいの内側に隠されている。罪から逃れ、自分の中に飛び込みなさい。そうすればあなたのだましいの中に登るべき階段を見つけるだろう。」(シリアの聖イサク)

「地獄において、罪人たちが神の愛から切り離されていると想像することは間違いである。」(シリアの聖イサク)

「愛は、主が弟子たちに奥密に約束した天国である。主は彼等に天国で食事をすると言われた。“（私はあなたがたを）私の国で食卓について飲み食いをさせ（るだろう）”（ルカ 22：30）。愛がなければ、どうして飲み食いができるだろうか。」(シリアの聖イサク)

第5章 正教会の祈り

① 機密

奉神礼

正教会で行われる祈り全体を総称して「奉神礼^{ほうしんれい}」と言います。奉神礼とは、ギリシャ語の「リトゥルギア」の訳です。「リトゥルギア」^{おおやけ}とは「公の仕事」という意味です。

正教徒が、神を正しく讚美し感謝し、祈りをささげるとするのは、神の民としての当然の務めなのです。

さらに言えば、人間はそもそも奉神礼的被造物であるのです。人間は祈りによって神と交わるように造られた存在であるということです。

機密

正教会の奉神礼の中には「機密」と呼ばれる祈りがあります。「機密」とは、ギリシャ語の「ミステリオン」を訳した言葉です。他にも「サクラメント」と呼ばれることもあります。「サクラメント」とはもともとラテン語で、軍隊への入隊式を意味していました。それがやがて教会の信徒となる奉神礼である「洗礼」を指すようになったと言われています。「ミステリオン」というギリシャ語は、「ミステリー」という言葉と同じ語源です。すなわち「神秘」とか「秘密」とか「謎」いう意味をもちます。しかし、「ミステリオン」は、その「謎を解き明かす」という意味をも含んでいます。正教会の「機密」とは、神の見えない神秘的な恵みを、見えるものをおして自分の身にうける、ということです。例えば、洗礼は、水という見えるものをおして、^{キリスト}との一致という神秘的な恵みをいただき、「罪の赦しを得る」のです。

機密的に生きる

この世にある物や形や行為が、神様との交わりをもつようになるということを「機密」と呼ぶなら、正教会の奉神礼はすべて「機密的」ですし、また私たちの生活や人生そのものが「機密的」にならなければなりません。私たちは肉体をもって人生を送っていますが、その人生全体が神とのつながりのうちにあることが、一番肝心な「機密的」なことです。

七つの機密

ただし、正教会で単に「機密」という時、それは今では、普通、次の七つの奉神礼を意味します。これらの機密は、「洗礼機密」以外、正教会の信徒でないはずかることはできません。

洗礼（せんれい）機密

傅膏（ふこう）機密

聖体（せいたい）機密

痛悔（つうかい）機密

婚配（こんぱい）機密

神品（しんぴん）機密

聖傅（せいふ）機密

洗礼機密

洗礼機密は、クリスチャンとなるための機密です。水の中に三度沈み、三度起きあがるという行為によって、ハリストス^{キリスト}と共に死に、ハリストス^{キリスト}共に復活するという恵みが与えられます。簡易的に頭に三回水を注ぐという形も行われます。

正教会では「至聖三者（三位一体）の名」によって洗礼を受けなければ、洗礼とは認めません。

洗礼機密とは、新しい人に生まれかわる、という意味もあります

ので、一生に一度しか洗礼機密は受けられません。

洗礼を受けた人には聖名(クリスチャンネーム)がつけられます。聖名は数多くの聖人の名前の中から選ばれます。その聖人にあやかり、とりなしを願い、天上の教会とのつながりをもつためです。

洗礼者は、「洗礼着」と呼ばれる白い衣をまといます。そして「ハリストスによって洗を受けし者、ハリストスを着たり」と歌い、ハリストスを「身につける」生活が始まったことを祝します。

正教会では唯一の神への信仰に基づいて、「幼児洗礼」を奨励します。また、危篤などのやむをえない時、信徒が「摂行洗礼」を施すこともできます。その場合、司祭への連絡が不可欠です。

傅膏機密

傅膏機密は、洗礼をうけた直後に引き続き行われる機密です。「傅膏」の「傅」は「つける」とか「塗る」という意味で、「膏」とは油です。傅膏機密とは、神・聖神の恵みが新しい洗礼者に降るために、「聖膏」と呼ばれる特別な油をつける機密です。「聖膏」は、総主教座教会で年に一度、聖大木曜日に作られ、各教会に配られる油です。

カトリックにおいてこの機密は「堅信礼」といい、洗礼と引き離れた扱いをしますが、正教会では洗礼と組み合わせられています。聖神の恵みは生まれたばかりのクリスチャンにすぐにも必要だからです。

聖体機密

聖体機密は、ハリストスの体と血となったパンとぶどう酒をいただく機密です。ハリストスの体と血となったパンとぶどう酒のことを「御聖体」といい、「御聖体」をいただくことを「領聖」といいます。御聖体を領聖することによって、罪の赦し、永遠の生命、ハリストスとの交わりといった恵みが与えられます。聖体機密は機密の中の機密、とも言われます。聖体機密が行われる奉神礼のこと

を「聖体礼儀」といいます。

痛悔機密

痛悔機密は、自分の罪を悔い改めようとする気持ちを言葉で表し、罪のゆるしを得る機密です。「痛悔」という言葉は、広い意味では罪を悔いて神の方に向き直る心そのものを指していますが、狭い意味では「痛悔機密」を受けることを指しています。

司祭は、罪を繰り返さないための助言をしますが、基本的にはその人が心から痛悔の心をもっていることを証する証人にすぎません。痛悔機密は「第二の洗礼」とも呼ばれます。「洗礼」によって神と一つになり罪を赦された私たちは、弱さによって再び神と離れてしまいます。しかし洗礼の受け直しはできません。その代わり痛悔機密を受けることができるのです。

日本正教会では、御聖体を領聖する信徒は、その前に痛悔機密を受けておくべきとされています。

婚配機密

婚配機密とは、いわゆる結婚式です。結婚とは、単に男女が生活を共にするというのではなく、神の恵みによって一つになるという機密なのです。人間は三位一体に似せて造られましたので、人と人とは区別されながら、愛のうちに一致することができます。

婚配機密は、指輪の交換を中心とした「聘定式」と、冠を被ることを中心とした「戴冠式」の部分に分けられます。指輪は西方教会とは違い正教会では神の力を意味する右手にはめます。冠は、王と王妃として自分の生活を治めていくため、また信仰を貫いて勝利者となるための神の恵みを表しています。

なお、正教会では離婚は罪であり、基本的に認められません。ただ人間的配慮として再婚を認める場合もあります。

神品機密

神品機密とは、「主教」「司祭」「輔祭」という教会の三つの役職に任命するための機密です。この三つの聖職のことを「神品^{しんびん}」と正教会では言います。「神品機密」は「叙聖」とも呼ばれます。叙聖する力をもつのは、使徒の継承者である主教のみです。新しい主教は複数の主教によって叙聖されます。

神品機密は必ず聖体礼儀の中で行われ、主教は新しく叙聖される者の頭の上に手を置きます（「按手礼」呼ばれることもある）。按手という見える形をおとして、聖神の力が新しい神品に付与されます。会衆は、その人が神品職にふさわしい者であることを承認して「アクシオス」（「適任」の意）と唱えます。

聖傳機密

聖傳機密とは、病に伏している人のために行われる機密で、その人に油を塗り、いやしと罪のゆるしとを祈ります。特に死に直面している人のためには、信仰を固め、精神的な力を与えます。基本的には、七人の司祭が交代で聖書を読み、祈り、七回油を塗りますが、司祭一人でも行うことはできます。

② 聖体礼儀

最重要機密

聖体礼儀は、正教会の中で最も中心的な奉神礼であり、最も重要な機密です。

「機密」というのは「見える」この世の物と「見えない」神の恵みが一つになることです。ですから、神そのものである^{キリスト}が私たちと同じ肉体をとられたこと（藉身）が、機密の基礎となります。その藉身された^{キリスト}と私たち一人一人が繋がりを持ち、交わり、一つに合わさるための最も重要な機密として^{キリスト}自らが聖体機密をお与えになりました。

「機密の晩餐」

^{キリスト}は、「私は天から降ってきた生きたパンである。…私の肉を食べ、私の血を飲む者は私におり、私もまたその人におる」と言われ（^{ヨハネ}5：5 1以下）。そしてパンとぶどう酒をさして「これは私の体」「これは私の血」と言われたのです（マルコ14：22～24、他）。

^{キリスト}が十字架にかけられる前の晩に弟子たちととった食事を、一般ではよく「最後の晩餐」と言いますが、正教会では特別に「機密の晩餐」といいます。この「機密の晩餐」において、聖体機密が制定されたからです。

聖変化

正教会では、パンとぶどう酒を^{キリスト}の体と血に「見立てている」ではありません。単なる象徴とか儀式で聖体礼儀を行っているではありません。しかしまた、すっかり体と血に変質してしまって、もはやパンとぶどう酒ではないとも言いません。聖体礼儀は魔法ではありません。

パンとぶどう酒はパンとぶどう酒でありながら、同時にキリストの体と血に変わります（「聖変化」と言う）。どうやってパンとぶどう酒がキリストの体と血に変化するのかは、通常の見解を超えたことで説明できません。ただ聖神の力によってとしか言えません。しかし、現実には、聖体機密のパンとぶどう酒はキリストの体と血です。

聖体礼儀の種類

現在、正教会で行われている聖体礼儀にはいくつかの種類があります。

(1) 聖大ワシリイの聖体礼儀

聖大ワシリイが作成したといわれる聖体礼儀で、現在、正教会で、年10回だけ行われています。

(2) 聖金口イオアンの聖体礼儀

ほとんどの主日、祭日に執行されるもので 聖大ワシリイの聖体礼儀を少し短くしたものです。普通、「聖体礼儀」と言えば、金口イオアンの聖体礼儀を指します。

(3) 聖グリゴリオの聖体礼儀（先備聖体礼儀）

復活祭前の準備の期間である大斎と呼ばれる時期に、晩課の祈りに続いて御聖体を領聖する厳かな奉神礼です。その御聖体は、先の日曜日に余分に作られて準備されるので、またの名を「先備聖体礼儀」といいます。

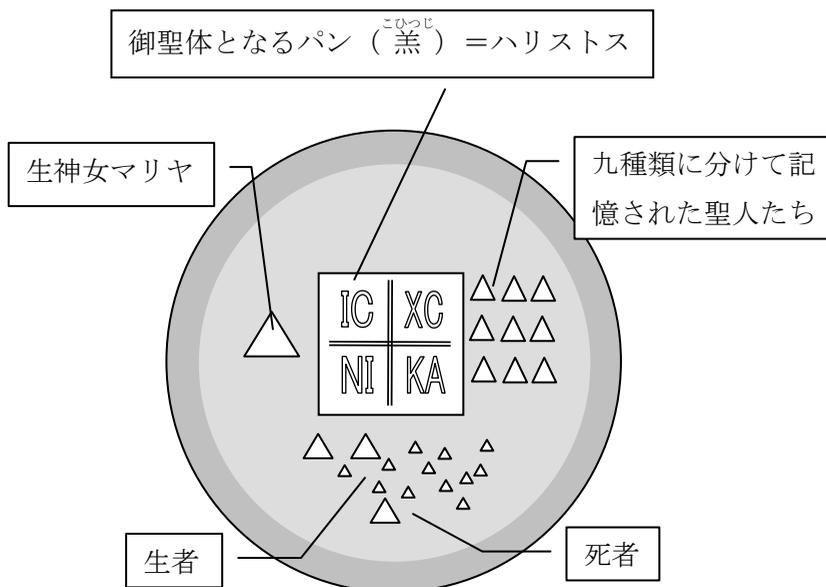
他にも、聖イアコフの聖体礼儀や聖マルコの聖体礼儀というものもありますが、前者はエルサレムの正教会で年に一回だけ行われ、後者はアレキサンドリアの正教会で年に一回だけ行われるという特別な聖体礼儀です。

聖体礼儀の構成

聖体礼儀（金ロイオアンの）は、三部構成になっています。

1、奉献礼儀：

「プロスコミディア」ともいい、御聖体となるパンとぶどう酒の準備、聖人や生者・死者の記憶などを行います。所謂「聖体礼儀」の祈りが始まる前に、至聖所の奥の奉献台で、一人の司祭がすでに奉献礼儀を済ませていますので、信徒の目にふれることはありませんが、ディスコスと呼ばれる皿の上に載せられたパンが「教会」を象っていることは覚えておきたい事項です。



ディスコスの上の記憶された（切り出された）パン

ハリストスを中心に、生神女マリヤや諸聖人たち、永眠した信徒、生きている信徒が一つに集まっている=教会

2、啓蒙者のための聖体礼儀：

聖体礼儀の前半部分で、主に「学び」を目的としています。「啓蒙者」とは洗礼を受けるために学びを受けている人たちのことです。聖詠やトロパリと呼ばれる聖歌、使徒経、福音経を通して、その日のテーマを理解できるようになっています。祈り、学び理解するという点において、ユダヤ教のシナゴグ（会堂）礼拝に由来するとされています。

「言葉の礼儀」とも呼ばれ、その中心にあるのは「福音」を読むことにあります。

3、信者のための聖体礼儀：

聖体礼儀の後半部分で、主に「体験」を重視するもので、最後に、領聖という聖体礼儀の目的を達成します。聖変化の部分は特に重要で、「アナフォラ（「捧げる」という意味）」とも呼ばれています。祈り、捧げものを供え、そして罪の贖いにあずかるという点において、ユダヤ教の神殿礼拝との関連が見られます。ただし、動物ではなく、パンとぶどう酒を献じますので、聖体礼儀を「無血祭」と呼ぶこともあります。

なお、正教会では、必ず発酵させて作ったパンと赤いぶどう酒を使用します。

ユーカリスト

聖体礼儀は「ユーカリスト」と呼ばれることがあります。「ユーカリスト」とはギリシャ語から来た言葉で「感謝」という意味です。神に感謝し、神との交わりを回復することが聖体礼儀の意味です。人としての本来の姿は、この神への感謝と讃美にあります。「ユーカリスト」をとおして神の恵みが私たちに降り、私たちはその恵みによって「罪の赦しと永生」にあずかれるように祈ります。

聖体礼儀の内容

金口イオアンの聖体礼儀の式次第を簡潔にまとめてみます。

- ・ 司祭高声……………至聖三者の神を讃美
- ・ 大連祷……………「主、憐れめよ」を繰り返し唱える
- ・ 第一アンティフォン…通常は102聖詠を歌う
- ・ 小連祷……………大連祷の縮小形
- ・ 第二アンティフォン…145聖詠（省略されることが多い）
＋ハリストスの藉身についての聖歌
- ・ 小連祷……………大連祷の縮小形
- ・ 第三アンティフォン…真福九端（マ^トフ^ェイ5章）を歌う
- ・ 小聖入……………福音経によって主の公生涯の開始を象^{かたど}る
- ・ トロパリ……………その日のテーマを歌う
- ・ 聖三の歌……………至聖三者への祈り
- ・ ポロキメン……………聖詠（詩編）の数節を歌い交わす
- ・ 使徒経……………暦に従って指定された箇所を読む
- ・ アリルイヤ……………神を讃美する歌
- ・ 福音経……………暦に従って指定された箇所を読む
- ・ 重連祷……………「主憐れめよ」を三回繰り返す連祷
- ・ 啓蒙者の為の連祷……………洗礼を受ける前の人（啓蒙者）の為の祈り
- ・ 信者の為の連祷……………洗礼を受けた人（信者）の為の祈り
- ・ 大聖入……………パンとぶどう酒を宝座に移す
- ・ 増連祷……………「主、賜えよ」と繰り返して祈る
- ・ 信経……………「信経」を歌う
- ・ アナフォラ……………パンとぶどう酒が聖神によって変化
- ・ 生神女への讃美……………通常は「常に福い」という聖歌を歌う
- ・ 増連祷……………「主、賜えよ」と繰り返して祈る
- ・ 天主経……………「天にいます我等の父や、」で始まる祈り
- ・ 領聖……………御聖体をいただく
- ・ 感謝の祈り……………領聖したことを感謝する連祷や祝文
- ・ 発放詞……………司祭による最後の祝福

③ 時課と一週間

「時課」について

正教会には「時課」と呼ばれる奉神礼があります。「時課」とはもともと一日を八つの時間に分けて祈る習慣から生まれた祈りです。この時間の区分は、特にハリストスの十字架と深い関連をもっています。キリストスは第三時（朝の9時頃）に十字架につけられ、第六時（昼12時頃）に空が真っ黒になり、第九時（夕方3時頃）に死んだのでした。また、使徒たちに、聖神が降臨したのは、第三時（朝の9時頃）であったことも注目されます。

また、時間ごとに祈るという形は、使徒時代、初代教会までさかのぼることのできる伝統的な奉神礼です。

夕方が一日の始まり

正教会では、ユダヤ教と同じように、夕方から一日を数えます。創世記第一章に、「夕となり朝となった」という言葉があるからです。一日の始まりが夕方にあるというのは、私たちの日常生活からはなかなか感じられませんが、正教会の奉神礼は、この習慣の下にあります。具体的に言えば、「晩課」と呼ばれる時課から奉神礼の一日が始まります。例えば、土曜日の夜からすでに日曜日は始まっている、ととらえます。

「時課」の種類

時課の内容としては、主に聖詠（詩編）を読み、祈祷文を読んだり歌ったりする構成となっています。時課には、基本的に「時課経」という祈祷書を使用します。

時課の種類としては以下の八つがあり、それぞれにテーマをもっています。

	現在の時間	テーマ
ばんか 晩課	夕方 6 時頃	天地創造と陥罪とハリストスの到来
ばんどうか 晩堂課	夜の 9 時頃	痛悔
やはんか 夜半課	深夜 0 時頃	最後の審判
そうか 早課	早朝 3 時頃	起床への感謝、神への讚美
いちじか 一時課	朝の 6 時頃	ハリストスの裁判
さんじか 三時課	朝の 9 時頃	十字架刑、聖神降臨
ろくじか 六時課	正午 12 時頃	十字架上のハリストス
くじか 九時課	昼の 3 時頃	ハリストスの死

「時課」の祈り方

しかし、現代では正確に時間ごとにそれぞれを祈るのではなく、一度にまとめて行われるのが普通です。また修道院は別として、これらを毎日きっちり行うことはほとんどありません（「大齋」の時期には町の教会でも時課をたくさん行う）。

普通、主日（日曜日）や祭日の前の晩に、「徹夜禱」と称して「晩課」「早課」「一時課」をまとめて行い、その日の朝に、「三時課」（「六時課」を続ける場合も）と「聖体礼儀」を行います。

なお、聖体礼儀は「時課」と共に執行されますが、時課の祈りの範疇には入りません。聖体礼儀がこの世の時間の外にある「永遠の時」を意味するからです。

一週間について

旧約聖書の創世記には、神様が七日間で天地を創造されたことが記されています。これを文字通り 24 時間 × 7 日 = 168 時間ですべてが形成されたと解釈することはありません。聖書は科学的な、または歴史的な万能の書ではなく、人間の言葉で書かれた神の言葉、信仰の書です。

七日というのは一週間の単位として古来より現代まで用いられています。ある意味、人間の生活習慣から生まれた単位ではありますが、それをとおして、神の偉大なる秩序正しい天地創造の神秘を啓示しているのです。それを啓示された民であるヘブライ人は、この一週七日を神聖視し、大切にしました。そしてその伝統を受け継いだキリスト教（正教会）の世界の中で、一週間の周期は一度もずれることなく連綿と続いています。

「7」と「8」について

「7」という数字は、聖書において、聖なる数または完全を意味する数として扱われています。また、天地創造の日数であるため、「7」は「この世」を意味していると正教会は考えます。そこに「1」がプラスされる（^{キリスト}の到来）と「8」になります。「8」は、来世とか天国とか復活を意味するようになります。^{キリスト}が復活した日曜日は、数え方によっては「八日目」になります。

「7」が「1」欠けると「6」になります。完全性の欠如は悪であるので、「6」は悪魔や罪を象徴するようになります。もちろん数字に対する意義付けであって、数字そのものにそのような神秘の力が潜んでいるわけではありません。

正教会の奉神礼には、「八調」という独特のサイクルがあります。聖歌のメロディや祈祷文に、第一調から第八調までの種類があって、一週間ごとに順番に調を変えていきます。第八調までくると次の週は第一調にもどります。「8」のサイクルは、前述のように「天国」を意味するサイクルです。

曜日のテーマ

正教会の中で、一週間の各曜日は、それぞれ特別なテーマをもっています。

月曜日は、天使を記憶する日、火曜日は、前駆授洗^{ヨハネ}イオアンを記

憶する日です。またこの両日とも「痛悔」というテーマももっています。

水曜日と金曜日は、^{キリスト}の受難と十字架を記憶します。水曜日は^{ユダ}の裏切りが行われた日であり、金曜日は^{キリスト}が十字架につけられた日だからです。正教会において水曜と金曜は、「斎（ものいみ）」の日です。

木曜日は、「機密の晩餐」が行われた日であり、聖使徒たちを記憶します。

土曜日

土曜日と日曜日は、神聖な日、喜びの日、祭の日という性格もっています。正教会では土曜日のことを「スポタ」と言います。これは「安息日」を意味するヘブライ語「シャバット」に由来しています。神は十戒の中で「安息日を聖とせよ」と命じられました。つまり土曜日は今でも「聖なる日」です。

しかしユダヤ教のように「何も労働しない」ということではなく、神の善なる天地創造、罪によって汚されたこの世、救世主への待望などを記憶するという精神的な意義付けがなされます。正教会では土曜日には「大斎」の時期であっても聖体礼儀を行います。

さらに土曜日は、「救い」を完成した^{キリスト}が墓の中に安息した日であり、死者のために黄泉降りをした日ですので、死者の記憶を行う日というテーマももっています。

日曜日

日曜日は、正教会では「主日」と言います。つまり「主の日」「主^{キリスト}の復活した日」という意味です。

復活した^{キリスト}は、死んで三日目すなわち日曜日に甦りました。正教会では^{キリスト}の復活を年に一度盛大に祝いますが、毎週日曜日、主日も、小さな復活祭なのです。

「主日」は、第八日目であり、天国を先取りし、復活にあずかる喜び溢れる日です。

曜日	別称	記憶事項	備考	
日曜	主日	主の復活・天国	主の復活の日	祭
月曜		天使 または痛悔		
火曜		前駆イオアン 痛悔		
水曜		主の受難、十字架	イウダの裏切り	斎
木曜		聖使徒	機密の晩餐	
金曜	準備日	主の受難、十字架	十字架刑の日	斎
土曜	スボタ	聖人、死者	主が墓にいた日	祭

④ 祭と齋

時の成聖

正教会には、独自の「暦」があります。正教徒にとって、「暦」は単なる通過儀礼ではありません。私たちは、「暦」によって「時の成聖」というものを行います。「時の成聖」とは、私たちが生きているこの「時間」を「聖なるもの」にしていくということです。「時」というものも、罪によって墮落しています。だから「時」もあがなわれなければなりません。神から分離し、無意味に空虚に向かって過ぎゆく「時」を、神と結びつけ、意味あるものとして充実に向かって進むものにしていくということです。正教会の暦はそのためにあります。もし、私たちが教会の暦にそって信仰をもって生きるなら、私たちの時間は、^{キリスト}と堅く結び合わされます。

復活祭を中心としたサイクル

正教会には「復活祭」を中心とした一年の暦があります。主日ごとに基点をもつサイクルとも言えます。「復活祭」の前には「大齋」と呼ばれる準備の期間があり、またその「大齋」の前に「大齋準備週」という期間もあります。これらの期間の主日には特別なタイトルがつけられ、聖書や奉神礼の言葉をとおして、信仰の学びを行うようになっています。復活祭後から聖神降臨祭という祭の期間を「五旬節」といい、同じように各主日に特別なテーマがつけられています。聖神降臨祭の次の主日から「第1主日」「第2主日」と数えて行きます（正確には「五旬祭後第〇〇主日」と言う）。復活祭の日付は毎年かわりますので、主日の数もその年によって多かったり少なかったりします。

復活祭の日付

復活祭は、「春分の日の中の満月の後の最初の主日」と決められて

います。正教会と西方のキリスト教と復活祭の日付が違うことがあります。これは春分の日を旧暦新暦どちらで見るかに原因があります。

旧暦と新暦

旧暦というのは、ユリウス暦とも言い、紀元前46年にローマの政治家ユリウスによって制定された太陽暦です。「一年を365日とし、四年に一回うるう年を設ける」という暦ですから、現在の暦の数え方とあまり変わらないように思えますが、実際の太陽の動き（正確には地球の動き）とは微妙にずれてしまいます。計算すると128年に一日ユリウス暦が多く日を数えることになります。

16世紀にそのずれを解消するためにローマ法王グリゴリオスによって制定されたのが新暦で、グリゴリオ暦とも呼ばれます。今では、新暦と旧暦との差は13日もあります。私たちの日常のカレンダーは新暦で表示されており、その上に旧暦を重ねて見ますのでその13日のずれが問題になります。例えば、旧暦の12月25日は、新暦のカレンダー上では1月7日となってしまいます。

世界の正教会には、新暦にのっとる教会と旧暦にのっとる教会とがありますが、復活祭の日付だけは旧暦に従って計算されたものに統一されています。日本正教会は、基本的に旧暦を用いる教会です（クリスマスのみ、宣教的な目的のため、1月7日ではなく12月25日の新暦にずらしてお祝いする習慣になっています）。

諸祭日

復活祭は、「祭の中の祭、祝いの中の祝い」と呼ばれるほど卓越した祭ですが、正教会にはその他にも祭がたくさんあります。毎日、その日に記憶される聖人がいますので、その聖人を祝うことによっていつでも祭とすることができます。

「十二大祭」

また、聖人だけではなく、聖書の中の出来事や、教会の歴史的な出来事などを記憶する祭もあります。その中でも「十二大祭」と呼ばれる大きな祭があり、正教会では大切な祭として聖体礼儀を行い、祝い、その祭をとおして自分の生活の中に神の恵みを注ぎ入れます。

「十二大祭」とは次のような祭です。

生神女誕生祭 <旧暦9月21日／新暦9月8日>

生神女マリヤの誕生を「救いの始め」として祝う。

十字架挙栄祭 <旧暦9月27日／新暦9月14日>

キリストがかかった木の十字架の発見を記念する。

生神女進堂祭 <旧暦12月4日／新暦11月21日>

後に神の宮となるマリヤが3歳の時に神殿に献じられた祝い。

主の降誕祭 <旧暦1月7日／新暦12月25日>

イエス・キリストの誕生、神の藉身を祝う。

主の洗礼祭（神現祭） <旧暦1月19日／新暦1月6日>

キリストの洗礼と至聖三者の神の顕れを祝う。

主の迎接祭 <旧暦2月15日／新暦2月2日>

生後40日目のイエスが神殿に連れていかれたことの記念。

生神女福音祭 <旧暦4月7日／新暦3月25日>

一般に「受胎告知」と言われるもの。マリヤの従順さを尊む。

聖枝祭 <復活祭の日付と共に毎年移動する>

キリストがロバに乗ってエルサレムに来たことを祝う。

主の昇天祭 <復活祭の日付と共に毎年移動する>

キリストが復活後40日目に昇天されたことを祝う。

五旬祭（聖神降臨祭） <復活祭の日付と共に毎年移動する>

五旬祭の日に聖神が使徒たちに降り、教会が誕生したお祝い。

主の変容祭（顕栄祭） <旧暦8月19日／新暦8月6日>

キリストが山の上で光栄の姿を顕したことを祝う。

生神女^{しゅうしん}就寝祭 <旧暦8月28日／新暦8月15日>

マリヤが永眠し、復活の先取りをしたことを祝う。

これらの他にも、中祭や小祭とも呼ばれる祭がたくさんありますので、教会のカレンダーなどをご参照ください（生神女庇護祭、主の割礼祭、奇跡者ニコライ祭、ペトル・パウエル祭など）。

なお、日付が毎年同じ祭（固定祭）に関しては、9月が年の始まりとなっています。

四つの齋の期間

正教会には、祭だけでなく、一年間に「四つの齋の期間」があります。「齋」とは食事の節制や、より熱心な祈祷が勧められる時で、祭の準備です。

(1) 降誕祭前の齋 <別名「フィリップの齋」>

1月28日から降誕祭前の期間。

(2) 大齋^{おおものいみ} <別名「四旬齋」>

復活祭を迎える前の齋。特別な祈祷やより厳しい齋が勧められる。正教会において非常に大切な期間。受難週も齋する。

(3) 使徒の齋 <別名「労働の齋」>

第一主日の翌日から使徒^{ペテロ・パウエル}祭の前日まで。

(4) 生神女就寝祭前の齋

8月14日から生神女就寝祭の前日までの二週間。

大齋

復活祭を迎える前の齋である「大齋」は、正教徒は特に力を入れて取り組みます。大齋が始まる前に、4週間に渡る「準備週」があり、40日の大齋に続いて「受難週」があります。この期間の日曜日には、特別なタイトルがつけられ、平日には、大齋特有の長い祈祷が行われます。

税吏とファリセイの主日	}	大齋準備週
蕩子（放蕩息子）の主日		
断肉（審判）の主日		
乾酪の主日		
大齋第一主日（正教勝利の主日）	}	大齋
大齋第二主日（グリゴリイ・パラマの主日）		
大齋第三主日（十字架叩拝の主日）		
大齋第四主日（階梯者イオアンの主日）		
大齋第五主日（エジプトのマリヤの主日）		
大齋第六主日（聖枝祭）		
聖大月曜日	}	受難週
聖大火曜日		
聖大水曜日		
聖大木曜日		
聖大金曜日		
聖大土曜日		
復活大祭		

その他の齋の日

その他、齋をする日としては、次のような日があります

前駆^{ヨハネ}イオアン^{ハネ}斬首祭／十字架挙栄祭／降誕祭の前日／神現祭の前日
 ／毎週水曜と金曜（ただし齋が解かれる週は別）

齋をしない週

以下の週は、水曜と金曜であっても齋をしない週として定められています。

税吏とファリセイの主日につづく週／光明週間／降誕祭の期間など

⑤ 私祈祷

小祈祷書

正教徒は、教会に来た時だけお祈りすればよいではありません。普段から、家でもどこでも祈りを神に捧げることが大切です。しかし、正教徒がプライベートに祈る時にも、「小祈祷書」と呼ばれる本にそって行うよう勧められています。「小祈祷書」の中の言葉も教会で公に祈る時に使用する奉神礼書の中から引用され編集されています。つまり、正教会では、「個人」と「教会」は祈りにおいて分離されません。個人的に一人で家で祈る時も、正教徒は、孤独ではなく「教会」と共に祈っています。「教会」でみんなで口をそろえて祈る時も、正教徒は個としての自分を失いません。

使用される言葉

日本正教会が現在用いている奉神礼の言葉は、「小祈祷書」でも他の奉神礼書でも大変古い漢文調の日本語が使用されています。言葉のリズムや原語に近い翻訳を大切にしているからです。確かに個々の単語には難解な語句もありますが、「小祈祷書」を何度も読むことによって、言葉に慣れ、意味も分かってきます。

正しい祈り

正教徒は、こうした定型の祈祷文（正教会では「祝文」と言う）を読み、そこに自分の心を合わせることによって祈りを神に捧げます。自分の言葉を全く否定するものではありませんが、自分の言葉には、自己満足や間違った感情や感覚があり、祈りが無意味になったり空回りしたりする危険をはらんでいます。

私たちは洗礼を受けたとたん正しい祈りをささげることができるようになるわけではありません。祈りは、成長していくものです。日々の祈り、教会での祈りを繰り返していくことによって、祈りは

身についてきます。

祈りとは

祈りというのは単に神様に何かお願いごとをする、ということではありません。神さまに感謝すること、神様を讃美することが最も大切な祈りの心です。そして同様に大切なのは自分の罪を痛悔すること、すなわち悔い改めの心をもって罪の赦しを願うことです。神に何かお願いごとをする懇願の祈りも、その内容は自ら整理されるでしょう。私たちは何を神に願えばよいのかを、祈禱書の言葉が教えてくれます。もちろん舌先だけ動かして心が空になっては何にもなりません。

正教会では、言葉だけでなく、十字をかくとか、伏拝するとか、ロウソクを持つとか、イコンを見つめるなどの行為を伴う祈りをしますが、それらをとおして心からの祈りをもつことが肝心です。

「天国への梯子」という本を書いた階梯者^{かいていしや}イオアンという聖師父は、「祈りとは、本質的にいって神との交わりであり神との一致である」と教えています。祈りは信仰生活の基礎であり、私たちに徳を行う力、罪を繰り返さない力を与えます。金口^{きんこう}イオアンという聖師父は、「水なしで木が生きられないように、人のたましいは祈りにおける神との交わりがなければ生きられない」と教えています。

いつでもどこでも

祈りによって神と一致する、というのは、いつでもどこでも神と共にいるということです。旧約聖書の申命記には、「あなたは心をつくし、精神をつくし、力をつくして、あなたの神、主を愛さなければならぬ。私が命じるこれらの言葉をあなたの心に留め、努めてこれをあなたの子供たちに教え、あなたが家に坐している時も、道を歩く時も、寝る時も、起きる時も、これについて語らなければならぬ。」とあります (6:4~9)。

どんな時も、いつでもどこでも、絶え間なく「神を愛する」ことを忘れないでいなさいという、この旧約聖書の教えは、聖使徒パウエルが言った「絶えず祈りなさい」(フェサロニカ前書 5:17)という新約の教えに引き継がれています。

絶え間ない祈り

正教会には、この「絶え間ない祈り」を文字通り実践する伝統があります。それは「イエススの祈り」と呼ばれる祈りである「主イエス・キリスト、神の子よ、我、罪人を憐れみ給え」という短い言葉を、繰り返し繰り返し、何百回も何千回も何万回も唱えることによって、身につけられます。その時「チョトキ」と呼ばれる数珠のようなものを使うこともあります。

しかし、これをきちんと実践するためには、ちゃんとした指導者を必要としますので、主に修道院で修道士たちによって行われている方法です。この絶え間ない祈りは、もちろん心と体を静かに保つ必要があります。それで、このことを「静寂」という意味の「ヘジカズム」という言葉で表現します。

フィロカリア

正教会には、この「ヘジカズム」の伝統にのっとり、どのような祈りをどのように神様にささげるべきか、祈りとは何か、祈る心とは何かを詳しく説明した特別な本があります。「フィロカリア」と呼ばれるその本は、祈りについて教えている聖師父たちの言葉を集成したものです。「フィロカリア」とは「善(または美)を愛する」という意味のギリシャ語です。残念ながらその一部しか日本語には訳されていません。

「主、憐れめよ」

「ヘジカズム」というのは何か特別なことのように思えますが、

しかし基本は同じところにあります。いつも神様のことを忘れないように、心に留めるといふ基本です。私たちは「イエスの祈り」よりもっと短い言葉、「主、憐れめよ」を知っています。この祈りを、「家にいる時も、道を歩く時も、寝る時も、起きる時も」電車の中でもお風呂の中でも会社や学校の中でも、心の底で祈ることができます。教会にきて「主、憐れめよ」「主、憐れめよ」と何度も繰り返して祈るのは、教会から離れた時も、この祈りを祈るためにあり、教会を離れても「主、憐れめよ」と祈るのは、教会に来た時に、この祈りがより豊かな意味をもつようになるためです。

天主經

正教会が最も大切に祈りの中に「天主經」があります。「天にいます我等の父よ」で始まるので、単に「天にいます」とタイトルで呼ぶことがあります。これは、キリスト自ら「こう祈りなさい」と教えた祈りです。

私たちはキリストと共に神を「父」と呼ぶことができます。しかし、放蕩息子である私たちは、それを当然のことではなく、痛悔をもって、「あえて」呼ばせてもらっていると思わなければなりません。

そして、神の名、神の国、神の旨を第一に求めます。罪深い私たちはまったくその逆で、自己中心的に生きていますので、「天主經」はなかなか自然に感情を込めて祈れる祈りではありません。しかし、だからこそ何度も唱えて、神の中心の心と生活を身につけていくことが大切です。

また、「日用の糧を今日与え給え」と祈ることによって、生きていくために必要な日々の食事が、そして何よりも永遠の生命をもたらす御聖体という糧が、神様からの賜物であることを確認します。

「償」とは、自分たちの「罪」のことであり、それを赦し合う心が必要です。そして常に罪や悪から遠ざかりたいと神に祈ります。

天主經

てん いま われら ちち
天に在す我等の父よ

ねが なんじ な せい
願わくは爾の名は聖とせられ

なんじ くに きた
爾の国は来り

なんじ むね てん おこな ごと ち おこな
爾の旨は天に行わるるが如く地にも行われん

わ にちよう かに こんち われら あた たま
我が日用の糧を 今日 我等に与え給え

われら おいめ もの われら ゆる ごと
我等に債ある者を、我等、免すが如く

われら おいめ ゆる たま
我等の債を免し給え

われら いざな みちび
我等を誘いに導かず

われら きょうあく すく たま
なお我等を凶悪より救い給え

けだし くに けんとう こうえい なんじ よよ き
蓋、国と権能と光榮は、爾に世々に帰す、アミン

聖師父たちの言葉————祈り

「もしあなたが祈る気持ちにならないのなら、あなた自身を強いて祈らせるべきである。聖師父たちは、強いた祈りは強いられない祈りより高い、と言っている。あなたは欲していなくとも、あなた自身に強いなさい。天国は強いて取るものである（マトフェイ 11 : 12）。」（オプティナの聖アムブロシイ）

「祈っている間、あなたの知性を耳の聞こえない者、口のきけない者にするように努力しなさい。その時、あなたは祈ることができるでしょう。」（エヴァグリオス「フィロカリア」）

「マカリオスは“どうやって祈るのですか？”と質問された。彼は、答えた、“長く語ることは全く必要ない。ただ手を伸ばして『主よ、爾の旨の如く、爾の知るが如く、我を憐み給え』というだけで十分である。…神は私たちに何が必要かをよくご存じであり、その憐れみを私たちに表してくださるだろう。”」（砂漠の師父たちの言葉）

「パンが身体のための食べ物であるように、徳はたましいの食べ物であり、精神的な祈りは心の食べ物である。」（シナイ山の聖ニルス）

「信仰は祈りに翼を与える。我々はそれなしには天に飛んでいくことはできない。」（階梯者イオアン）

「祈りを長くしてはいけない。少しだけ、しかし頻繁に祈る方がよい。余計な言葉は無駄なおしゃべりである。」（聖テオフィラクト）

「祈りと何か？ 祈りとは、神に向かって心と気持ちを上げることである。」（主教フェオフアン）

第6章 正教会のかたち

① イコン

「イコン」とは

「イコン」というのは、もともとギリシャ語で、「形」とか「像」という意味をもっています。日本正教会では「聖像」と訳されることもあります。「イコン」は、狭い意味では一枚の板に描かれた絵のことをいいますが、広い意味では、正教会が使用する絵画すべてを指します。

カタコンベ

迫害を受けていた初代教会の人々は、「カタコンベ」と呼ばれる地下墓地で集会を開いていましたが、彼等はその壁にさまざまな壁画を描きました。これらは、歴史的に確認できる一番古いキリスト教美術です。

しかし、正教会には、イコンの由来について二つの伝承が残されています。

ルカが描いたイコン

一つは、聖使徒ルカが、生神女マリヤとキリストハリストスを描いたのがイコンの始まりである、というものです。この伝承は、正教会がイコンを用いるのは福音に基づいているのである、ということをお教えています。福音書は、神が生神女マリヤをとおして人となったこと、つまりキリスト藉身の事実を知らせています。イコンの根拠はキリストハリストスの藉身にあります。

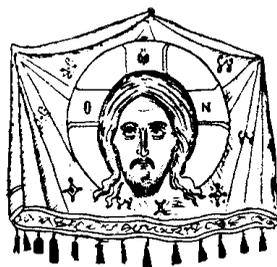


アブガル王伝説

もう一つは、エデッサという町にいたアブガル王が重病になり、イエスのもとへ使者を送って癒しを求めたところ、イエスが自分の顔に一枚の布を押し当てて、それを使者に渡したという伝説です。その布にはイエスの顔が写っていました。これが最初のイコンとされています。

これは、誰かが絵の具と筆を使って描いたものではないので、「手によって作られてない」（ギリシャ語で「アヘイロポイエトス」）イコンと呼ばれます。日本正教会では「自印聖像」と訳されます。

布に直接キリストの顔が写ったということは、神であるキリストが肉体をもった現実の人間であったこと、そして誰かが勝手に想像して描いたのでもなく、幻影をスケッチしたのでもないことを教えます。イコンの中のキリストの顔は、この自印聖像に源流をもっています。それは、イコンというものが画家の個人的な裁量やイメージに任せられないことを意味しています。



聖像破壊論争

正教会の歴史の中で、イコンに関する是非が問われた時期がありました。イコンは偶像であり十戒の「刻んだ像を造ってはならない」に反するものであって正統と認められないと主張する人々が続出したのです。「イコノクラスム」とか「聖像破壊論争」とか呼ばれるその期間は、八世紀から九世紀にかけて、百年以上も続きました。しかし、結局、イコンは正統なものと認められました。正教会では、そのことを年一回、大齋の第一主日に「正教勝利の主日」と称してお祝いします。

アイコンが正統である理由

正教会がアイコンを使用するのには主に三つの理由があります。

(1) アイコンは正教会の信仰を伝える

一つは教育的な目的で使用します。アイコンには^{キリスト}だけでなく、生神女マリヤや聖人たち、また聖書や教会の歴史の中の出来事が描かれます。

例えば、降誕祭のアイコンであれば、そこに描かれている場面や人物や構図や色や形をとおして、私たちは降誕祭の意味をくみ取ることができます。またマリヤや^{キリスト}のアイコンにも、それぞれの色や形に深い意味が込められていて、私達は、それらをとおして正しい信仰とは何かを学び取ることができます。

アイコンに込められた意味、表現される内容は、正教会の信仰を語るものでなければなりません。そこに個人的な感情や感動や思想や解釈があってはなりません。アイコンは誰でも作ることができるものではなく、しっかりとした正教会の信仰をもっている人のみにゆるされたものです。

正教会の信仰の内容を正しく伝えるため、アイコンには色や線や形の伝統があります。そういう意味で、(正教会にも西洋画の影響を受けた形のアイコンがありますが) 西方教会が用いる聖画や単なる宗教画とは区別されます。

(2) アイコンは崇拜でなく崇敬される

正教会がアイコンを使用する第二の理由は、アイコンそのものを神として拝むのではなく、アイコンに描かれた^{キリスト}を崇拜するからです(それがマリヤや聖人たちのアイコンであれば彼等への敬愛)。難しくいえばアイコンの中にある原像を見るのです。

やさしく言えば、愛する人の写真に似ています。人は写真を愛するのではなく、写真に写っている彼女もしくは彼を愛します。それ

と同じように、アイコンの中に映し出されているハリストス、敬愛するマリヤや聖人たちの姿は、信仰の心を育み、支えてくれます。写真が一枚の紙にすぎないように、アイコンもある意味では一枚の板や紙きれにすぎません。しかし、私たちは愛する人の写真を大切に扱うように、アイコンを大切に扱います。

アイコンを見つめ、アイコンの前で頭をさげ、アイコンに接吻し、アイコンを前にして祈るのは、そこに愛する対象が描かれているからです。

しかし、アイコンへの敬いとアイコンの中の原像への信仰心とは厳密に区別しておく必要はあります。アイコンそのものを大切にし、アイコンに対して接吻したりする行為に関しては「崇敬」という言葉を使い、アイコンの中にいるハリストスご自身に対しては「崇拜」という言葉が用いられます。「崇拜」と「崇敬」を混同しない計らいとして、正教会では立体的な像を用いません。アイコンはすべて平面です。

しばしば「アイコンは正教会において信仰の対象となっている」などと言われますが、それは間違いです。アイコンは信仰の対象ではありません。アイコンは信仰の尊き媒介なのです。その尊く聖なるアイコンをとおして、時々奇跡が行われることもあります。それはアイコンが単なる「道具」ではなく、神の恵みを与える機密的な物質だからです。

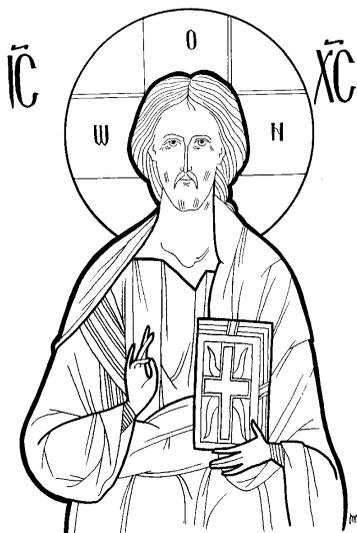
(3)アイコンは神の藉身をあかしする

正教会がアイコンを正統なものとして使用する三つ目の理由は、ハリストスご自身に関わる教義的な理由です。ハリストスは、神様が人間になったお方です。神様が私達と同じに人間になった、そして死までも味わわれた、しかし、そこから新しい生命へと復活した、これが正教会のキリスト教の信仰の真髄です。

神が私達と同じ人間になったということは、つまりハリストスには肉体があったということです。そして、それは完全に神の性質と

一つに合わせられたのです。仮にとか一時的にではなく、完全に神様が私たちと同じこの目に見える体を取られました。だから、^{キリスト}ハリストスをアイコンとして描くことができ、描かれた^{キリスト}ハリストスは同時に神でもあるので、^{キリスト}ハリストスを拝むことは神を拝むことになります。

神さまは目に見えないお方だから、アイコンとして描くことはできない、という人たちは、「神が人となった事実」を否定する人たちであり、それではもはやキリスト教ではありません。^{キリスト}ハリストスを「神が人となったお方」であることを信じるなら、アイコンは当然、公認されうるもの、さらにいうなら、アイコンこそ、キリスト教（正教会）の信仰の力強い証です。



② 聖堂

神の国をかたどる聖堂

正教会が建てる聖堂は、単なる集会所とか祈祷所ではありません。聖堂とは「神が私たちと共におられる」という信仰を具体化したものです。聖使徒パウエルは「私たちは生ける神の神殿である」（コリント後書6：16）と言いました。キリストと聖神をとおして、神が人と共にあり、人の内にいまし、生きておられることを、正教の教会建築は表現しています。言い換えるなら、神の国の象りとして聖堂は建てられています。そのために聖堂の形や内装にはそれぞれ深い意味が込められています。

聖堂の形

聖堂を上から見た形としては、主に「長方形」と「十字架形」の二つがあります。「長方形」は、ノアの箱船の象りです。教会がこの世という海を航海し神の国という港に向かう船であることを表すわけです。「十字架形」は、キリストの十字架による救いを象ります。聖堂の中に入ることは、キリストの救いの中に身をゆだねることになるわけです。

東向き

聖堂は普通「東向き」に建てられます（入口が西ということ）。太陽という光の昇る方向である東に向かうということは、キリストという救いの光に向かい、神の国を待ち望むという姿勢を表すからです。もちろん方角自体に何か神秘的な力があるわけではないので、やむをえず「東向き」ではなく建てられる場合もあります。

屋根

「ビザンチン建築」と呼ばれる聖堂では、大きなドームの屋根を

もつのが特徴です。このドームは、教会に冠をかぶせていることを意味すると共に、「天」を象^{かたど}っています。ドームのある聖堂に入る時、すでに「天国」がそばに来ていることを感じることができます。ロシア式の聖堂では、「クーポル」と呼ばれる屋根が付けられますが、これは祈りが神のもとへ昇ることを表すロウソクの炎を象^{かたど}るものです。「クーポル」は複数取り付けられることがあります。一個のクーポルは、教会の唯一の主イエス・キリストを象^{かたど}り、五個の時は、キリストと四福音を象^{かたど}り、七個は正教会の七つの機密、十三個はキリストと十二使徒を象^{かたど}ります。

鐘

聖堂の入口の真上、または全く別の場所に「鐘楼」が建てられ鐘が釣り下げられます。鐘は、祈祷の開始と終わりの時、または祈祷中の重要部分を知らせるために鳴らされます。

イコン

聖堂の内部や外部には、イコンが掲げられます。「フレスコ画」や「モザイク画」のように壁や天井に直接イコンが描かれる教会もたくさんあります。キリストやマリヤや聖人たちのイコンは、聖堂を神の国の臨在の場にします。

聖堂の名

聖堂は、普通、何かしらの祭や聖人を記念して建てられます。その祭や聖人の名前が、そのまま聖堂の名前になります。例えば「主の昇天聖堂」とか「聖ニコライ聖堂」など。その聖堂の名の祭は「堂祭」と言って、盛大に祝われます。

内部構造

聖堂の内部は次の三つに分けられます（149 ページの図を参照）。

聖堂の構造は旧約時代のモイセイの幕屋やソロモンの神殿にひな型をもっています。

(1) 啓蒙所

聖堂の入口付近の場所。啓蒙者（まだ洗礼を受ける前の段階の人）が立つべき位置だった。現在は実際的には「聖所」との区別はあまりない。意味としては、「この世」を象^{かたど}るところ。

(2) 聖所

聖堂の真ん中の場所。信者が立つべき位置。イコンが掲げられ、燭台が置かれる。信者が祈り、機密を受けるための空間。意味としては「この世での天国の先取り」を象^{かたど}る。

(3) 至聖所

聖堂の奥にある最も重要な場所。神品や神品を補佐する人たちのみが入ることを許される。その名ととおり「至って聖なる所」で、意味としては「神の国」「来世」を象^{かたど}る。

イコノスタス

「至聖所」と「聖所」を隔てる壁のことを「イコノスタス」といいます。日本正教会では「聖障」と訳されることもあります。

「イコノスタス」とは、「イコンの壁」という意味で、文字通り様々なイコンが掲げられています。イコノスタスには、普通三つのドアがあり、特に重要なのが真ん中にある「王門」または「天門」と呼ばれる門です。神品のみがここを通ることができます。奉神礼の中で「王門」を開いたり閉じたりすることによって、神の国との交わりが顕されます。

宝座

至聖所の真ん中には「宝座」と呼ばれる台があります。聖堂は聖体機密を行うために建てられると言っても過言ではありません。「宝座」はその聖体機密が実際に執行される場所ですから、聖堂の中心

的な位置をもっています。「宝座」は、神の国の食卓であり、天の御座（黙示録4：2他）を象^{かたど}るものであり、神の臨在の場です。宝座の下には、聖人の不朽体の一部が特別な容器に入れられて安置されます。これは聖人たちが生命をかけて伝えた信仰の上に教会が成り立っていることを示しています。この習慣は、迫害時代、致命した者たちの墓の上で聖体機密を行っていた初代教会の経験から来ています。

奉献台

至聖所の左手奥には、「奉献台」と呼ばれる台があります。司祭は聖体礼儀を行う前、「奉献礼儀」をこの上で行います。「奉献台」の上には聖体機密を行うための「聖器物」が安置されています。

天をかたどるドーム

鐘楼

イコノスタス

東 ←

天国

この世

西

アナロイ
アムヴォン

南門

宝座

至聖所

聖所

啓蒙所

奉献台

北門

天門（王門）



玉葱の形に似ているので「オニオン・ドーム」とも呼ばれるロシア正教会特有の屋根の形。しかし、これはロウソクの「炎」をかたどったもの。教会が「祈りの家」であることを表している。

③ 聖器物や祭服

正教会には、聖体礼儀を行うために必要不可欠な「聖器物」、その他の様々な奉神礼のための器物、そして祭服があります。それらの名称と用途や意味について説明します。

聖体機密のための聖器物

聖匙 せいひ 単に「さじ」とも呼ばれる。司祭が信徒に御聖体を授ける時に使うスプーン。預言者イサイヤの唇に触れてその罪を取り除いたセラフィムの火ばさみを象る。

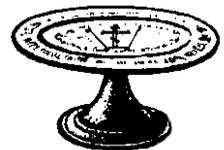


聖戈 せいこ 単に「ほこ」とも呼ばれる。やりの形をした両刃のナイフ。聖パンを切り分けたりする時に使用する。十字架上のキリストの脇を刺した兵卒のやりを象る。

聖爵 せいしゃく 「ポティール」とも呼ばれる。尊血となるぶどう酒が注がれる杯。信者の領聖の時には、尊体であるパンが中に入れられる。機密の晩餐の時にキリストが使った杯を象る。



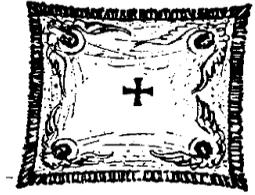
聖盂 せいろう 「ディスコス」とも呼ばれる。円盤状の皿で、尊体となるパン（特別に「羔」とも呼ばれる）と、生神女マリヤや諸聖人や生者・死者を記憶して取り出されたパンの欠片かけらが置かれる。このディスコスの上のパンは、教会全体を象徴している。



小袱 しょうふく ポティールとディスコスを覆うための二枚の布。



太気 ^{たいき} 同じくポティールとディスコスを覆うための一枚の布。^{キリスト}の葬りの時に使われた亜麻布を^{かたど}象る。



星架 ^{せいかわ} ディスコスの上のパンを「小袱」や「太気」との接触から守る役割をもつ道具。^{キリスト}降誕の時に博士たちを導いた星を^{かたど}象る。



その他、ポティールやディスコスをぬぐるための「海綿（海絨）」^{かいじゅう}や赤い布なども使用される。

アンティミンス 直訳すると「台の代わり」という意味で「代案」という漢字が当てられる。聖体礼儀を行う時に広げられる特別な布で、聖人の不朽体の一部が縫い込まれている。主教のサインが入っていて、聖体機密執行の許可書のような役割も持つ。



その他の聖器物

聖福音経 四つの福音書をまとめて製本し、金属のカバーをかけたもの。宝座の上に置かれ、教会の中心が神の言葉^{キリスト}であることを^{かたど}象る。



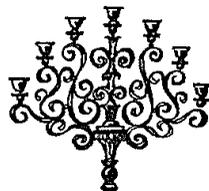
十字架 宝座の上に置かれており、祝福をする時などに司祭が高く掲げて持つ。また信徒が

司祭の持つこの十字架に接吻する。

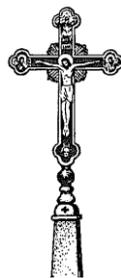
聖龕 せいがん 「予備聖体」が納められる容器。普通、聖堂のミニチュアのような形をしており、宝座の上に安置される。「予備聖体」とは、一年間保管される御聖体のことで、病者などのため緊急に領聖を必要とした時に取り出される。



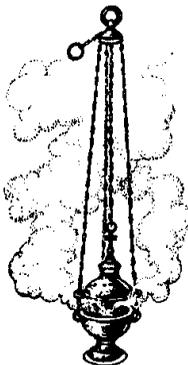
燭台 正教会には様々形や大きさの燭台がある。炎の光は、神の救いの光を象^{かたど}る。普通、宝座の上には二本のロウソクが立てられ、宝座の後ろには、旧約聖書の伝統に則して七本の枝をもつ燭台が置かれる。その他、イコンの前にも燭台が置かれ、信徒が献灯する。



大十字架 宝座の後側には、大きな十字架が置かれる。大十字架には旗棒が取り付けられ、「十字行」と呼ばれる行進の時に持ち出される。



香炉 正教会では「乳香」という香が用いられる。「乳香」を焚くために鎖のついた香炉が用いられ、イコンや信徒に向かって香炉が振られる（「炉儀」と言う）。香は、祈りが神に昇ること、よき香りを放つ生き方をすべきこと、すべての人に神の像（イコン）を見ることを教える。



凱旋旗 イコノスタスの前に置かれる二本一組の旗で、「十字行」の時に持ち出される。
キリストの勝利を祝うための旗。

ねむりのせいぞろ

就寝聖像 十字架から取り下ろされたハリストスを描いたアイコンで、聖大金曜日に、聖堂の中央に安置され、花飾りがほどこされる。聖大スポタの早課では担がれて十字行が行われる。

アナロイ イコンや祈祷書を置くための台。移動が可能になっている。「アナロイ」とは、もともとギリシャ語の「アナ(上で)」「ロギオン(読む)」から来ている。

司祭・輔祭の祭服

ステハリ 洗礼着を思い起こさせる衣。天使の衣を象^{かたど}る。輔祭や堂役が着用する。司祭の着るステハリは、薄い生地で作られる。



オラリ 天使の羽を象^{かたど}る帯状の布。輔祭はこれを左肩にかけ、副輔祭は、たすきがけにする。



ポルチ 「籠手」^{こて}とも呼ばれる。両手首に取り付けられる。これを着用する時、神の創造と救いの力が記憶される。



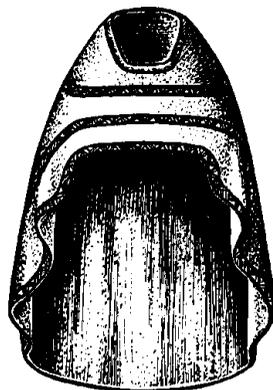
エピタラヒリ 司祭が首から掛ける長い布。司祭に聖神の恵みがあることを表象するもので、これ無しでは公の奉神礼の執行はできない。



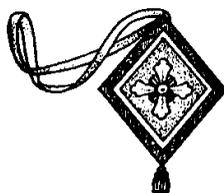
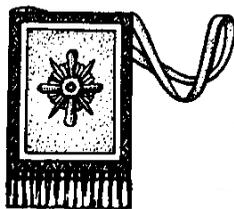
帯 奉神礼を行うに当たって身を引き締め
るために腰に巻かれるもの。



フェロン マントのような形の服で、一番
上にまとう。神の義を身につけるとい
う意味をもつ。



ナベトレニク 腰にぶら下げる四
角い布。特別に与えられた司祭のみが
着用。聖神の剣を象^{かたど}る。「パーリツ
ァ」と呼ばれる菱形のものある。



※ その他、主教用の特別な祭服については省略します。

④ 象徴と表信

正教会では様々な象徴（シンボル）が用いられます。

十字架

一番頻繁に用いられるのは言うまでもなく十字架です。十字架の形にもいろいろありますが、その中でも特徴的なのが「ロシアン・クロス」と呼ばれる十字架です（図 a）。一番上の短い横棒は、「罪状札」を表しています（イオアン^ネ伝 19：19 以下、他を参照）。下の方にある斜めの棒は体を支えるための「足台」を表しています。これを天秤ばかりのようにわざと傾けさせています。それは、^キハリストスと共に十字架に掛かった二人の盗賊のうちの一人が悔い改めて天国を約束されたことを想起させるためです（ルカ伝 23：39 以下を参照）。

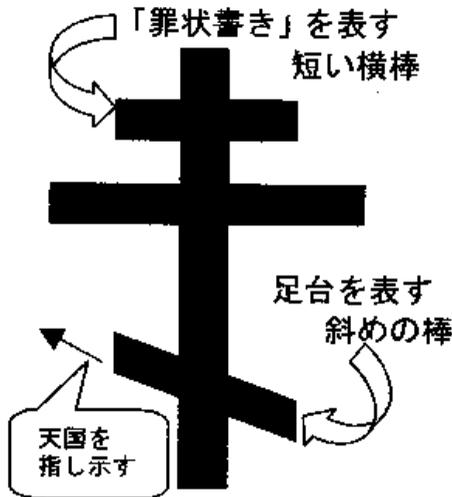


図 a

モノグランマ

十字架と共によく用いられるのが「モノグランマ」と呼ばれる文字の組み合わせです。図bの形は、^キハリストス^トをギリシャ語で表記した時（X P I C T O C）の最初の二文字と十字架を合わせたものです。また図cは、^イエス^ス・^キハリストス^トの略字、N I K Aは勝利という意味のギリシャ語です。



図 b



図 c

ぶどう、その他

聖器物や祭服などにぶどうの絵柄が描かれることがあります。これはイオア^ンヘ^ネ伝15章にある^キハリストス^トの言葉に基づいています。その他、聖神を表す鳩、^キハリストス^トを表す魚（^イエス^ス・^キハリストス^ト、神の子、救世主をギリシャ語で表記した時の頭文字をつなげると魚を意味するギリシャ語になる）などがいろいろなところにデザインされます。



「表信」

正教徒は、さまざまな動作と共に祈ります。その形にはそれぞれ正教会の信仰が表明されているので「表信」と呼ばれます。次に主な「表信」について説明します。

十字をかく

図 d のように右手の三本の指を合わせ、三位一体の神を^{かたど}象り、二本の指を曲げて掌につけて、人となった神^{キリスト}の神性と人性を^{かたど}象る。その手を額、胸、右肩、左肩の順に動かして十字をかく（左肩を先にするのはカトリックの仕方）。十字をかくことは、祈りや信仰に欠かせない大切な表信。

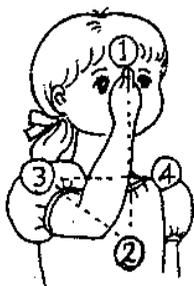


図 d

起立

奉神礼の時の基本姿勢。そのため正教会の聖堂にはイスが少ない。復活を表し、神の子としての自由の精神をも^{かたど}象る。神の臨在を前にした人間の自然な姿勢。

頭を屈める

^{キリスト}への従順さ、感謝、希求を表す。福音經の読みの時や自分に向かって香炉が振られた時などに行う。



弓拝

「小拝」とも呼ばれる。右手を地面につけるようにして腰をかがめる姿勢。キリストスへの屈服、謙遜を表す。



跪く

膝をついて、頭を屈める姿勢。神の偉大さを受け止めること、またはへりくだりの心を表す。



伏拝

「大拝」とか「叩拝」とも呼ばれる。全身を折り曲げてひれ伏す姿勢。へりくだり、痛悔、礼拝、服従の心、「我」を折ることを表す。神を前にした罪深い人間の自然の姿勢。



接吻

キリストスや聖人への敬愛の表現。アイコン、ポティール、十字架、司祭や主教の右手に接吻する。

献灯

ろうそくの炎に祈りの心を込める。上にあがる炎は神に上る祈りを表し、明るく熱のある炎は、神の光、救いの光、キリストスの光、信仰の熱を象^{かたど}る。日本正教会では、蜜蝋を模して黄色いろろうそくが使われることが多い。

祝福をうける

主教や司祭への挨拶。弓拝し（十字はかかない）両手を重ねて（右

の掌が上) 差し出す。祝福した主教や司祭の手がその上に載せられるので、その手の甲に接吻する。神様からの祝福があることに感謝する。図eのように、主教や司祭の祝福の指は、イエス・キリストの名 (I C X C) の形になっている。

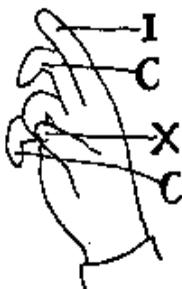


図 e

胸に手を組む

右手を上にして両腕を胸の前でX印に交差させる。天使が羽を畳んだ形かたどを象る。



⑤ 聖職者と修道

神品

正教会の聖職者のことを「**神品**」と呼びます。神品には「主教」「司祭」「輔祭」という三つの役職があります。神品たちは「神品機密」において按手され、神品としての特別な神・聖神の賜物をいただきます。神品は、しかし、大祭司であり教会の頭である**キリストス**の代役や代理人ではありません。神品は、**キリストス**が今この教会に臨在されていることを証しする役割をもつ人たちです。正教会は神品という階級的な秩序を大切にする一方、神の民全体が司祭であり預言者であり王であることも基本として忘れていません。聖神の賜物はすべての神の民の上に注がれています。

主教

主教は正教会が使徒継承の教会であることの生きた証人です。使徒からの繋がりをもつことが正教会の生命ですから、主教なしには教会は存在しません。逆に主教は教会の民と共になければ主教たりえませんので、信徒なしには主教は存在できません。それ故、正教徒は必ず誰かの主教の許にあり、主教は必ず何処かの管轄区をもっています。

主教の役割

主教には、三つの役割があります。一つは教会を**監督**することです。主教は、教会を秩序正しく混乱のないように導く役目があります。教会は、基本的に主教に服従しなければなりません。

二つ目は、教えを**正しく伝える**ことです。神の国の教え、**キリストス**の福音を人々に伝えることは、使徒以来の主教の務めです。ただし、主教も個人的には誤った教えに陥る可能性はあります。主教が聖神の導きの下にありながら一人の人間でもあることを正教

会は否定しません。しかし、その過ちは教会全体として淘汰され、正しく修正されていきます。

三つ目は**機密を執行**することです。主教は、正教会の機密そして奉神礼全体の源泉です。機密を行うことができるのは、^{キリスト}から使徒へ、使徒から主教へと受け継がれた賜物によるのです。主教や司祭が行う機密の有効性は、神品の個人的な徳によるのではなく、聖神によって働く^{キリスト}のお力によります。

主教は、修道士もしくは独身者の中から選ばれます。主教には、指導的主教を意味する「大主教」、複数の主教の管轄区をまとめる「府主教」、完全独立の教会を監督する「総主教」というタイトルがあります。

司祭

司祭は、主教の補佐としての役目をもつ人々です。司祭は主教によって各地方の教会に派遣され、その命じられた管轄区内の教会を監督し、教えを伝え、機密を執行します。信徒との交わりが親密であり、信徒は司祭に対して「神父」という尊称を用います。「牧師」という言い方はプロテスタント教会のもので、正教会では用いません。

正教会ではカトリックとは違い妻帯者が司祭に叙聖されることがあります。ただし司祭となつてからは結婚、離婚、再婚はゆるされません。

司祭の中には、修道院の院長を意味する「掌院」または「典院」の他に、「首司祭」「長司祭」「司祭」の区別があります。

輔祭

輔祭は、奉神礼において主教もしくは司祭の補助をする役割をもつ神品です。新約聖書の中では「ディアコノス」と呼ばれ、教会に

おける雑事も奉仕していました。輔祭は、機密の執行は行えず、単に補助するのみです。時代や地域によっては女性の輔祭もありました。輔祭の妻帯の規則も司祭と同じです。

正教会には、その他「**教衆**」とか「**教役者**」と呼ばれる人々がいます。輔祭の前の段階である「副輔祭」、祈祷文を専門に唱える「誦経者」、聖歌の「指揮者」などです。彼等は主教によって特別な「祝福」をもって任命されます。また、奉神礼において手伝いをする「堂役」、教会の日常の運営に携わる「執事」と呼ばれる信徒や、人々に教えを伝えることに専念する「伝教師」もいます。

修道士

修道士になる人は特別な祝福を受けますが、神品ではなく基本的には一信徒にすぎません。修道士たちは、独身をつらぬき、修道の道をもって神に近づく人たちです。修道士たちは普通、修道院で生活します。修道士たちは祈りと労働と齋の毎日を過ごし、従順と痛悔と祈祷を身につけていきます。修道士または修道女たちと一般の信徒には、程度の差はありますが、本質的な違いはありません。つまり、すべての信徒も、従順と痛悔と祈祷を身につけて生きることが必要です。

四つの段階

正教会の修道の伝統には、男女ともに適用される四つの段階があります。一つは単に修道院において指導者のもとで生活する段階です。「服従の段階」とも呼ばれます。

二つ目は「リヤサフォル」と呼ばれる段階で、その修道院に公式に受け入れられたことを意味します。「リヤサ」という修道の服を着る資格が与えられます。ただし、まだ修道士・修道女ではありません。

三つ目は「小スヒマ」と呼ばれる段階で、正式に修道士・修道女となり、新しい名前（修道名）が与えられます。特別な修道誓願の儀礼を経て、十字架の印のついた布（スヒマ）を身につけます。

四つ目は、「大スヒマ」と呼ばれる段階で、原則として完全な隠遁修道が要求される厳格な修道段階です。あまりにも厳しく高い修道なので、ほんの少数の人しか到達できません。これらの段階を上がるための規準ではなく、すべて修道院長が個人個人を見て判断します。

修道の方法

正教会にはカトリックのような修道会と呼ばれる区別はありませんが、修道生活の方法には主に次の三つがあります。一つは、「共住修道（キノヴィオン）」で、修道士たちは共同ですべてのことをします。二つ目は、奉神礼は共同で行いますが、その他の労働などは個人的にまたは小グループで行うという方法です。これは「ラウラ修道」と呼ばれます。三つ目は、隠遁者として生活する「隠遁修道」です。隠遁者は完全に一人で生活し、特別な時以外は、共同体の奉神礼にすら参拝しません。

ギリシャのアトス山にある修道院は世界的に有名で、全世界の正教会の精神的支柱となっています。

	修道者・独身者	妻帯者	尊称
神品	主教 総主教 府主教 大主教 主教		聖下 座下 座下 座下
	司祭 掌院 長司祭 (修道) 司祭	首司祭 長司祭 司祭	神父 神父 神父
	輔祭 長輔祭 (修道) 輔祭	長輔祭 輔祭	
	教衆 副輔祭 誦經者 指揮者 堂役	副輔祭 誦經者 指揮者 堂役	
		修道士・修道女	

聖師父たちの言葉——イコン

「神・言葉が肉体をとった時から、神は罪以外のすべてにおいて私たちのようになられ、混乱や混合なしに私たちの本性を引き受けられたのである。」「私は神を人の形において見、私のたましいは救われた。私は神の像を、イアコフのように、しかし違った方法で凝視する。イアコフは、未来に來ると約束されたものを精神的な目で見ただけだが、神の記憶は肉体において見えるものとなり、私のたましいの中で燃えている。」(ダマスクの聖イオアン)

「イコンは、勝利と啓示の歌である。聖人たちの勝利の祈念碑である。」(ダマスクの聖イオアン)

「神に向かって心が上昇することによって物質は高められる。心は物質を信頼しないから、物質と共にとどまることはないというのは、偶像礼拝者の誤りである。むしろ物質をおとして、心が原型に向かって上昇するというのが、正教会の信仰である。」(聖フェオドル・ストゥディト)

「言葉が耳に語るように、像(イコン)は視覚に語りかけ、私たちに理解をもたらす。」(ダマスクの聖イオアン)

「像に払われた誉れは原型となった者に対するものである」(聖大ワシリイ)

「形も体もない神は、決して描かれることは出来なかった。しかし、今、神は人と交わるため肉体を取り、見える者となった時、私は見るための神の像を作る。私は物質を拝まない。…物質をとおして私に救いをもたらす物質の創造主を拝む。」(ダマスクの聖イオアン)

第7章 正教徒の心得

① 参拝の心得

参拝の大切さ

正教会の信徒にとって、奉神礼に参拝するという事は、非常に大切なことです。参拝することによって、祈り、学び、機密を受け、神と交わり、信仰を深めることができるからです。

奉神礼に参拝するというのは、ただ単に心を合わせて祈禱するために集まるというだけでなく、神の臨在の前に立つということを意味します。

特に聖体礼儀には、^{キリスト}の尊体尊血である御聖体を領聖するために参拝するわけですから、それなりの心がまえが必要です。そういう意味で、正教会の奉神礼に参拝する時に知っておくべきマナーや準備があります。

服装

聖なる神の前に立つという心があれば、それにふさわしい正装をして来るのが自然です。ジーパンにTシャツとかジャージや作業服などあまりにラフな格好や、極端に肌を露出させる格好は好ましくありません。

かといって、あまりにきらびやかで人の注目をあびるような服装もさけないものです。もちろん神様は外見でなく「心を見ます」(サムエル上16：7参照)。

しかし、その人間の心は、服装にも現れるものです。もちろん、あまりかしこまりすぎると「何を着ようか」と思わずらうことになります(マトフェイ6：25以下参照)。あまり極端にならないようにだけ気をつければよいでしょう。

聖堂に入る時、出る時

聖堂は聖なる機密が行われる場所であり、神との交わりの場ですから、普通の建物に入るような気持ちではなく、畏れとへりくだりの心をもって出入りします。その心をもつために、その日最初に聖堂に入る時、そして最後に聖堂を出る時は、三回「弓拝」しながら三回十字をかき、心の中で「神よ、我、罪人を浄め給え」と三回唱えるようにします。

立つという姿勢

正教会では祈祷は基本的に立って行います。正教会の聖堂にイスが少ないのはそのためです。

「起立」という姿勢は「復活の生命」を象^{かたど}ります。横たわった姿勢が「死」を象^{かたど}ることと比較してみるとわかります。奉神礼に参拝するのは、「復活の生命」にあずかるためである、ということをして「立つ」ことで知るのであります。

また、神の臨在を前にした人間の自然な姿勢であるとも言えます。人は尊いお方の前で座ったままでいられない筈です。イスに座っているとどうしても傍観者になる心理が働きます。

「リトウルギア（奉神礼）」とは、「公^{おおやけ}の仕事」という意味でした。参拝者一人一人が立ってその「仕事」に参加しようとする心が大切です。

しかし、実際、長い祈祷の間、立つということはつらいことも確かです。もちろん修行を行っているわけではありませんので、その人の体の具合や疲労の程度によっては腰掛けることも必要です。ただ心では起立した気持ちを持ち続けましょう。

日曜日は特に復活の日ですので起立の姿勢がふさわしく、また復活祭から聖神降臨祭までの「五旬節」と呼ばれる50日間は跪いたり伏拝したりしない習慣となっています。

十字をかく

参拝したら、頻繁に十字をかいて祈りの心を持ちます。十字をかくという表信は、基本的に個人が自由に行います。しかし、特に重要な祈祷文を耳にした時には、十字をかくように奨励されています。ただし主教や司祭が祝福をしている時、それと向き合って十字をかくのは好ましくありません。

献灯

ろうそくに火をつけ、その炎に祈りの心をたくして、燭台に立ちます。本数や場所などに決まりはありません。また、奉神礼の種類によっては、参拝者がそれぞれ手にろうそく持つこともあります。（その場合、勝手に自分で火をつけるのではなく、神品から火をもらい、それを分かち合うようにしましょう。）

接吻

聖体機密のための聖器物など、また聖福音経や司祭が祝福するために使用する十字架には、神品以外の人は持ったり触れたりしないように注意します。ただし、信徒は、これらのものに接吻し、聖なるものへの敬愛の心を養います。またイコンにも頻繁に接吻して、気持ちを天に向かわせます。十字架には^{キリスト}の顔や体ではなく手や足の部分に接吻するのがマナーです。また口紅をべったりつけないようにも心がけたいものです。

聖歌を歌い祈る

教会によっては、聖歌隊が代表して聖歌を歌う場合もありますが、信徒が全員で歌う教会もあります。歌うにせよ歌わないにせよ、心を、その祈りの言葉にのせて、神に向かわせます。言い換えれば、何が唱えられているのか、その言葉や形にどんな意味があるのかを

知ることが大切です。もちろん中には難しい言葉や言い回しがありますので、わからない所は、まえもって司祭に尋ねてみましょう。

単に知識として言葉の意味を知ることではなく、それらをとおして神に心を向けることが大事なことです。

禁食

聖体礼儀で御聖体を領聖するためには、その日は基本的に禁食することになっています。禁食の開始は日付が変わる深夜0時以降を目安にします。飲み食いだけでなくガムやたばこなどの嗜好品も口にしないようにします。領聖の前にそれらを摂取しないのは、御聖体が最も大切な食事であるからです。小学入学前の子供や高齢者、または常備薬の必要な人や病気の時などは、もちろん例外です。しかし、自分で判断せずに司祭に尋ねることが必要です。

痛悔

痛悔機密は、正教徒であれば基本的にいつでも受けられるものですが、日本正教会では、聖体礼儀で領聖する前には痛悔機密を受けておくことになっています。つまり、領聖を希望する人は、禁食と痛悔機密によって心の準備をするわけです。

痛悔機密では、自分の罪を言葉で言い表さなければなりません。司祭は痛悔機密で語られた内容を絶対に他言してはいけないという決まりがあります。

痛悔機密の中で何をどのように言っていかわからないというのが最初の戸惑いであるのも確かです。しかし、痛悔機密を繰り返し受けることによって、痛悔とは何かがわかってきます。

領聖

領聖の時がきたら、胸に手をX型に組み、順番を待ちます。自分の番がきたら自分の聖名を司祭に告げ、口を大きくあけて御聖体を

もらいます。

この時、頭を下げたり十字をかいたりしないように気を付けなければなりません。ポティールに頭や手を当てて粗相してはいけなからです。

領聖したら別のテーブルにおいてあるパンとぶどう酒を食します。これらは、御聖体が口の中に残らないようするためのぶどう酒と、聖なる食事（領聖）の後にいただくべき聖パンです。

その他、奉神礼の中で行うべき表信（弓拝、伏拝、跪く、頭を屈めるなど）もありますが、参拝を重ねることによって身につけていけばよいでしょう。なお、ロシアなどでは、女性は頭を布で覆って参拝する習慣もあります。

常識的なマナーもぜひ心に留めておきたいものです。例えば、遅刻しない、雑談をしない、よけいな飲食物をもちこまない、ペットを携えない、携帯電話の電源はオフにする、などです。

② 信仰生活

信仰のための習慣

正教会には、戒律とか律法などは一切ありません。基本的に「自由」であるのが正教徒です。聖使徒パウロは、「すべてのことは私に許されている。しかし、すべてのことが益になるのではない」（コリント前書6：12）と言いました。正教徒にとってもすべては自由ですが、もちろん信仰生活にふさわしくないことは当然避けなければなりません。また、正教会には信仰をもち、また深めるための手段として、さまざまな習慣があります。聖伝の中に培われてきたそれらの習慣に従うことは、正教徒にとって非常に大切なことです。

祈る

自分の家で「小祈祷書」に従って祈りをするのはとても大切です。「小祈祷書」の中の注意書きにあるように、祈祷文の意味に心を合わせないまますべてを読み上げるのではなく、たとえ一つの祝文でも心を用いて祈ることに意義があります。

教会の奉神礼に参拝することは、信仰生活に欠かせません。毎週日曜日は、復活を記憶して聖体礼儀が行われる日ですから、できるだけ参拝するのが普通の正教徒のあり方です。また十二大祭、中でも降誕祭や聖神降臨祭、そして復活祭には必ず参拝し機密を受けるよう奨励されます。教会の暦に従って祭を祝い、参拝することは、自分の生活が成聖されることを意味します。キリストスの福音が祭への参拝をとおして自分の生活に浸みてくると言ってもいいでしょう。

聖書を読む

普段から神の言葉である聖書を読むことも肝心です。何が語られ

ているのか、どんな出来事が記載されているのか、どんな表現があるのかを心にとめながら読みます。それらの言葉のもつ深い意味は、神品教役者の教導によって理解され得るものです。言い換えれば、正教会の聖伝から離れて個人的に勝手な解釈をしてはいけません。日本正教会訳の新約聖書は奉神礼で用いられますが、何の注解もなしに読むには少し難解であることも現実です。聖書を素読するという点においては、一般の書店に売られている口語訳聖書や新共同訳聖書といった日本語訳を利用してください。聖書を読むことをなござりにしては、信仰は枯れてしまいます。

齋（ものいみ）する

正教会には、暦に即した「齋」の期間や日があります。「齋」とは節制の時です。齋をとおして自分自身を省み、より熱心に神に心を向け、祭を祝う準備をします。その中でも復活祭前の「大齋」が特に大切です。以下に「大齋」の手引きを簡単に説明します。

大齋

大齋の期間、肉食をできるだけ避けます。可能であれば魚肉も食べないようにします（タコや貝類はよい）。また乾酪類と呼ばれるバターやチーズ、またミルクや卵も食べないようにします。アルコール類は、土曜と日曜以外、節制します。その他、男女の交わりや娯楽や祝賀なども控えます。正教会では大齋の期間はもちろん降誕祭の前の齋の期間など齋には結婚式は行わないのが常識です。

これら食事の面での齋は、まじめに取り組むことが奨励される一方、個人個人によって度合いが違いますので、いろいろと考慮されなければなりません。成長期の子供や体力のない高齢者や病者などに齋はすすめられません。また外食を余儀なくされる時、あまり細かく気にしすぎて思いわずらってはいけません。齋はタブーではありません。齋は体をいじめるためでなく、いたわるために行われる

べきものです。

大齋には、特別な祈祷が教会で行われています。平日ではありませんが、可能な限りそれらの奉神礼に参拝することも齋の行為です。食事の節制をするのは、食べること（＝生活）から我が身を振り返り、悔い改め、神に祈るためという目的を見失ってはなりません。特に「先備聖体礼儀」や「受難週」の祈祷には参拝するように心がけましょう。大齋には「エフレムの祝文」という痛悔の心に満ちた特別な祈祷をすることも奨励されます。

その他の齋は、「大齋」ほど厳格ではありませんが、節制の心や祈りの心は同じです。

徳

正教徒の徳行と信仰生活の基礎は「信仰」にあります。神を信じる信仰こそが私たちを善へと導きます。反対に神を忘れるとそこから悪が始まります。信仰の力は「希望」です。聖使徒パウロは「信仰とは、望んでいる事がらを確認し、まだ見ていない事実を確認することである」（ヘブル書11：1）と言っています。反対に失望や絶望は、私たちを最も罪深いところへ引きずり込みます。

「信仰」も「希望」も、「知識」と「知恵」が必要です。何も知らないものを信じたり望んだりすることはできないからです。私たちは常に「学び」を忘れてはいけません。「知恵」とは神の深い神秘や真理を悟る心のことです。

「知恵」ある者は、偽善を避け、真のへりくだりを求めます。「へりくだり」は「全ての徳の母」とも呼ばれています。反対に高慢は「すべての罪の源」です。「へりくだり」とは卑下とは違い、固い意志をもって神に「従順」に従うことを意味します。

神に従順であるためには「忍耐」が必要です。「忍耐」とはあきらめずに希望と「勇気」を持ち続けることです。ハリストスは「あなたがたは、この世ではなやみがある。しかし、勇気を出しなさい。

わたしはすでに世に勝っている」と言われました（イオアン^{ヨハネ}伝16：33）。

「勇気」のある者は、誠実さを忘れません。正しいことを最後までやりぬく心が私たちには必要です。そのためには、自分をコントロールする力を神からいただくことが肝心です。特に、自分を罪深さへと引きずる感情や欲を制御することを「アパテイア」と言います。「アパテイア」とは、心が、神を求め、神を愛し、神の力を得て、自由を得ることを意味します。

「信仰」も「希望」も「知恵」も「へりくだり」も「従順」も「忍耐」も「勇気」も「アパテイア」も、すべて神からの賜物です。すべては神の恵みであると受けとめ感謝する、この「感謝」こそが正教徒の生活の本質です。聖体礼儀は「ユーカリスト（感謝）」とも呼ばれます。正教徒は神に感謝するために聖体礼儀に参拝するのです。

そして、たとえどんなに祈り、聖書を読み、齋をしても、「愛」がなければ何にもなりません。聖使徒パウロ^{パウロ}は、「山を移すほどの強い信仰があっても、もし愛がなければ私は無に等しい」（コリント前書13：2）と言いました。愛はすべての徳を包括しています。

アガペーの愛を実践するためには、忍耐とへりくだりと知恵が必要です。怠惰と絶望と高慢の心は、愛を妨害します。

罪を憎みつつ人をゆるす努力をすることは重要な課題です。神がそうであるように、慈しみ深く、憐れみの心を持ち、相手の最善を願う。こうした愛が行えるように望みながら生活することを忘れてはいけません。

他宗教の中で

回りのほとんどがキリスト教徒でない日本の社会、まして正教会の世界とはかけ離れた近代日本の中で正教徒として生活するのは非常に困難なことです。世俗的な発想や習慣を知らないうちに身につけて、正教会の信仰の発育をふさいでしまう危険性は否めません。

しかし、そうならないためにこそ定期的に教会に行くことが大切です。

また必然的に仏教の法事や神道の儀式などに参加する機会が多いでしょう。しかし、正教徒としての信仰をしっかりと持ち、時には明らかに表明して、それらに対処しなければなりません。例えば、神社の祭を見学に行くことは問題ありませんが、手を合わせて拝んだり、お札などを買ったり、神輿をかついだりするのは当然してはならないことです。仏教の葬式や法事に参列しても、礼を失しない範囲でその宗教的な習慣にはなるべく従わず、死者のためにキリストスに祈る心を大切にします。

国のために祈る

正教会は、この世の現実の生活が神に祝福され、迫害や困難のないようにも祈ります。すなわち国自体が平和で秩序正しく豊かであることを願って、正教会では国家の代表者のために祈ります。日本正教会では現在「わが国の天皇および国を司る者のために祈る」と唱えています。聖使徒パウエルは「すべての人のために、王たちと上に立っている人々のために願いと祈りととりなしと感謝をささげなさい。それは私たちが安らかで静かな一生を…謹厳に過ごすためである。これは私たちの救い主である神のみまえに良いことであり、みこころにかなうことである」(ティモフェイ前書 2 : 1 ~ 3) と教えています。

③ 諸奉神礼

正教会には、機密や時課などの奉神礼の他に、個人的な状況によって行われる奉神礼があります。これらには、生活全体を成聖するという意味があります。さまざまな機会、出来事、あるいは物自体を祝福することによって、私たちの生活に神の臨在があることを明らかにしているわけです。

生活に密着した諸奉神礼にあずかることは、生活を、そして人生そのものを、神からの賜物として受け取り、そして、それを神に向かわせることにつながります。正教徒にとって、すべての源は神であり、すべてのゴールは神であることを、これらの奉神礼は教えてくれます。

実際には個々の事情によって行われるものなので、これらは自分の所属する教会の管轄司祭に依頼してください。

埋葬式

正教会では死のことを「永眠」と言います。これは永久に眠ったままだいるとか、死者のたましいが眠っている、という意味ではなく、「復活」の意味を込めた象徴的な表現です。眠る者は必ずやがて目覚めて起きあがります。

つまり、^{キリスト}の復活の恵みによって死はもはや死ではなくなり、やがて新しい生命にあずかれることをこの言葉は表しています。ただ毎日の就寝と区別するために「永い眠り」と表現しているわけです。

^{キリスト}と結びつく正教徒同士の絆は、死によって切断されません。教会は、精神的な面において、生きている者、死んだ者に区別を置きません。生きた者同士が互いに祈り合うように、相手が永眠してもその祈り合いは継続されるのです。永眠者のために^{キリスト}に天国と安息と罪のゆるしを祈る行為は、愛の行いの一

つです。

日本ではほとんど火葬ですが、土葬が基本の正教会は「埋葬式」という言葉にこだわりを持ちます。

正教徒が永眠した場合、原則として聖堂で埋葬式を行います。また前晩には「通夜」の祈祷として「パニヒダ」を行います。

実際に家族が永眠した時は、速やかに管轄司祭に連絡し、具体的な指示を仰いでください。

埋葬式の祈祷の内容は、信徒、司祭、主教、嬰兒によって異なります。

パニヒダ

「パニヒダ」とは、ギリシャ語の「パン(すべて)」と「ニクス(夜)」と「オーデー(歌)」の三つの言葉の合成で、「夜を徹して歌う」つまり「徹夜の祈り」という意味です。昔、徹夜で永眠者の為に祈っていたことに由来します。それでパニヒダは「永眠者の為の祈り」を表す言葉となりました。

今では「パニヒダ」を徹夜で行うことはありませんが、いわゆる「通夜」の時、親族や友人たちが永眠者の為に「聖詠(詩編)」のすべてを徹夜して読む習慣もあります。

パニヒダの一部のみを歌う形を「リティヤ(「熱切な祈祷」の意)」と言います。永眠者のために祈る時には普通パニヒダカリティヤを行います。

未信徒の永眠者のために祈る「異教人パニヒダ」という祈りもあります。正教会では原則として自殺者のためには奉神礼を行いません。自分の意志で神に背いたことが明らかであるからです。

いつでもどこでも永眠者の為の祈りは献じられるというのが基本姿勢ですが、新たに永眠した信徒のために祈る機会として次のような日にちを設定しています。

三日祭…永眠して三日を数える。キリストスの復活を象^{かたど}る。
九日祭…永眠して九日を数える。天使の九階級を象^{かたど}る。
四十日祭…永眠して四十日を数える。キリストスの昇天を象^{かたど}る。
一年祭…永眠して一年を数える。
年祭…年祭の年数に決まりはなく任意に行う。

これらの日には都合によって前後することも考慮されます。
要は心からの祈りです。一般でよく用いられる「忌」という語は正教会は使用しません。正教徒にとって死は忌まわしいものではなく、復活への入口であるため「祭」という語を用います。

その他、復活祭後の墓地祈祷や、大斎中の土曜日など、教会の暦に従って教会全体として永眠者のために祈る機会もたくさんあります。(復活を祝う日曜日には永眠者を嘆くことは避けられるのが基本ですが、諸事情を鑑みて主日にもパニヒダを行っています)

モレーベン

「モレーベン」という言葉は、もともと単に「(短い) 祈祷」という意味で、聖人のとりなしを願う特別な祈りを指すこともありますが、日本正教会では慣習として「感謝祈祷」を表す言葉となっています。

人生のいろいろな機会に神に感謝をささげることは必要なことです。七五三の習慣はもともと神道のものですが、子供の成長を祝い感謝し祈願する心は大切ですから、その機会に感謝祈祷をする習慣を日本正教会では取り入れています。

同じように、成人式、入学、卒業、就職などなど、さまざまな人生の節目に感謝祈祷を献じるよう奨励しています。また、日本では初詣が盛んですが、正教会でも新年に感謝祈祷を行います。

その他、自分の聖人の記憶日、すなわち「聖名日」にモレーベン

を行う方も少なくありません。

成聖

正教会では物を聖にすることを「聖なるものと成す」と書いて「成聖」といいます。「成聖」は、汚れから清めるという意味ではなく、神とのつながりを回復するという意味で行われます。

成聖するものは、教会と直接関係のある「聖堂」「聖器物」「祭服」「イコン」「十字架」「復活祭の卵」などの他に、私たちが日常生活で使用するものも対象となります。例えば、「土地」「家」「建物」「車」「バイク」「船」「果物」などです。

新しく家を建てた時もしくは引っ越した時には「家屋成聖」、車やバイクなどを買った時には「乗物の成聖」を依頼することを忘れないようにしましょう。

旅行祈禱

長く遠い旅にでかける場合、その前に旅行安全を願う祈禱です。旅行は、ある意味危険なことに会う確率が高くなりますので、その中に^{キリスト}ハリストスの守護があるよう祈るわけです。祈禱文は「陸路」「水路」「空路」の三種類あります。

特に海外に出かける時は、外国の正教会に行く機会もあるでしょうから、司祭に洗礼証明書を発行してもらおうとよいでしょう。

病者平癒

重い病気になったりケガをした時などは、司祭を呼んで平癒の祈禱をしてもらいます。「病者平癒の祈禱」という祈りの他にも、「病者領聖式」があり、病院のベッドの上で御聖体を受けることもできます。また「聖傳機密」を受けることもできます。

危篤の時にも司祭を呼び「臨終規程」という祈禱をしてもらいます。

産後の祈祷

赤ちゃんに恵まれた時のため、産後一日目と八日目と四十日目に特別な祈祷があります。特に四十日目は、「主の迎接祭」にならうもので、母子ともに教会を訪れて、感謝と祈願をします。万が一流産してしまった時にも特別な祈祷がありますので、司祭に相談してください。

廻家祈祷

司祭は、降誕祭後と復活祭後に祭の祝いを分かち合うために信徒宅を廻って祈祷する習慣となっています。その他、任意の時に家庭訪問することもあります。

代式祈祷

日本の正教会では神父不在の教会も多く、すべての教会が毎主日に聖体礼儀を行えるわけではありません。しかし、司祭がない場合、一人の信徒を中心に「代式祈祷」という祈りを捧げることがあります。

③ 献金と奉仕

神へのささげもの

神に「ささげもの」をするという行為は、信仰生活に欠かせない行いです。神にささげるものとは、もちろん「感謝」「讚美」「痛悔」といった「祈りの心」です。

しかし、私たちは心だけで生きているのではなく、肉体とたましいが一つになった人間です。単に「心の中」でとどまることなく、行為や物をとおして神にささげものをするということが、旧約の昔から新約時代の現在にいたるまで行われてきました。

旧約時代には、動物や穀物などを献祭していました。新約聖書には、^{キリスト}ご自身がご自分を献祭したことが強調されています（^{エウレ}書9章、他参照）。

初代教会では、ささげられた物やお金を共有して信徒や使徒の宣教活動に役立てました（使徒行実4：32以下、他参照）。

献金の必要性

現在でも、正教会は「献金」によって支えられています。もちろん神さまにはお金や物は必要ありません。ただこの地上にある神の教会を維持し発展させるためには必要不可欠です。教会は神^{キリスト}の体です。神の教会のために献金したり奉仕したりする行為は、神への信仰の心の表明に他なりません。献金は現実には地上の教会のために使われるものですが、精神的な意味では神へのささげものなのです。

神におかえしする

しかし、神にささげるものはすべて最初から自分のものではなくもともとは神様からいただいたものです。自分の生命も心も健康も仕事も家族も食べ物もお金も物もみんな神からの賜物です。本当は

「ささげる」というより「おかえしする」と言った方がより正確です。このことを忘れなければ、自分の所有物から余った分を寄付するとか、しょうがないからしぶしぶ差し出すという感覚はなくなり、感謝の気持ちをもつことができます。

定額献金

日本正教会では、現在、「定額献金」という形をとっています。「定額」とは「定期的に一定の金額」を献金するという意味です。

「献金」は強制や戒律的な義務ではなく、あくまでも自由な心から感謝をもってすべき信仰的な行為ですので、厳格に金額の指定がなされることはありません。「定額献金」に対して世俗の会費とか税金などのような感覚をもたないようにしなければなりません。実際にいくら金額にすればよいかは、各教会での目安を参考にして自分で決めます。仕事をして収入を得ている方はすべて定額献金をするのが本来です。具体的にどのように手続きをするかは各教会の会計担当の方にお尋ねください。「定額献金」があつてこそ、事実、教会が運営され、司祭が派遣されます。「定額献金」は地上の教会の見える面での生命の糧です。

その他の献金

正教会では、「定額献金」の他に、復活祭や降誕祭を祝つてなされる「祭日献金」や、主教区の活動費のためになされる「篤信献金」または「宣教献金」、修復や建設などのために特別に呼びかけられる献金などもあります。

また、洗礼や婚配などの機密、埋葬式やパニヒダやモレーベンやその他の諸奉神礼にあずかった時も、感謝を込めてそれ相応の献金をします。これらの献金の額に関しても、自分の所属の教会の執事などに相談するとよいでしょう。

献品

このように、教会にお金をささげることを「献金」と言いますが、何らかの品物を献納することを「献品」と言います。信徒からの献品も教会の活動を支えます。

奉仕

また、教会のために労働をささげることは「奉仕」と言えるでしょう。教会は献金や献品だけでなく信徒一人一人の奉仕によって成り立っているのです。

教会の建物・境内の清掃や美化、修繕などに労働奉仕することは、神に喜ばれる行為であり、祈祷文の中にも「汝が堂の美なるを愛する者を聖にせよ」という祈りがあります。またバザーなどを行う教会では、信徒の奉仕が不可欠です。

各種会合

教会によっては、「婦人会」「青年会」「教会学校」といった会合があり、それぞれ独特の活動が行われています。

「婦人会」は女性信徒による会ですが、実際に教会を活発化させ生きたものになっているのは、女性の力です。より多くの方が婦人会をとおして奉仕することは、教会の発展につながります。

「青年会」は、若い人たちの集まりです。学びや交流や労働をとおして教会に貢献します。

「教会学校」は、「日曜学校」とも呼ばれ、子供たちに信仰教育を行う機関です。教会学校の先生として奉仕することは大事な役目です。

「聖歌隊」として聖歌を歌う奉仕をすることもできます。正教会では、信徒全員が祈ることが基本ですが、実際に聖歌を歌うには技術も必要ですので、特別に練習した聖歌隊によって奉神礼を行う教会もあります。

その他、輔祭や副輔祭、誦経者、堂役として奉仕する方もいます。

代父母

新たに洗礼を受ける人のために「代父母」となることも大事です。洗礼には、新たな誕生という意味がありますので、受洗者には、父と母の代わりとなる男女の信徒が必要です。それを「代父」「代母」といい、その子を「代子」と言います。代父母と代子の関係は、精神的な面での家族となります。代父母は、代子の信仰成長のために世話をしてあげます。

執事や委員

「執事会」に所属して、教会の日常の運営にたずさわったり、教会の会計を担当したりする奉仕の仕方もあります。また宗教法人法にのっとった「責任役員」を務める信徒も必要です。

日本ハリストス正教会教団に属するいろいろな会の委員となって奉仕する方もいます。各主教区では「教区会議」、教団全体では「全国公会」が通常年一回開催されます。これらは教会全体としての取り決めを行う重要な会議で、代議員として信徒が参加します。

一教会に属する信徒として

各教会では、定期的に「会報」が発行され、信徒宅に配布されています。この会報に目をおし、教会の暦や行事などを知り、それらに参加することが大切です。またその会報の編集に奉仕する方もいます。

なお、信徒は、住所を変更した場合、必ず所属の教会に通知しなければなりません。

宣教

「宣教」の面での奉仕も大切です。「宣教」とは神の教えを知らな

い人に、それを伝え知らせるということです。その相手は自分の家族であり、友人であり、仕事仲間であり、たまたま知り合った人かもしれません。その人々に正教会の存在とその教えの概要を伝えることを心がけましょう。深い内容などについては、教会に来て教えてもらうようにすればよいでしょう。

聖神の恵み

新約聖書にあるタラントの譬（マ^マト^タフ^エイ^イ 25 : 14 以下）のように、各信徒は自分のタラント（能力や技能）をそれぞれ生かした形で教会に奉仕します。教会はキ^キリ^リス^スト^トスの体であり、私たちのその一つ一つの違った器官です。奉仕の仕方は異なりますが、信仰においては一つです。教会に常に降臨している神・聖神の賜物は、その人の個を生かす力です。各信徒がそれぞれ教会に献金・献品・奉仕することは、聖神の恵みをいただくことに他なりません。

⑤ その他の習慣

正教会には、これまでに紹介してきた奉神礼や諸習慣の他にも生活に密着したさまざまな習慣があります。その代表的なものをいくつか取り上げて説明いたします。

聖水式

主の洗礼祭（神現祭）の聖体礼儀に引き続き「大聖水式」を行う習慣があります。キリストが洗礼を受けたのは、水で清められるためではなく、水を聖にするためです。水はあらゆる物質に含まれるものなので、「この世」を象徴しています。つまり水を聖にすることは、「この世」を成聖することにつながります。聖水式を行うのは、キリストの成聖の業を「やり直している」のではなく、「拡張して現臨させている」のです。

「大聖水式」は、ところによっては川や湖に出かけて行って行われることもあります。町の中の教会では、専用の大きな容器に水を汲んで、その水を聖にします。聖水は、一年間保管され「成聖」するために使用されます。すなわち、さまざまな物（179 ページ参照）や、信徒にも振りかけられます。

また各信徒は、聖水をビンなどに入れて家に持ち帰り、いろいろな機会（病気の時、旅行の時、また普段の食事の時などにも）に飲みます。信仰をもって聖水を飲む者、または注がれる者には、聖神の恵みが与えられます。聖神の恵みとは信徒として健全に生きる力です。

十字行

大十字架やイコン、凱旋旗、その他、さまざまなものをもって行列をつくり行進することを「十字行」と言います。例えば、聖大金曜日の夜や、復活祭の時などに、聖堂の周囲を十字行する習慣があ

ります。

復活祭の卵

復活祭には赤く染めた卵を飾り、食べる習慣が古くから行われてきました。一説には、マグダラのマリヤ（^{キリスト}の女弟子の一人）が、^{キリスト}の復活を告げ知らせるためローマ皇帝に謁見した際、赤い卵を献上したことに由来すると言われています。

卵は、見た目には動きませんが、やがて新しい生命がそこから生まれ出るので、死と復活を象徴しています。赤い色は、^{キリスト}が十字架上で流した血の色を想起させ、また「血は生命である」（レビ記 17：11）ので、新しい生命である復活をも意味します。つまり、赤も死と復活の象徴です。今では、より美しく飾りたいという気持ちから、赤だけでなく色々な色に染めたり装飾や模様を施したりもします。

アルトス

復活祭の日には、卵だけでなく「アルトス（ギリシャ語で「パン」という意味）」とよばれる特別なパンを成聖します。アルトスは光明週間の間、天門の横に置いておかれ、フォマの主日に分かち合って食べる習慣があります。

糖飯（とうはん）

「パニヒダ」を行う時に、「糖飯」を用意する習慣があります。糖飯とは、穀物を炊いたものを蜜や砂糖で甘くした食べ物です。ギリシャなどでは麦が使われますが、日本では餅米を使うようになりました。「一粒の麦が地に落ちて死ななければそれはただ一粒のままである。しかしもし死んだなら、豊に実を結ぶようになる」（^{ヨハネ} 12：24）と言われた^{キリスト}の言葉のとおり、穀物は永眠者の復活を象^{かたど}ります。聖使徒^{パウロ}も復活を説明する時に、穀物を

引き合いに出しています（^{コリント}前書 15：35 以下）。

甘くするのは、天国の甘美さを表し、旧約における神の約束の地が「乳と蜜の流れる地」（申命記 6：3）と表現されたように、神の国のよき味わいを象^{かたど}ります。

通常、皿にこんもりともった上に、干しぶどうなどで十字架の形が描かれます。その他さまざまなお菓子類を飾りつけたりもします。「パニヒダ」が終わった後、参拝者全員で分かち合い、食します。

聖パン記憶

聖体礼儀が行われる時、信徒は「聖パン記憶」を司祭に依頼することができます。聖パン記憶とは、提出された用紙に書いてある信徒の聖名を読み上げながら、司祭が聖パンから聖^{せい}戈^かを使って小片を取り出すことを言います。信徒は、自分だけでなく自分の家族や友人など、記憶してほしい人々の聖名を生者と死者に分けて用紙に記入します。

記憶した小片は、ディスクスの上に置かれ、教会を象^{かたど}り、聖体礼儀の最後に尊血の中に入れられ、^{キリスト}と一つになります。記憶された後の聖パンは手元に戻されます。これは、家に持ち帰り、ジャムやバターなどは塗らずに敬虔な気持ちで食べます。

ちなみに、聖パンは、「プロスフォラ（「供える」という意味）」とも呼ばれ、御聖体となるパンと同じように、水と小麦粉とイースト菌のみで作られます（塩を少し混ぜることも）。円状に二段重ねの形をしています。円は永遠を象^{かたど}り、二段重ねは^{キリスト}の人性と神性を象^{かたど}っています。

アンティドル

聖体礼儀が終わった後、参拝者は、切り分けられたパンをいただきます。このパンは「アンティドル」と呼ばれます。これは、「賜物の代わり」という意味で、御聖体のために使ったパンの残りを、領

聖しなかった人々のために分与していたことに由来します。今では、参拝者全員がもらう習慣となっています。

祭の前晩

「祭」の前晩に行われる「徹夜祷」の中で、五つのパンと、麦（もしくは米）、ぶどう酒、油を祝福する奉神礼が行われます。このパンは、「リティヤ」と呼ばれる特別な祈祷に引き続き行われるため、「リティヤのパン」と呼ばれることもあります。五つのパンは、五千人の共食の奇跡（マルコ6：30以下、他）を象^{かたど}っています。祝福されたパンはぶどう酒に浸され、参拝者に分与されます。祝福された油は、参拝者の額に十字形に塗られます。こうして祭を祝い、神の豊かな祝福をいただきます。

聖枝祭の枝

主のエルサレム入城を記憶する「聖枝祭」には、その名のとおりに、枝をもって祝います。それで「枝の祭」とも呼ばれます。聖書に記載されているようにシュロを使う教会もありますが、ロシアなどではネコヤナギを使っています。その他、オリーブやいろいろな花を使うこともあります。参拝者は祈祷の間ずっとこの枝を手にとって祈ります。その後、枝は家にもって帰り、イコンの上や横に一年間置かれます。この枝は、「勝利のしるし」と呼ばれます。

十字架を花で飾る

十字架挙栄祭、そして大斎の第三主日である十字架叩拝の主日の時、聖堂の中央に花で飾られた十字架を置くという習慣があります。参拝した信者は伏拝してその十字架に接吻します。花で飾るのは、私たちにエデンの園を思い起こさせるためです。エデンの園の中央に植えられた生命の木は、教会の真ん中にある十字架を預象しています。ハリストスの十字架は復活という「生命」をもたらした「生

命の木」なのです。

五旬祭の植物

五旬祭の時、聖堂を木々や花で飾る習慣もあります。神・聖神が「生命を施す者」（信経）として今も私たちに恵みを与えていることをあらわすためです。

変容祭の果物

変容祭には、信徒はぶどうやその他の果物を持参して参拝します。祈禱の中で成聖された果物は、喜びをもって食されます。変容とは、^{キリスト}が山の上で光栄の姿に変わったことを言いますが、果物も、小さな種から豊かな味わいのある果実へと変容したものです。私たち人間も、神成（テオシス）の恵みによって変容していくべきものであることを果物の成聖は教えます。

呼びかけなどの習慣

神を「主」と承け認めるので、正教徒は「神の僕」「神の婢」と呼ばれます。これは神の前で「へりくだる」こと、しかし神との固い結びつきをもつことを表します。

また神の前では兄弟姉妹ですから、「〇〇兄」「〇〇姉」と互いに呼び合います。

司祭に対しては敬いの心をもって「神父様」とか「神父さん」と呼びかけます。

手紙や文書の最初には、「主の御名によりて」とか「至聖三者の御名によりて」という文を添えたりします。

復活祭の期間には「ハリストス、復活」「実に復活」というあいさつを交わします。

聖師父たちの言葉——信仰生活

「信者の仕事は、常に死に対して準備をすること以外の何ものでもない」(聖イリネイ)

「神がいましめたことを行わない者は、神を信じていないことを顕わしているのである。」(聖クリメント)

「手を伸ばすのは貧しい者だが、その貧しい者にあなたが与えるものを受け取るのは神ご自身である。」(金ロイオアン)

「私たちは神を礼拝するよう教えられている。特別な日に、ではなく、絶え間なく。私たちの人生をとおして、できるかぎり。」(聖クリメント)

「信仰を固く立て、献身を常に保ち、徳を続けるものが、三つある。それらは、祈り、齋、憐れみである。祈りはドアをノックし、齋は手に入れ、憐れみは受け取る。祈りと齋と憐れみ、この三つは一つである。それらは互いに生命を与える。」(ペトル・クリソログス)

「もし私たちが、主の尊体尊血を十分に（できるなら毎日でも）いただくことをしないならば、私たちは悪魔から逃げることはできないであろう。」(アトス山の聖ニコデモ)

「神を愛する者にとって、罪とは、まさしく戦いにおける敵からの矢である。真実の信者は、見えざる敵の大群の中を天の故郷へと戦い進む戦士である。聖使徒の言葉によれば、私たちの故郷は天にあり、そして“私たちの戦いは血肉に対するものではなく、…闇の主権者…に対する戦いである”」(サーロフの聖セラフィム)

第8章 正教会の早見表

① 固有名詞対照表

日本正教会で使用されている人名、地名などの固有名詞の表記は、一般や他宗派の教会とは異なるものが多くあります。その主なものを対照した表です。

正教会	一般・他宗派
アアロン	アロン
アウディヤ	オバデヤ
アウラアム	アブラハム
アウワクム	ハバクク
アゲイ	ハガイ
アナフェマ	アナテマ
アフアナシイ	アサナシウス
アマリク	アマレク
アライ	アリウス
アリマフェヤ	アリマタヤ
ア ril イヤ	ハレルヤ
アレキサンドル	アレキサンダー
アレキセイ	アレクシウス
アンティオヒヤ	アンテオケ
アントニイ	アントニウス
アンドレイ	アンデレ
アンナ	ハンナ
アヴェリ	アベル
イイスス	イエス

正教会	一般・他宗派
イイスス・ナビン	ヨシュア
イウヂヒ	ユディト
イウスチン	ユスティノス
イウダ	ユダ
イウデヤ	ユダヤ
イエゼキイリ	エゼキエル
イエッセイ	エッサイ
イェリホン	エリコ
イエエルサリム	エルサレム
イエレミヤ	エレミヤ
イオアキム	ヨアキム
イオアン	ヨハネ
イオイリ	ヨエル
イオシフ	ヨセフ
イオナ	ヨナ
イオフ	ヨブ
イオルダン	ヨルダン
イグナティ	イグナティウス
イサアク	イサク

正教会	一般・他宗派
イサイヤ	イザヤ
イスカリオト	イスカリオテ
イズライリ	イスラエル
イリネイ	エイレナイオス
イリヤ	エリヤ
イロド	ヘロデ
エルリン	ギリシャ (ヘラス)
エウセビイ	エウセビオス
エウレイ	ヘブル(ヘブライ)
エギペト	エジプト
エスフィル	エステル
エズドラ	エズラ
エデム	エデン
エノフ	エノク
エフェス	エペソ
エフレム	エフライム
エムマヌイル	インマヌエル
エリザヴェタ	エリザベツ
エリセイ	エリシヤ
エルモン	ヘルモン
エレナ	ヘレナ
エワ	エバ
オサンナ	ホサナ
オシヤ	ホセア
オリゲン	オリゲネス
カイアフア	カヤパ
カペルナウム	カペナウム

正教会	一般・他宗派
ガウリイル	カブリエル
ガリレヤ	ガリラヤ
キプル	キプロス
キリール	キュリロス
ギエジイ	ゲハジ
クリト	クレタ
クリメント	クレメンس
グリゴリイ	グレゴリオス
ケサリ	カエザル
ケサリヤ	カイザリヤ
ゲエンナ	地獄
ゲオルギイ	ゲオルギオス
ゲフシマニヤ	ゲッセマネ
ゲンニサレト	キンネレテ
コリンフ	コリント
コンダク	コンタキオン
ゴリアフ	ゴリアテ
ゴルゴファ	ゴルゴタ
サタナ	サタン
サッドウケイ	サドカイ
サツラ	サラ
サムイル	サムエル
サワオフ	万軍
Sampson	サムソン
ザクヘイ	ザアカイ
ザハリヤ	ザカリヤ
ステファン	ステパノ

正教会	一般・他宗派
スポタ	シャバット
セラフィム	セラピム
セルギイ	セルギウス
ゼヴェデイ	ゼベダイ
ソフォニヤ	ゼパニヤ
タルス	タルソ
ダウイド	ダビデ
ダニイル	ダニエル
ダマスク	ダマスコ
ティト	テトス
ティモフェイ	テモテ
ティヴェリアダ	テベリヤ
ディミトリイ	ディミトリオス
トロパリ	トロパリオン
ナウム	ナホム
ナザレト	ナザレ
ナファナイル	ナタナエル
ニケヤ	ニケア
ニコディム	ニコデモ
ネーミヤ	ネヘミヤ
ネストリイ	ネストリウス
ノイ	ノア
ハナアン	カナン
ハリストティアニン	クリスチャン
ハリストス	キリスト
ハルキドン	カルケドン
ハルデヤ	カルデヤ

正教会	一般・他宗派
パウエル	パウロ
ファディ	タダイ
ファラオン	パロ (ファラオ)
ファリセイ	パリサイ
ファヴォル	タボル
フィリスティヤ	ペリシテ
フィリップ	ピリポ
フィリモン	ピレモン
フェオドル	テオドロス
フォマ	トマス
ヘルヴィム	ケルビム
ペトル	ペテロ
ポリカルプ	ポリカルポス
ボンティイ・ピラト	ボンテオ・ピラト
マカリイ	マカリオス
マキシム	マクシモス
マグダリナ	マグダラ
マッカウエイ	マカバイ
マディアム	ミデアン
マトフェイ	マタイ
マナッシヤ	マナセ
マラヒヤ	マラキ
マラン、アフア	マラナ・タ
マルファ	マルタ
マンナ	マナ
ミハイル	ミカエル
ミヘイ	ミカ

正教会	一般・他宗派
メルヒセデク	メルキゼデク
モイセイ	モーセ
ラザリ	ラザロ
ラヒリ	ラケル
リヤ	レア
リワン	レバノン
ルフ	ルツ
ルヴィム	ルベン
レヴィト	レビ
レヴェカ	リベカ
ロマ	ローマ
ロマン	ローマノス
ワシリイ	バシリウス

正教会	一般・他宗派
ワヴィロン	バビロン
ワラウワ	バラバ
ワルク	バルク
ワルナワ	バルナバ
ワルフォロメイ	バルトロマイ
ワルワラ	バルバラ
ヴィファニヤ	ベタニヤ
ヴィフェズダ	ベテスタ
ヴィフレエム	ベツレヘム
ヴェエルゼウル	ベルゼブル
ヴェニヤミン	ベニヤミン
ヴェリアル	ベリアル
ヴォラズ	ボアズ

- ※ シオンやマリヤなど一般にも共通する語は掲載していません。
- ※ ワイ、ワエ、などはウィ、ウエ、もしくはヴィ、ヴェと表記し直しました。

② 聖書各巻一覧および各奉神礼書一覧

旧約聖書

	正教会書名	新共同訳聖書	備考
1	創世記	創世記	1~5 は「モーセ五書」
2	エジプトを出づる記	出エジプト記	
3	レヴィト記	レビ記	
4	民数記	民数記	
5	申命記	申命記	復伝律令とも記される
6	イイスス・ナビン記	ヨシュア記	
7	士師記	士師記	
8	ルフ記	ルツ記	1~8 は「旧約八書」
9	列王記第一巻	サムエル記上	
10	列王記第二巻	サムエル記下	
11	列王記第三巻	列王記上	
12	列王記第四巻	列王記下	
13	歴代誌略第一巻	歴代誌上	
14	歴代誌略第二巻	歴代誌下	
15	エズドラ第一巻	エズラ記 (ギリシア語)	エズラ記の書名には異 同があるので要注意
16	エズドラ第二巻	エズラ記	
17	ネーミヤ書	ネヘミヤ書	
18	トビト書	トビト書	
19	イウヂヒ書	ユディト書	
21	エスフィル記	エステル記	
21	マカウエイ第一巻	マカバイ記一	
22	マカウエイ第二巻	マカバイ記二	
23	マカウエイ第三巻	(新共同訳には訳出されていない)	
24	聖詠	詩編	『聖詠経』

25	イオフ書	ヨブ記	
26	箴言	箴言	
27	伝道書	コヘレトの言葉	
28	雅歌（諸歌の歌）	雅歌	
29	ソロモンの知恵書	知恵の書	
30	シラの子イスの知恵書	シラ書〔集会の書〕	
31	オシヤの預言書	ホセア書	十二小預言書
32	アモスの預言書	アモス書	十二小預言書
33	ミヘイの預言書	ミカ書	十二小預言書
34	イオイリの預言書	ヨエル書	十二小預言書
35	アウディヤの預言書	オバデヤ書	十二小預言書
36	イオナの預言書	ヨナ書	十二小預言書
37	ナウムの預言書	ナホム書	十二小預言書
38	アウワクムの預言書	ハバクク書	十二小預言書
39	ソフォニヤの預言書	ゼパニヤ書	十二小預言書
40	アゲイの預言書	ハガイ書	十二小預言書
41	ザハリヤの預言書	ゼカリヤ書	十二小預言書
42	マラヒヤの預言書	マラキ書	十二小預言書
43	イサイヤの預言書	イザヤ書	
44	イエレミヤの預言書	エレミヤ書	
45	ワルフの預言書	バルク書	
46	イエレミヤの達書	エレミヤの手紙	
47	哀歌	哀歌	
48	イエゼキイリの預言書	エゼキエル書	
49	ダニールの預言書	ダニエル書	

※ロシア語聖書には「エズドラ第三巻」も含まれ、全部で 50 書となる。

※書の順番は 1994 年アテネ発行の“Н А Г И А Г Р А Ф И”に従った。

※通し番号は便宜的に添付したもの。■は、LXX にあって MT にない書。

他にも、ギリシャ語訳旧約聖書にあってヘブライ語聖書にないものとしては以下の部分などがある。

聖詠（経中ニ加エズ）	第151詩編
マナッシヤの祝文	マナセの祈り
エスフィル記の付加部分	エステル記（ギリシャ語）
ダニイル書3章24～67節、他	ダニエル書補遺

新約聖書

	正教会訳	新共同訳
1	マトフェイによる福音書	マタイによる福音書
2	マルコによる福音書	マルコによる福音書
3	ルカによる福音書	ルカによる福音書
4	イオアンによる福音書	ヨハネによる福音書
5	使徒行実	使徒言行録
6	イアコフの書	ヤコブの手紙
7	ペトルの前書	ペトロの第一の手紙
8	ペトルの後書	ペトロの第二の手紙
9	イオアンの第一書	ヨハネの手紙一
10	イオアンの第二書	ヨハネの手紙二
11	イオアンの第三書	ヨハネの手紙三
12	イウダの書	ユダの手紙
13	ロマ人に達する書	ローマの信徒への手紙
14	コリント人に達する前書	コリントの信徒への手紙一
15	コリント人に達する後書	コリントの信徒への手紙二
16	ガラティヤ人に達する書	ガラテヤの信徒への手紙
17	エフェス人に達する書	エフェソの信徒への手紙
18	フィリッパ人に達する書	フィリピの信徒への手紙

19	コロサイ人に達する書	コロサイの信徒への手紙
20	フェサロニカ人に達する前書	テサロニケの信徒への手紙一
21	フェサロニカ人に達する後書	テサロニケの信徒への手紙二
22	ティモフェイに達する前書	テモテへの手紙一
23	ティモフェイに達する後書	テモテへの手紙二
24	ティトに達する書	テトスへの手紙
25	フィリモンに達する書	フィレモンへの手紙
26	エウレイ人に達する書	ヘブライ人への手紙
27	神学者イオアンの黙示録	ヨハネの黙示録

各奉神礼書

ふくいんけい 福音経	四福音書をまとめて一冊にしたもの
しとけい 使徒経	使徒行実と使徒の手紙を一冊にしたもの
せいえいけい 聖詠経	聖詠（詩編）を一冊にまとめたもの
じかけい 時課経	時課の祈りをする時に用いるもの
はっちょうけい 人調経	時課で用いる第一調から第八調までの祈祷文
さいじつけい 祭日経	祭日の時に用いる奉神礼書
さんかさいけい 三歌斎経	大斎準備週、大斎、受難週の期間に使用する書
ごじゅんけい 五旬経	復活大祭から五旬祭の期間に使用する書
れんせつかしゅう 連接歌集	主にイルモスと呼ばれる祈祷文をまとめたもの
ほうじけい 奉事経	時課や聖体礼儀のために司祭が用いる書
せいじけい 聖事経	機密やその他の祈祷のために司祭が用いる書
げっかけい 月課経	毎日の聖人や祭のためにまとめられた奉神礼書

③ 年間主日祭日の聖書の読み一覧

以下の表は、毎主日に聖体礼儀において読まれる使徒経と福音経の箇所を章節で表記したものです。

主日	使徒経	福音経
復活祭	使徒 1:1~8	イオ 1:1~17
フォマの主日	使徒 5:12~20	イオ 20:19~31
携香女の主日	使徒 6:1~7	マル 15:43~16:8
難者の主日	使徒 9:32~42	イオ 5:1~15
サマリヤの婦の主日	使徒 11:19~26,29~30	イオ 4:5~42
瞽者の主日	使徒 16:16~34	イオ 9:1~38
昇天祭	使徒 1:1~12	ルカ 24:36~53
諸聖神父の主日	使徒 20:16~18,28~36	イオ 17:1~13
五旬祭	使徒 2:1~11	イオ 7:37~52, 8:12
第一主日	エウ 11:33~12:2	マト 10:32~33, 37~38, 19:27~30
第二主日	ロマ 2:10~16	マト 4:18~23
第三主日	ロマ 5:1~10	マト 6:22~33
第四主日	ロマ 6:18~23	マト 8:5~13
第五主日	ロマ 10:1~10	マト 8:28~9:1
第六主日	ロマ 12:6~14	マト 9:1~8
第七主日	ロマ 15:1~7	マト 9:27~35
第八主日	コリ前 1:10~18	マト 14:14~22
第九主日	コリ前 3:9~17	マト 14:22~34
第十主日	コリ前 4:9~16	マト 17:14~23
第十一主日	コリ前 9:2~12	マト 18:23~35
第十二主日	コリ前 15:1~11	マト 19:16~26
第十三主日	コリ前 16:13~42	マト 21:33~42

第十四主日	コリ後 1:21~2:4	マト 22:1~14
第十五主日	コリ後 4:6~15	マト 22:35~46
第十六主日	コリ後 6:1~10	マト 25:14~30
第十七主日	コリ後 6:16~7:1	マト 15:21~28
第十八主日	コリ後 9:6~11	ルカ 5:1~11
第十九主日	コリ後 11:31~12:9	ルカ 6:31~36
第二十主日	ガラ 1:11~19	ルカ 7:11~16
第二十一主日	ガラ 2:16~20	ルカ 8:5~15
第二十二主日	ガラ 6:11~18	ルカ 16:19~31
第二十三主日	エフェ 2:4~10	ルカ 8:26~39
第二十四主日	エフェ 2:14~22	ルカ 8:41~56
第二十五主日	エフェ 4:1~6	ルカ 10:25~37
第二十六主日	エフェ 5:9~19	ルカ 12:16~21
第二十七主日	エフェ 6:10~17	ルカ 13:10~17
第二十八主日	コロ 1:12~18	ルカ 14:16~24
第二十九主日	コロ 3:4~11	ルカ 17:12~19
第三十主日	コロ 3:12~16	ルカ 18:18~27
第三十一主日	ティ前 1:15~17	ルカ 18:35~43
※ 復活祭の日付によって年間の主日の数に変動があるため、調整が行われる。		
第三十二主日	ティ前 4:9~15	ルカ 19:1~10
税吏とファリセイの主日	ティ前 3:10~15	ルカ 18:10~14
蕩子の主日	コリ前 6:12~20	ルカ 15:11~32
断肉の主日	コリ前 8:8~9:2	マト 25:31~46
乾酪の主日	ロマ 13:11~14:4	マト 6:14~21
正教勝利の主日	エウ 11:24~26, 32~12:2	イオ 1:43~51
グリゴリイ・パラマの主日	エウ 1:10~2:3	マル 2:1~12
十字架叩拜の主日	エウ 4:14~5:6	マル 8:34~9:1
階梯者イオアンの主日	エウ 6:13~20	マル 9:17~31

エジプトのマリヤの主日	エウ 9:11~14	マル 10:32~45
聖枝祭	フィ 4:4~9	イオ 12:1~18

大祭およびその前後に関する主日

生神女誕生祭	フィ 2:5~11	ルカ 10:38~42,11:27~28
十字架挙栄祭前の主日	ガラ 6:11~18	イオ 3:13~17
十字架挙栄祭	コリ前 1:18~24	イオ 19:6~11,13~35
十字架挙栄祭後の主日	ガラ 2:16~20	マル 8:34~9:1
生神女進堂祭	エウ 9:1~7	ルカ 10:38~42,11:27~28
降誕祭前の前の主日	コロ 3:4~11	ルカ 14:16~24
降誕祭前の主日	エウ 11:9~10,17~23,32~40	マト 1:1~25
降誕祭	ガラ 4:4~7	マト 2:1~12
降誕祭後の主日	ガラ 1:11~19	マト 2:13~23
神現祭前の主日	ティ後 4:5~8	マル 1:1~8
神現祭（洗礼祭）	ティト 2:11~14,3:4~7	マト 3:13~17
神現祭後の主日	エフェ 4:7~13	マト 4:12~17
迎接祭	エウ 7:7~17	ルカ 2:22~40
生神女福音祭	エウ 2:11~18	ルカ 1:24~38
聖枝祭	フィ 4:4~9	イオ 12:1~18
昇天祭	使徒 1:1~12	ルカ 24:36~53
五旬祭	使徒 2:1~11	イオ 7:37~52, 8:12
頭栄祭（変容祭）	ペト後 1:10~19	マト 17:1~9
生神女就寝祭	フィ 2:5~11	ルカ 10:38~42,11:27~28

書名略

マト=マトフェイ伝

マル=マルコ伝

ルカ=ルカ伝

イオ=イオアン伝

使徒=使徒行実

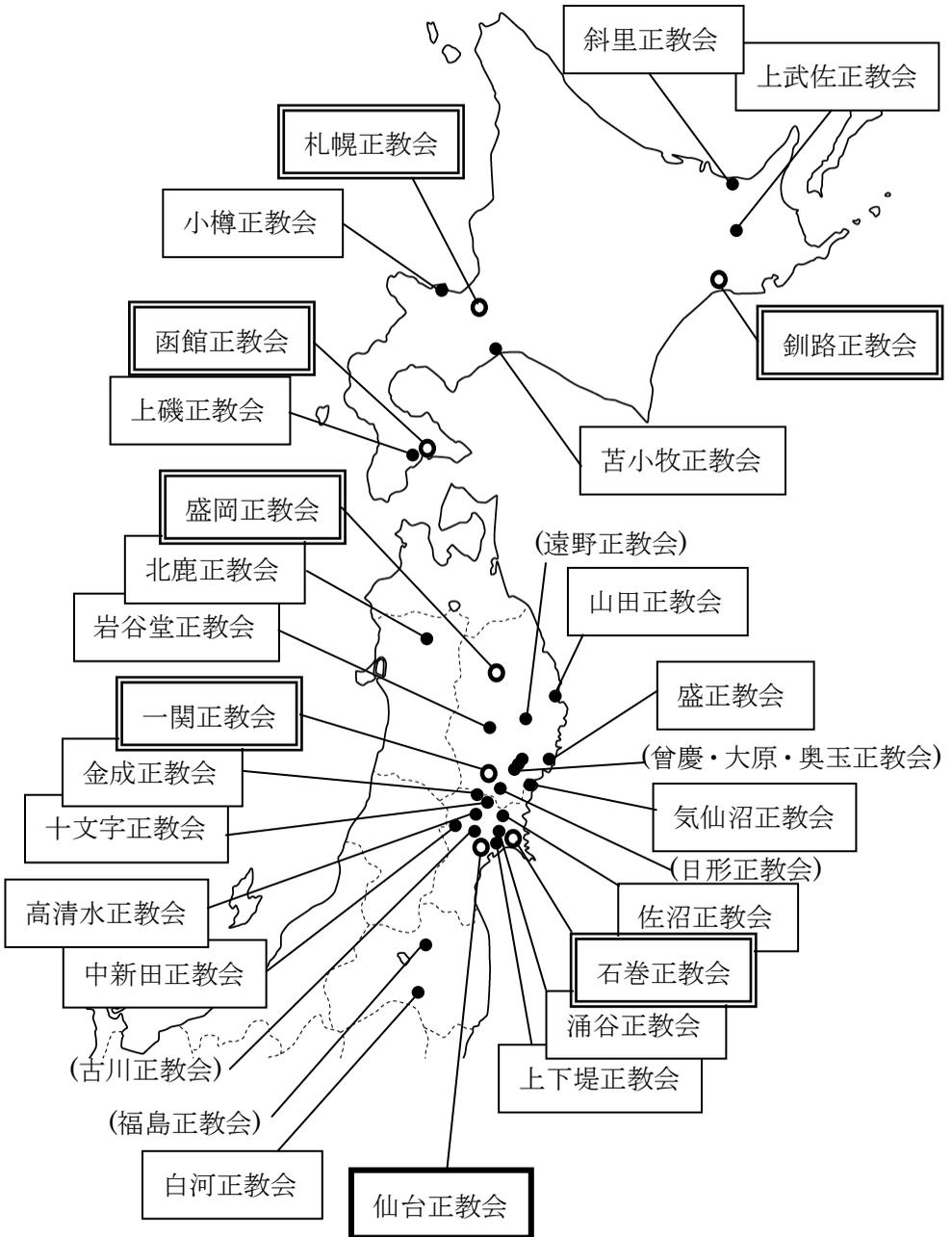
ロマ=ロマ書

コリ前=コリント前書 コリ後=コリント後書
 ガラ=ガラティヤ書 エフェ=エフェス書
 フィ=フィリッピ コロ=コロサイ書
 ティ前=ティモフェイ前書 ティ後=ティモフェイ後書
 エウ=エウレイ書 ペト後=ペトル後書

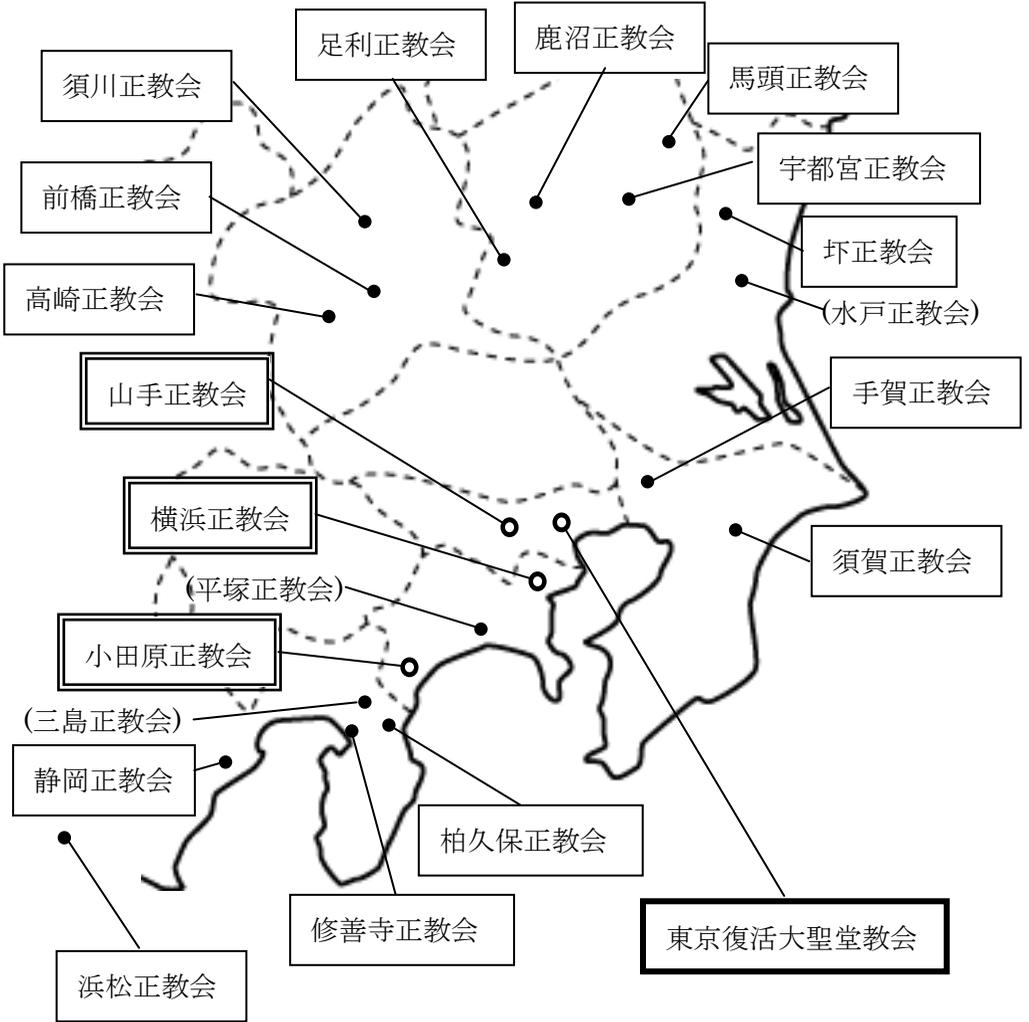
パスハリア (復活祭とそれに関連する暦の一覧)

	大斎の開始	聖枝祭	復活祭	五旬祭
2012年	2月27日	4月 8日	4月15日	6月 3日
2013年	3月18日	4月28日	5月 5日	6月23日
2014年	3月 3日	4月13日	4月20日	6月 8日
2015年	2月23日	4月 5日	4月12日	5月31日
2016年	3月14日	4月24日	5月 1日	6月19日
2017年	2月27日	4月 9日	4月16日	6月 4日
2018年	2月19日	4月 1日	4月 8日	5月27日
2019年	3月11日	4月21日	4月28日	6月16日
2020年	3月 2日	4月12日	4月19日	6月 7日
2021年	3月15日	4月25日	5月 2日	6月20日
2022年	3月 7日	4月17日	4月24日	6月12日
2023年	2月27日	4月 9日	4月16日	6月 4日
2024年	3月18日	4月28日	5月 5日	6月23日
2025年	3月 3日	4月13日	4月20日	6月 8日

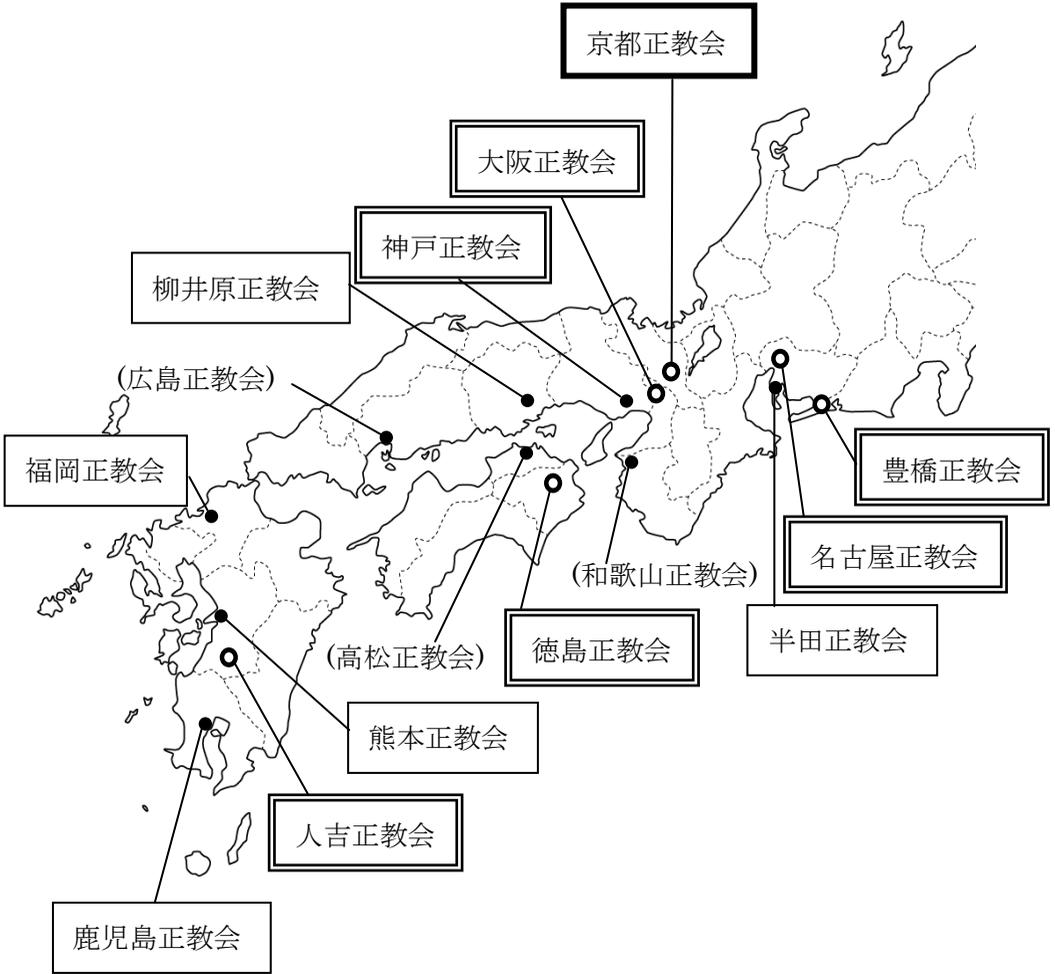
東日本主教教区



東京大主教教区



西日本主教教区



世界の正教会

独立正教会（アフトケファリア）

教会	国・都市
コンスタンチノーブル総主教庁	トルコ・イスタンブール
アレキサンドリア総主教庁	エジプト・アレクサンドリア
アンテオケ総主教庁	シリア・ダマスコ
エルサレム総主教庁	イスラエル・エレサレム
ロシア正教会（モスクワ総主教庁）	ロシア・モスクワ
グルジア正教会（総主教庁）	グルジア・トビリシ
セルビア正教会（総主教庁）	ユーゴスラビア・ベオグラード
ルーマニア正教会（総主教庁）	ルーマニア・ブカレスト
ブルガリア正教会（総主教庁）	ブルガリア・ソフィア
ギリシャ正教会	ギリシャ・アテネ
キプロス正教会	キプロス・ニコシア
アルバニア正教会	アルバニア・ティラナ
ポーランド正教会	ポーランド・ワルシャワ
チェコ・スロバキア正教会	チェコ・スロバキア
アメリカ正教会	アメリカ・ワシントン
ウクライナ正教会	（モスクワ総主教庁）

自治正教会（アフトノミア）

フィンランド正教会	フィンランド
日本正教会	日本
シナイ正教会	エジプト

その他

アフリカ諸国	オーストリア	スペイン	ハンガリー
アルゼンチン	オランダ	中国	フィリピン
イギリス	カナダ	チリ	ブラジル
イタリア	韓国	デンマーク	フランス
インド	クロアチア	ドイツ	ペルー
インドネシア	スイス	ニュージーランド	ベルギー
オーストラリア	スウェーデン	ノルウェー	メキシコ
			その他



⑤ 正教会用語集

用語が本文に使用されている場合、索引の便も兼ねて、その主なページ数を付加してあります。

【あ】

アガペー＜ギリシャ語＞ 真実の愛。…p85,175

アクシオス＜ギリシャ語＞ 「ふさわしい」「適任」という意味で、神品機密の時にとなえられる言葉。…p119

悪魔（あくま） 神に背いた天使のこと。本質的には天使と同じだが、目的が違う。天使は神に従順で人を救いに導くが、悪魔は神に反逆し人を滅びに誘う。…p74,94

亜使徒（あしと） 「亜」とは「～に次ぐ」もしくは「～と同等の」という意味で、12使徒と同じように福音を伝道することに卓越した働きをした聖人に附される称号。…p27

アダム＜ヘブライ語＞ 最初に創造された人間のこと。「赤土」という意味から派生している。広義には、人類全体を指す。…p72

アトス＜ギリシャ語＞ ギリシャの北方にある山で、いくつもの修道院が正教の信仰を守り続けていることで有名な聖地。…p163

アナフェマ＜ギリシャ語＞ 「絶滅させるべきもの」「呪われるべきもの」ということから「破門」という意味で使用される。

アナフォラ＜ギリシャ語＞ 聖体礼儀の中の「信経」の後から「常に福い」までの部分。

アナロイ＜ギリシャ語＞ イコンを載せたり、誦経や説教、または聖歌を歌うために使われる台のこと。…p153

アパテイア＜ギリシャ語＞ 自分を罪深さへと引きずる欲を制御すること。…p174

アルトス＜ギリシャ語＞ 復活祭で成聖される特別なパン。…p187

アンティドル<ギリシャ語> 「賜物（ドル）」の「代わり（アンティ）」という意味で聖体礼儀の後に分与される聖パン。…p188

アンティフォン<ギリシャ語> 聖歌を対になって歌うこと。もしくはその聖歌につけられたタイトル。…p123

アンティミンス<ギリシャ語> 聖人の不朽体の一部が縫い込まれた布で、聖体礼儀は必ずこの上で行われる。…p151

アンヴォン<ギリシャ語> 古い時代には聖堂中央にあり、説教や独唱をする時に用いられた高い壇。今はイコノスタスの前の聖所より少し高くなった場所を指す。

イイス<ギリシャ語> 「イエス」のギリシャ語もしくはロシア語読みを、カタカナで表記したもの。ヘブライ語では「ヨシュア」といい、「救う者」という意味を持つ人名。…p46,48

イイスの祈り 「主イイス・ハリストス、神の子よ、我、罪人を憐れみ給え」など短い言葉を絶え間なく祈る祈り。…p136

イコノスタス<ギリシャ語> 至聖所と聖所を区切る壁のことで、「イコンのついたて」という意味。「聖障」。…p147

イコン<ギリシャ語> 正教会で用いる、ハリストスや聖人たちの姿や聖書の中の物語などをえがいた絵。「聖像」。…p140,165

永眠（えいみん） 人が死ぬことを正教会でこう呼ぶ。…p176

役者（えきしゃ） 人のため或いは神のために仕え、つとめ、働く人。おもに「イピレティス」または「ディアコノス」の訳語。

エフレムの祝文（しゅくぶん） 大斎の時に伏拝と共にとなえる特別な祈り。シリアの聖エフレムの作とされる。

エワ<ヘブライ語> 最初に創造されたの女性。一般では「イブ」または「エバ」と言う。「生命」という意味をもつ。…p72

王門（おうもん） →天門

大斎（おおものいみ） 復活祭の前の準備期間で、特別に力を入れてとりくむので「大」がつく。「四旬斎」とも。…p129,132,172

オサンナ<ヘブライ語> ハリストスのエルサレム入城の時に

人々が叫んだ言葉で、117 聖詠 (118 詩編) がもと。「ホシアー・ナー (何とぞ、救い給え)」というヘブライ語の音訳。

オランテくらテン語 > 「祈り」という意味で、両手を広げて天をあおぐ姿勢のこと。非常に古い時代から行われてきた形で、神の恵みを呼びもとめる祈りを表す。

【か】

カタコンベくギリシャ語 > 初代教会が集会をしていた地下墓地。壁画が残されていることで有名。…p11,p140

カノンくギリシャ語 > (1) 正典となった聖書のこと。(2) 教会法のこと。(3) 聖歌の様式の一つ。…p64

カフィズマくギリシャ語 > 「座る」という意味のギリシャ語から来た語で、聖詠 150 編を 20 区分した、その一つ一つをいう。

感謝祈祷 (かんしゃきとう) →モレーベン

機密 (きみつ) 正教会では奉神礼における七つの儀式 (洗礼、傅膏、聖体、痛悔、婚配、神品、聖傅) のことを指す。ラテン語では「サクラメント」。ギリシャ語では「ミステリオン」。…p101,114

旧暦 (きゅうれき) ユリウス暦のこと。現在、新暦と 13 日のずれがある。→新暦 …p130

教衆 (きょうしゅう) 副輔祭、誦経者、指揮者など、「神品」以外の奉神礼における奉仕者。…p162

窘逐 (きんちく) 迫害のこと。

携香女 (けいこうじょ) 葬られた^{キリスト}のために香料を携えて墓を訪れ、最初に主の復活を知った女性たちのこと。

啓蒙者 (けいもうしゃ) これから正教徒になろうとする人。…p122

啓蒙所 (けいもうじょ) 聖堂の入口付近の場所。参拝した啓蒙者が立つところ。…p147

蓋 (けだし) 「なぜなら～だから」という意味をもつ言葉。

ケノーシスくギリシャ語 > 神が人となり死の世界までも「へりく

だったこと」を意味する言葉。…p84

降誕（こうたん） イイスス・ハリストスが天より降り、この世にお生まれになったことを言う。

光明週（こうめいしゅう） 復活祭の後の一週間

克肖（こくしょう） 聖人に対して（特に修道を極めた聖人）つけられるタイトル。「肖」には「神に似せて造られた人間のあるべき姿」という意味合いがある。…p79

五旬節（ごじゅんせつ） 「聖神降臨祭」のことを「五旬祭」といい、復活祭から50日の期間を「五旬節」という。…p129,167

御聖体（ごせいいたい） 聖体礼儀において、ハリストスの体と血になったパンとぶどう酒のこと。…p116

羔（こひつじ） 聖体礼儀においてイイスス・ハリストスの体となるパンのこと。…p150

【さ】

祭服（さいふく） 正教会の奉神礼において神品やその補助をする者が身につける特別な衣服。…p153

再臨（さいりん） イイスス・ハリストスが、この世の終わりに、全人類を審判するために再び到来されること。…p10,p108

シネルギイ<ギリシャ語> 神の力と人の力が合わさること。…p89

サワオフ<ヘブライ語> 一般では「万軍の」と訳される言葉。

時課（じか） もともと一日を八つの時間に分けて祈る習慣から生まれた祈りで、「晩課」「早課」「第一時課」などがある。…p124

至聖所（しせいじょ） 聖堂の中の奥に設けられた場所。イコノスタスで仕切りで区切られており、聖職者かその手伝いをする者が入って奉神礼を行う。…p147

使徒（しと） ハリストスの弟子のこと。主に福音を伝道する働きをするようになった時、この名で呼ばれる。…p10

使徒の齋(しとのものいみ) 第一主日の翌日から始まる齋。…p132

シノド<ギリシャ語> →聖務会院

十二大祭(じゅうにたいさい) ハリストスおよびマリヤに関する十二の大きな祭。…p131

十字行(じゅうじこう) 大十字架やイコンなどをもって行列を作り行進すること。…p186

十二福音(じゅうにふくいん) 受難週の聖大木曜日の夜に行われる「聖大金曜日の早課」の中の祈祷で、四つの福音書に記されているハリストスの受難の場面を、12分割したもの。

主教(しゅきょう) 使徒の後継者として教会を監督し、教えを伝え、奉神礼を行う指導者。カトリックでは「司教」。…p7,p160

祝文(しゅくぶん) 祈りの言葉。祈祷文。…p134

受洗者(じゅせんしゃ) 洗礼を受けた者。

授洗者(じゅせんしゃ) ハリストスに洗礼を授けた前駆イオアンのこと。

受難週(じゅなんしゅう) 復活祭の前の一週間。ハリストスの受難を記憶する特別な奉神礼が行われる。…p132

掌院(しょういん) 「アルヒマンドリト」とも。修道院の院長もしくは主教に叙聖される前の段階の司祭。…p161

誦経(しょうけい) 公の奉神礼で祈祷文を読み祈ること。「誦経」する者として祝福された人を「誦経者」という。

昇天(しょうてん) ハリストスが、人を天に昇らせるために、復活後40日目に天に昇っていったことをいう。…p37

生神女(しょうしんじょ) ギリシャ語「テオトコス」の訳語で、「ハリストス神を生んだ女性」であるマリヤのこと。…p47,p77

信経(しんけい) 正教会における信仰箇条。…p36~

神性(しんせい) ハリストスの神としての性質のこと。…p47,p157

人性(じんせい) ハリストスの人としての性質のこと。…p47,p157

真福九端(しんぷくきゅうたん) マト^マフェイ^ヱ伝5章にあるハリス

トスの最初の教え。九つのフレーズからなる。聖体礼儀において
第三アンティフォンとして歌われる。…p123

神品（しんぴん） 主教、司祭、輔祭の役職の総称。…p160

新暦（しんれき） グレゴリオ暦。一般に用いられる暦。…p130

スポタくヘブライ語 土曜日のこと。ヘブライ語「シャバット」
を音訳したもので、「安息日」という意味。…p127

聖詠（せいえい） 「詩編」のことを正教会ではこう呼ぶ。

聖歌（せいか） 正教会の奉神礼の中で歌われる歌の総称。正教会
では「讚美歌」とは言わない。…p7,p26,p168

聖膏（せいこう） 傅膏機密の時に塗られる特別な油。…p116

聖所（せいじょ） 聖堂の中央部分。参拝した信徒が立つ。…p147

聖師父（せいしふ） 教会の歴史の中で優れた教えを残した聖人た
ちのこと。一般では「教父（きょうふ）」。…p7,p16,p64,p77

聖神（せいしん） 至聖三者の一つの位格。一般では「聖霊」と呼
ばれる。…p51

聖人（せいじん） 聖書の時代から今日まで、正教会において公に
聖なる人と認められた者のこと。…p78

成聖（せいせい） 聖にされること。聖水を注いで行う祈禱。…p179

聖像（せいぞう）→イコン

聖体礼儀（せいたいれいぎ） 御聖体をいただく奉神礼。カトリッ
クでは「ミサ」、プロテスタントでは「聖餐式」などと言うが、そ
れらの内容や意味は聖体礼儀とは全く異なる。…p116,p119

聖伝（せいでん） 正教会の伝統。…p6,p62~

聖堂（せいどう） 聖体礼儀などの奉神礼が行われる建物。…p145

聖パン 奉神礼で使用されるパン。特に聖体礼儀で使われるものは
「プロスフォラ」と呼ばれる。…p188

聖パン記憶（せいパンきおく） 聖パンを切り分けて生者・死者の
ために祈ること。…p187

聖務会院（せいむかいいん） ロシアにおいて総主教制度廃止の時

代にとられていた教会の制度。「シノド」とも言う。…p22

聖変化（せいへんか） 聖体礼儀においてパンとぶどう酒がハリストスの尊体尊血になること。…p120

藉身（せきしん） 神が人となったこと。一般では「受肉」。…p37,p46

摂理（せつり） この世に対する神の配慮のこと…p103~

セラフィム<ヘブライ語> 天使の九つの階級のうち最上級の名称。一般では「セラピム」。…p94

属神（ぞくしん） ギリシャ語「プネウマティコス」の訳語で、一般では「霊的」「霊的な」と訳される。…p93

【た】

代父（だいふ） 受洗者にとって父の役割をもつ人。…p184

代母（だいぼ） 受洗者にとって母の役割をもつ人。…p184

代父（だいし） 代父母との関係で子に相当する人。…p184

単意論（たんいろん） ハリストスに神としての意志一つしか認めない異端。…p48

単性論（たんせいろん） ハリストスに神としての性質一つしか認めない異端。…p47

致命（ちめい） 信仰のために命をささげることという。一般では「殉教」。…p12,p79

チョトキ<スラブ語> 「イイススの祈り」を行う時に使う、布で編まれた数珠。コンボスキニオンとも言う。…p136,

痛悔（つうかい） いわゆる「悔い改め」という幅広い意味と、狭義に「機密」としての「痛悔」を指す意味をもつ。…p117,p135

テオシス<ギリシャ語> 人が神の本性にあずかること。正教会では「神成」、一般では「神化」と訳される。…p89

定額献金（ていがくけんきん） 教会のために定期的に一定額を献げる献金。…p182

弟子（でし） ハリストスに従って福音を体得し伝道した人々。正

教会では「門徒」という言い方も。…p5,p10

典院（てんいん） 高位の修道司祭の称号。「指導」という意味をもつ「イグーメン」とも。…p161

転達（てんたつ） 「とりなし」もしくは「仲介」の意。…p79

天堂（てんどう） ギリシャ語「パラダイス」の訳語。「樂園」。

天使（てんし） ギリシャ語「アンゲロス」の訳。正教会では他に「神の使い」「神使（しんし）」などとも言う。…p93

天門（てんもん） イコノスタスの中央にある、至聖所（天）と聖所（地）を結ぶ門。「王門」とも言う。…p147

堂祭（どうさい） その聖堂の名の祭。…p146

糖飯（とうはん） 永眠の記憶のために穀物を炊いて甘く味つけしたもの。復活や天国を象る。…p187

トロパリ<ギリシャ語> その日のテーマを伝える働きをする短い祈禱文（聖歌）。「讃詞」という漢字が当てられる。…p122

【な】

七十人訳（ななじゅうにんやく） 紀元前2世紀ごろにギリシャ語に訳された旧約聖書。…p68

就寝聖像（ねむりのせいぞう） 十字架からとりおろされて布に包まれたハリストスを描いたアイコンで、受難週の奉神礼で担がれて十字行が行われる。…p153

【は】

パスハ<ヘブライ語> ①旧約時代の「過ぎ越しの祭」またはその食事。②その「過ぎ越しの祭」の成就である復活祭のこと。

パナギア<ギリシャ語> 「至聖なる」という意味で生神女のことを言う。また主教がさげるマリヤのペンダントのこと。…p78

パニヒダ<ギリシャ語> 「徹夜の歌」という意味で、死者のために行われる奉神礼の一つ。…p177

- パラクレートス<ギリシャ語>** 神・聖神を形容する言葉で、正教会では「なぐさむる者」または「撫恤者（ぶじゅつしゃ）」、口語訳では「助け主」、新共同訳では「弁護者」と訳される。…p54
- ハリストス<ギリシャ語>** ヘブライ語の「メシア（油つけられた者＝救世主）」のギリシャ語訳。一般では「キリスト」。…p46,p49
- パレミヤ<ギリシャ語>** 奉神礼で読まれる旧約聖書。
- 否定神学（ひていしんがく）** 神を否定文で表現する神学。…p98
- ヒポスタシス<ギリシャ語>** 「位格」とか「人格」と訳される個としての存在。この書では神の位格を「神格」と表現した。…p42
- フィリオケ<ラテン語>** 「子からも」という意味。ローマ・カトリックで聖神の発出に関して信経に追加された言葉。…p31,p52
- フィリップの斎（ものいみ）** 降誕祭の前の斎。…p132
- フィロカリア<ギリシャ語>** 祈りに関する聖師父たちの言葉を集成した本。「善を愛する」という意味。…p136
- 福音（ふくいん）** 「エヴァンゲリオン」というギリシャ語の翻訳。「喜ばしいこと」「幸福」を「伝える」「知らせる」という意味。正教会では受胎告知のことも「福音」という。…p11,p69,p131
- 不朽体（ふきゅうたい）** 聖人の体またはその一部で、神の恩寵が彼等をとおして働きつづけることから「不朽体」という。…p100
- 撫恤者（ぶじゅつしゃ）** →「パラクレートス」
- プロスフォラ<ギリシャ語>** 聖体礼儀のために使用される聖パンのこと。…p188
- ヘジカズム<ギリシャ語>** 絶え間ない祈りによって神との交わりをもつこと。「静寂主義」とも訳される。…p136
- ヘルヴィム<ヘブライ語>** 天使の九階級の第二位の名称。一般では「ケルビム」。創世記3章、出エジプト記25章参照。…p94
- 変容（へんよう）** ハリストスが山において弟子たちの前で光り輝く姿に変わったこと…p131,p189
- 奉献礼儀（ほうけんれいぎ）** 御聖体となるパンとぶどう酒の準備

をするための祈祷。…p121

宝座（ほうざ） 天の御座を象る至聖所の中央にある台。…p148

奉神礼（ほうしんれい） 正教会で行われる祈祷・礼儀の総称。…
p6,p63,p114

輔祭（ほさい） 奉神礼において主教や司祭の補助をする人のことを指す。カトリックでは「助祭」という。…p161

ポロキメン<ギリシャ語> 「前に（ポロ）」「置く（キメン）」という意味、パレミヤ、使徒経、福音経などの読みの前に歌われる聖歌。そのほとんどは聖詠からの引用。…p123

【ま】

埋葬式（まいそうしき） 正教会における葬儀のこと。…p176

齋（ものいみ） 食の制限を中心とした節制の生活。…p132,p172

モレーベン<スラブ語> さまざまな機会に感謝を捧げるために行われる「感謝祈祷」のこと。…p178

【や】

勇毅（ゆうぎ） ギリシャ語「イスヒロス」の訳語で、「力」「強さ」「大きな能力」という意味。

佯狂者（ようきょうしゃ） 外見は狂っているように見えるが、その実はハリストスのためにすべてを捨てた聖人のこと。…p79

ユーカリスト<ギリシャ語> 「感謝」という意味で、聖体礼儀のことをこう呼ぶ。…p122

預言者（よげんしゃ） 旧約時代に、聖神の力を受けて神の言葉を人々へ伝えた者のこと。…p53

予定（よてい） 神が予め全てを定めているという考え。…p105

予知（よち） 神が予め全てを知っているという考え。…p105

予備聖体（よびせいたい） 聖大木曜日の聖体礼儀において作られ一年間保管される御聖体。…p152

【ら】

リティヤ<ギリシャ語> 「懇願」「熱心な祈り」という意味。① 祭日の晩課で啓蒙所にて行われる特別な連禱（その後で五つのパンを祝福する）のこと、②死者のために祈る短い祈禱（パニヒダの最後の部分に相当）のこと。…p177,p188

リトゥルギア<ギリシャ語> 「公の仕事」という意味で、「奉神礼」のこと。…p114

律法（りっぽう） 神の戒め、掟。旧約聖書の最初の五つの書（「モーセ五書」）のことも指す。

領聖（りょうせい） 「御聖体」をいただくこと。…p116,p169

リヤサ<スラブ語> 修道士や神品もしくは教役者が着る長い衣。袖が短い形のもの「ポドリヤサ」とも言われる。主に黒い色が多い。…p162

列聖（れっせい） 聖人として公に認めること。…p79

炉儀（ろぎ） 宝座、イコン、参拝者などに向かって香炉を振ること。…p152

正教会の手引

初版 2004年11月

改訂 2013年 5月

編著 司祭 ダヴィド 水口優明

発行 日本ハリストス正教会教団 全国宣教委員会
